

たつの市

# 竹原中山遺跡

2006年3月

兵庫県教育委員会

たつの市

# 竹原中山遺跡

2006年3月

兵庫県教育委員会

## 例言

1. 本書は兵庫県たつの市揖西町竹原字中山に所在する竹原中山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は日本道路公団が計画している山陽自動車道新宮インターチェンジ（播磨自動車道）建設事業に伴う発掘調査報告書である。
3. 山陽自動車道新宮インターチェンジ建設事業に伴う分布調査は平成6年度に実施されたが未確認の遺跡であった。その後、工事実施に伴い不時発見された遺跡である。そのため平成11年度に急速確認調査を実施した。兵庫県教育委員会が主体となり、甲斐昭光・川村慎也・田中秀明が担当した。
4. 本発掘（余面）調査は、同じ平成11年度に同じく兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。調査は山本三郎・渡辺昇が担当した。
5. 調査で使用した方位は国土地籍第V系を使用した。また、水準は日本道路公団設定のB.M.を使用した東京湾平均海水準である。
6. 個別遺構図・土層断面図などは調査員が実測したものであるが、遺構図は（株）サンコムに委託したものである。
7. 写真は調査員が撮影した。ただし空中写真については、国版1が国土地理院撮影、それ以外については（株）サンコム撮影のものである。
8. 整理作業は、平成17年度に日本道路公団大阪建設局と委託契約をかわして兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で行った。
9. 執筆は各担当者が行った。I-2を甲斐昭光が、Vを山本三郎が、VIを株式会社パレオ・ラボが、その他を渡辺昇が担当した。編集は伴悦子の協力を得て渡辺昇が行った。
10. 本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5分）ならびに同魚住分館（明石市魚住町清水3丁合池ノ下630-1）に保管している。ご活用下さい。
11. 発掘調査・整理調査にあたって、下記の方々・機関のご協力・ご指導を得ました。感謝致します。  
(敬称略)  
市村高規・たつの市教育委員会・正和建設
12. 発掘調査・整理調査にあたって、下記の方々・機関のご協力・ご指導を得ました。感謝致します。  
(敬称略)



第1図 竹原中山遺跡の位置

## 本文目次

### 例言

I はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 確認調査の経過と結果	1
3. 全面調査の経過	3
4. 整理作業の経過	5
II 位置と環境	6
III 調査結果	9
1. 近世の遺構	9
2. 中世の遺構	9
3. 弥生時代の遺構	11
IV 出土遺物	16
1. 弥生土器	
2. 須恵器	
3. 鉄器	
4. 石器	
V 総括	24
VI 自然科学的分析	
1. 竹原中山遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定	61
2. 竹原中山遺跡出土サヌカイトの産地推定	64
VII おわりに	67

## 挿図目次

第1図 竹原中山遺跡の位置	
第2図 弥生I・羅拓本	19
第3図 須恵器実測図	20
第4図 鉄器実測図	20
第5図 播磨地域の弥生時代中期土器編年案の比較	24
第6図 指保川下流域の弥生時代中期後半土器編年試案	25
第7図 竹原中山遺跡の竪穴住居の配置形態	31
第8図 六角型住居とその関連の竪穴住居	34
第9図 指保川下流域の基礎地域	37
第10図 麟久山・前地遺跡の遺構	39
第11図 中垣内大神山遺跡の遺構	41
第12図 橋特山遺跡の範囲	45
第13図 橋特山遺跡からの眺望	45
第14図 山田遺跡の竪穴住居の分布	45
第15図 魁田遺跡の竪穴住居の配置と石器の組成	48

## 図版目次

図版1 竹原中山遺跡の位置と周辺の遺跡	
図版2 新宮インター関連調査遺跡位置図	
図版3 竹原中山遺跡平面図	
図版4 遺構平面図	
図版5 上層・下層構造平面図	
図版6 土層断面図	
図版7 SH01 実測図	

- 図版 8 SH02・03・04・08 実測図  
 図版 9 SH05・SX07 実測図  
 図版10 SH06 実測図  
 図版11 SH09・10 実測図  
 図版12 SH11・12 実測図  
 図版13 SH13・14・15 実測図  
 図版14 SK01・ST01 実測図  
 図版15 SX01・04 実測図  
 図版16 出土遺物実測図（1）  
 図版17 出土遺物実測図（2）  
 図版18 山土遺物実測図（3）  
 図版19 山土遺物実測図（4）  
 図版20 山土遺物実測図（5）

## 写真図版目次

- 写真図版 1 竹原中山遺跡周辺空中写真（国土地理院撮影）  
 写真図版 2 上 竹原中山遺跡遠景（北上空から）  
     下 竹原中山遺跡遠景（南上空から）  
 写真図版 3 上 竹原中山遺跡と揖西平野（北上空から）  
     下 揖西平野と揖保川（北、的場山から）  
 写真図版 4 上 竹原中山遺跡遠景（北上空から）  
     下 竹原中山遺跡遠景（南上空から）  
 写真図版 5 上 竹原中山遺跡からの眺望（東、揖西平野）  
     下 竹原中山遺跡からの眺望（南側）  
 写真図版 6 上 竹原中山遺跡遠景（東上空から）  
     下 竹原中山遺跡遠景（上空から）  
 写真図版 7 上 遺跡北半全景（東から）  
     下 遺跡北半全景（南東から）  
 写真図版 8 上 竹原中山遺跡全景（北西から）  
     下 竹原中山遺跡空中写真  
 写真図版 9 竹原中山遺跡空中写真  
 写真図版 10 上 遺跡全景（北西から）  
     中 遺跡北半全景（南から）  
     下 東側谷部北壁堆積状況（南から）  
 写真図版 11 上 SH01 全景（南から）  
     中左 SH01 西側壁溝（南西から）  
     中右 SH01 東側壁溝（南から）  
     下左 SH01 土坑（南から）  
     下右 SH01 柱穴（南から）  
 写真図版 12 上 SH01 堆積状況（南西から）  
     中左 SH01 燃失状況（南から）  
     中右 SH01 土器出土状態（北から）  
     下 SH01 燃失状況（南から）  
 写真図版 13 上 SH02 全景（南から）  
     下 SH02 全景（西から）  
 写真図版 14 上 SH02・SH03 全景（北から）  
     下 SH02・SH03 全景（西から）  
 写真図版 15 上 SH03 全景（南東から）  
     下左 SH03 窑溝（南から）  
     下右上 SH03 全景（北東から）  
     下右下 SH03 窑溝アゼ（南から）  
 写真図版 16 上 SH04・SH08 全景（南から）

中	SH04・SH08 全景（西から）
下左	SH04 壁溝（西から）
下右	SH04 中央溝（北から）
写真図版 17上	SH04・08・SH05（北西から）
中左	SH04 P01（南から）
中右	SH04 土器出土状態（西から）
下左	SH04 P02（南から）
下右	SH04 土器出土状態（南から）
写真図版 18上	SH05・SH06（北西から）
下	SH06（後方SH05、南から）
写真図版 19上	SH05 堆積（検出）状況（南から）
中左	SH05 壁溝（南から）
中右	SH05 土器出土状態（西から）
下左	SH05 壁溝（南から）
下右	SH05 土坑（南から）
写真図版 20上	SH05（南から）
下	SH05（南西から）
写真図版 21	SH06（後方 SH05・SH04、南から）
写真図版 22上左	SH06 P01（南から）
上右	SH06 土器出土状態（南から）
中左	SH06 P02（南から）
中右	SH06 中央土坑（南西から）
下左上	SH06 弧溝（西から）
下左下	SH06 壁溝（東から）
下右	SH06 潛状土坑（西から）
写真図版 23上	SH06 全景（東から）
下	SH06 全景（南から）
写真図版 24上	SH09・SH10 全景（南から）
下	SH09・SH10 全景（西から）
写真図版 25上左	SH09 床面焼土の状況（南から）
上右	SH09 床面焼土の状況（南から）
中	SH11 全景（南から）
下左	SH11 P02（南から）
下右	SH11 壁溝（南西から）
写真図版 26上	SH12 全景（南から）
中左	SH12 P01（南から）
中右	SH12 P03（南から）
下左	SH12 P02（南から）
下右	SH12 壁溝（南から）
写真図版 27上	SH13 全景（南東から）
中左	SH13 床面焼土の状況（東から）
中右	SH13 西側壁溝（北東から）
下左	SH13 中央土坑（北東から）
下右	SH13 北側壁溝（北東から）
写真図版 28上	SH13 全景（後方SH12、北東から）
下	SH13・SH14 全景（北から）
写真図版 29上	SH15 全景（東から）
中左	SH15 床面焼土の状況（東から）
中右	SH15 壁溝（南から）
下左	SH15 焼土の状況（南から）
下右	SH15 全景（東から）
写真図版 30上	SX01 周辺 堆積状況（東から）
中	SX01・SK01（東から）

下左	SX01 堆積状況（東から）
下右	SX01 （南から）
写真図版 31上左	SX03 （南から）
上右	SX04 （北から）
中	SX07 堆積状況（南から）
下	SX07 全景（西から）
写真図版 32上	SD01・SD02・SD06 （北西から）
下左上	SD01 （北から）
下左下	SD02 （南から）
下右	SD04 （南から）
写真図版 33上	SD04・SD07・SD08 （南から）
中左	SD08 （南から）
中右	SD10 （南西から）
下左	SD09 （南西から）
下右	SD11 （南から）
写真図版 34上	SD09～SD12 （北から）
下	SD09～SD12 （南から）
写真図版 35上左	ST01 （南から）
上右	ST01 （蓋除去後、南から）
中	ST01 （西から）
下	ST01 （東から）
写真図版 36上	SK01 堆積状況（南から）
下	SK01 全景（東から）
写真図版 37上	SK01 全景（南から）
中左	SK02 堆積状況（南から）
中右	SK03 （南から）
下左	SK02 （南から）
下右	SK04 （南西から）
写真図版 38	出土土器（1）
写真図版 39	出土土器（2）
写真図版 40	出土土器（3）
写真図版 41	出土土器（4）
写真図版 42	出土土器（5）
写真図版 43	出土土器（6）・鉄器
写真図版 44	出土石器（1）
写真図版 45	出土石器（2）

## I はじめに

### 1. 調査に至る経緯

日本道路公団では、山陽自動車道新宮インターチェンジ建設事業を計画進めていた。現在、播磨道と呼称している高速自動車道で、山陽自動車道竜野西インターチェンジ西側（播磨ジャンクション）から分岐して播磨科学公園都市にかけての延長12.8kmの道路である。播磨科学公園都市は、兵庫県が推進している西播磨テクノポリス計画に必要不可欠な重要な事業である。2002年に供用が開始されている。将来的には鳥取まで延伸が計画されており、順次施工されている。

事業地内の埋蔵文化財の有無については、計画段階の早い時期から照会があり、日本道路公団と兵庫県教育委員会の間で協議がなされていた。周知の埋蔵文化財包藏地以外にも遺跡が存在する可能性があることから、1993年4月に兵庫県教育委員会によって分布調査が実施された。その結果などを基に、1997年から順次調査を実施している。確認調査は計14地点を対象として行われた。全面調査（現在の本発掘調査）も小犬丸遺跡をはじめ6地点で継続的に兵庫県教育委員会によって行われている。

たつの市揖西町は早くから多くの遺跡が知られている地域で、揖西平野の南線尾根上には養久山古墳群・龍子三ツ塚古墳群などの弥生時代から古墳時代にかけての古墳発生を考える遺跡が広がっている。また、平野北側には古代山陽道が東西に通り、道に沿って小神庵寺・中垣内遺跡・小犬丸遺跡（布勢駅家）が存在する。それ以外にも西宮山古墳・長尾タイ山古墳群などが広がっており、遺跡の稠密地帯である。竹原中山遺跡周辺は、相生窯跡群の一部である竹原窯跡群や弥生時代から平安時代にかけての竹原遺跡が知られている。たつの市教育委員会によっても多くの遺跡が調査されている地域である。

今回、発掘調査を実施した竹原中山遺跡は、樹木が繁茂していたことなどから、遺跡の存在は分布調査では指摘されていなかった。しかし、本体工事に先立つ樹木伐採用の重機道建設によって、遺物が確認されたことから、確認調査を実施することになった。2つの尾根から、弥生土器・砥石・サヌカイト片・須恵器が採集されており、小字名をとり竹原中山遺跡とした。不時発見の遺跡であることから、急遽日本道路公団関西支社姫路工事事務所と兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の間で協議が行われ、早急な対応をすることとなった。

### 2. 確認調査の経過と結果

調査対象地は、竹原集落に向かって南北方向に張り出した南北2つの尾根の、標高70~90m付近にある。各々南地区・北地区と呼称し、南地区から確認調査を開始した。調査前は大型機械による樹木の伐採が終了していたため、調査地にはその際の重機道が深く刻まれていた。

弥生時代の集落と平安時代の須恵器窯の存在を想定し、尾根後線や遺物が多く採集されている箇所を中心にトレントを設定した。重機道部分では、旧地形が削平されていることから、壁面精査による情報収集につとめた部分が大半である。また、本來遺構が含まれていなかった、あるいはその後の崩落などで遺構の存在する可能性が極めて低いと判断された急斜面にはトレントは設定しなかった。

トレントでは、バックホウによる表土層の掘削と人力による掘削・精査を行った。

調査は1999年12月6日に開始し、必要に応じて写真撮影・実測等の作業を行いながら、12月10日に北地区のトレントを埋め戻して、現地での調査を終了した。調査最終日に現地で日本道路公団担当者と調査結果を報告し、協議を行った。遺跡範囲については、赤杭・ポールを設置し明示した。

## ①南地区的調査

調査対象面積は、約2,600m<sup>2</sup>である。ここに8本、約135m<sup>2</sup>のトレンチを設定した。基本土層は、上から腐植土・流土・地山である。

いずれのトレンチにおいても遺構は認められなかった。1トレンチからは土師質の土器、須恵器の小片が出土したが、各1点と少なく遺構に伴っていない。調査区外上方からの流入によるものと判断できる。

## ②北地区的調査

調査対象面積は約4,400m<sup>2</sup>である。ここに24本、約297m<sup>2</sup>のトレンチを設定し、調査を実施した。基本土層は南地区同様、上層から腐植土・流土・地山である。

弥生時代の集落の存在を想定し、尾根稜線の平坦部、土器の多く出土していた南斜面を中心にトレンチを設定した。また北東斜面にも須恵器窯を想定してトレンチを設けた。

以下に述べるように、竪穴住居跡4棟、土坑4基、柱穴1個、溝3条が検出された。遺物を含まず時期不明のものもあるが、これら遺構の大半は弥生時代中期末の畿内第IV様式併行期の所産である。

### 1.2トレンチ

調査対象地の最高所の、比較的急な傾斜地に設定した。2トレンチは重機道崖面の精査を行った。遺構・遺物は認められない。

### 3トレンチ

小規模な谷の北側に位置する。重機道崖面の精査を行った。遺構・遺物は認められない。

### 4.5.16.23トレンチ

尾根稜線平坦部の基部にあたる。4トレンチでは時期不明の溝が検出された。

16トレンチ南半で周壁溝と思われる円形の溝が検出された。直徑4.5mの竪穴住居跡の東端を検出したものと思われる。また、この溝の東方で土器が多く含む円形の柱穴を1基確認した。トレンチ北半は縦りの悪い流土が厚く堆積しており、これは上方から続く小規模な谷内の堆積物と思われる。

### 7~11.14.15.24トレンチ

尾根稜線平坦部の中央にあたる。

8トレンチは重機道の直下であるが、土坑が2基残存していた。北方の土坑の埋土には炭片や焼土が多く含まれている。出土土器は弥生時代中期末、弥生時代終末期かと思われるものが混在している。

9トレンチではトレンチに斜交する土坑を検出した。北隅には炭層が堆積している。

14トレンチ南端では竪穴住居跡と思われる地山の落ちを確認した。

### 17.22トレンチ

尾根稜線平坦部の先端にあたる。17

トレンチの北端では円形の竪穴住居跡の一部が検出され、その南端において周壁溝と床面を確認した。埋土に土器と拳大の礫を多く含む。

### 6.18~21トレンチ

尾根稜線より南の緩斜面にあたる。

18トレンチで溝が、19トレンチで竪穴住居跡が検出された。

19トレンチの竪穴住居跡は、14トレンチ



調査風景

ンチの堅穴住居跡の直下にある。斜面上方を深く掘り込んで水平な床面を削り出している。

### 12.13トレント

尾根稜線北東側の谷部にある。重機道崖面の精査を行った。13トレントで土器が1片出土したが、遺構は認められず、上層から転落したものと思われる。

南地区では遺構は確認されなかった。重機道によって破壊された可能性も考えられる。北地区の尾根稜線平坦部から南斜面にかけて、弥生時代中期末頃を主体とする集落遺跡の存在することが判明した。山麓との比高差は約40mであり、4棟の堅穴住居、狼煙台の可能性のある焼土坑をはじめとする各種の遺構で構成される、いわゆる高地性集落であることが明らかとなった。

#### 調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

企画調整班 調査専門員 山本三郎

主査 別府洋二

調査第2班 主任調査専門員 池田正男

調査担当 調査第2班 主査 甲斐昭光

臨時の任用職員 川村慎也

臨時の任用職員 田中秀明



調査風景

### 3. 全面調査の経過

確認調査の結果、約1,700m<sup>2</sup>の全面調査が必要となった。兵庫県教育委員会の年間計画は定まっていたが、不時発見の遺跡で、本体工事が着工されていたことからも、年度内の調査が必要となった。そのため、調査計画を組み替えるとともに、調査班をえた現場の編成を行って対応することとなった。

調査は1月24日（月）に現地立会を行い、確認調査結果による調査範囲を確認し、調査用の杭を打設した。この週は調査準備を行う。調査前の草刈や測量、斜面であることからの安全対策を講じた。週末に測量を受託した（株）サンコムとも現地で打合せを行う。引き続き機械掘削を行い、翌週へかけて継続する。ベルトコンベアや発電機など機材を搬入する。翌週2月1日（火）から人力掘削を開始した。主に中央センターライン以東から調査を行った。2日（水）には現場事務所で安全大会を行った。ビデオを見てから安全対策を検討した。西から東に向かって人力掘削を行い、部分的に遺構面の精査にかかった。遺構の検出された地点については順次、遺構検出をするとともに遺構の掘り下げを行った。堆積状況のアゼの写真撮



調査風景



調査風景

影・実測を随時行いつつ、遺構精査・全景写真などの記録作成を人力掘削を行うとともに平行して実施していった。尾根筋のみ新しい時期の遺構と弥生時代の遺構面があることが確認されたので、上層遺構のみ作業を先行させて全景写真を撮影した。下層遺構調査のために大きく振り下げる主に尾根部分については空中写真測量が不可能なので、割り付けを行い20分の1の実測図を手測で実施した。

全体に地山面（下層遺構面）まで下げ、遺構の精査を行いつつ、全景写真を空中写真撮影と併せて2月22日に実施した。その後、断ち割り作業や補足作業を行い、3月8日にすべての作業を終了した。途中大雪警報も出され、作業が2日間中断せざるを得なかつたが、無事終了することができた。大雪の中を含めて寒冷時に毎日一宮町から通って戴いた正和建設の方々と、本体工事及び発掘工事を受託し協力を惜しまなかつた（株）神崎組に感謝致します。

#### 調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長	寺内幸治
副所長	大村敬通
総務課	課長 岩澤重則
企画調整班	調査専門員 山本三郎 主査 高瀬一嘉 事務職員 山野慎一
復興調査班	調査専門員 小川良太
調査担当	企画調整班 調査専門員 山本三郎 復興調査班 主査 渡辺 界
作業委託	株式会社 神崎組
	現場代理人 篠増智之



調査風景



調査風景

#### 4. 整理作業の経過

整理作業は、平成17年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で単年度事業として実施した。すべての作業を埋蔵文化財調査事務所で行った。単年度事業であることから、年度当初から作業を開始し、報告書刊行まで行った。

##### 調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長	平岡憲昭
総務課	主幹 大西義明
	主査 若狭健利
整理保存班	主任調査専門員 池田正男
	主査 森内秀造
	主査 菊田淳子
	主査 仁尾一人
調査担当 調査第2班	調査専門員 山本三郎
調査第1班	主査 渡辺 異

調査担当嘱託員

伴 悅子・古谷章子・吉田優子・西口由紀・大仁克子・西谷美保・荻野麻衣



安全大会



整理作業風景

## II 位置と環境

竹原中山遺跡は、たつの市揖西町竹原に所在する遺跡である。たつの市揖西町は揖保川右岸の下流域に近い位置を占めている。揖保川の旧河道は東側にあり、近世まで安定していない。そのことは、揖西町に中臣神社の氏子がいることなどでも表象されている。そのように揖保川本流の氾濫は主に東側揖保町方向にあることからも、西側は安定していたようで、原始から遺跡の多い地域である。

揖西平野は揖保川の支流である中垣内川（播磨國風土記記載の美奈志川に比定されている）が流れおり、中垣内川によって開拓された平野部を可耕地として利用している。周辺は山塊となっており、北側の方が高い丘陵が続き、南側は低い山塊となっている。山塊は古生代に隆起した丘陵で、新生代に平地や谷部が沈降したことによって丘陵の比高差が際立つことになる。この丘陵上には多くの遺跡が確認されている。その1つが竹原中山遺跡である。また同じ成因によって独立丘陵も多く認められ、同様に弥生時代以降主に墓地として利用されている。

竹原中山遺跡の最大の特徴は遺跡からの眺望が優れていることがある。北側・西側は閉塞しているが、東から南に向けての視界は広く良好である。南側は播磨灘を隔てて家島諸島も可視範囲にある。

西側山塊には播磨塚古墳と光明山城跡がある。相生古窯跡群の一部もここに位置している。揖西支群・光明山支群である。播磨塚古墳のある山塊は相生市との市境であり、その西側矢野川沿いは矢野莊の莊園として知られている。また、最近の調査で墳丘墓が築かれていることが判明しており、後期古墳の存在などとともに揖西平野と似た要素を有する地域である。

揖西平野の北側には古代山陽道が通っており、琴坂の西側麓には布勢駅家が存在する。小犬丸遺跡が布勢駅家に断定された最初の駅家として著名である。1982年から断続的に発掘調査が実施されており、多くの事実がわかるようになった。山陽道駅路本体と駅館そして木簡・墨書き器などの出土遺物から、布勢駅家の状況が明らかになりつつある。律令期以前の遺物も旧石器から弥生時代にかけて採集されている。小犬丸遺跡北西方向の谷部にも弥生時代の小犬丸大谷遺跡などが広がっている。ただ、この地域は閉塞した地域で、竹原中山遺跡だけではなく、半田山や養久山からも望むことはできない。小犬丸大谷遺跡の南側に、小犬丸遺跡とは異なる古代寺院が新たに確認された。小犬丸中谷遺跡で播磨國府系瓦が出土しており、小犬丸遺跡と併存していたことが明らかである。同種の軒瓦を有していることから、小犬丸遺跡と密接な関係があったと想像される。出土遺物の中に風鐸があることから、塔が建立されていたことも明らかになった。その手前には独立丘陵のタイ山があり、そこに長尾タイ山古墳群が存在する。初期横穴式石室や馬形埴輪が出土している。その西には中期古墳の灰ヶ谷古墳が存在する。

琴坂を東側に越えると遺跡の内容は揖西平野の一部であることからも西側とは微妙に変わっている。視界が大きく開け広がることもあり、遺跡に弥生時代末の埴丘墓が築かれていることである。竹原中山遺跡からは北東方向になり、平地部分は視界に納めることは出来ない。琴坂南側の山塊は池の谷墳墓群で埴丘墓から前期古墳と後期古墳が築かれている。佐吉山古墳群とも称されている遺跡で、発掘調査は実施されておらず、詳細は不明である。山陽道北側の尾根には発掘調査された新宮東山墳墓群と中垣内三昧山遺跡が存在する。

東側方向は揖西平野の遺跡が多く存在する地域である。竹原中山遺跡が揖西平野南西隅に位置していることから、大半の範囲が東側になる。弥生時代の主要遺跡の多くがこの方向に位置している。揖西地域で中心集落と考えられ、岸本道昭氏の類型によるA類型になる佐江遺跡・清水遺跡、B類型になる竹万遺

跡・尾崎遺跡・北山遺跡・小神南遺跡などが存在しており、多くの遺跡で生活をはじめます。丘陵上の遺跡も片島遺跡・龍子向イ山遺跡・養久乙城山遺跡・養久山前地遺跡が知られています。丘陵上の遺跡は中期後半の遺跡が大半で後期に継続する遺跡はない。ただ、同じ遺跡内で古墳時代になって再び墓地としてすべて利用されている。龍子向イ山遺跡だけは中期に祭祀遺構が築かれ、古墳以外の遺構も検出されている。後期の遺跡は低地の大型集落に限られる。佐江遺跡・清水遺跡・尾崎遺跡・北山遺跡が継続しており、尾崎遺跡では播磨産の庄内七器も出土している。今のところ、それ以降の布留期の土器はほとんど知られておらず、初期須恵器の時期まで空白がある。丘陵上には揖西平野の遺跡の特徴である墳丘墓が築かれるようになる。養久山墳墓群・半田山墳墓群・白鷺山墳墓群が代表的な遺跡である。養久山墳墓群は早い段階に学術調査され、古墳時代前期まで継続する古墳発生を考える好資料である。現在養久山1号墓を中心に保存整備が図られている。尾根上に20基前後の墳丘墓が確認されており、時期差がある墳墓群であろう。多くは複数埋葬である。半田山墳墓群では2基の墓が調査されている。1号墓は丘陵頂上に占地する楕円形の墳丘を持つ。主体部は6基あり、木棺直葬5基と土器棺1基である。第1主体棺上遺物として小型仿製鏡が置かれていた。棺内遺物は鉄劍1振で、床面には朱が撒かれていた。棺上にはさらに土器群が見られ、吉備の影響を強く受けた一群である。2号墓は尾根鞍部に位置しており、不定円形の墳丘で主体部は木棺直葬2基である。第1主体は棺の回りを楕円形に溝を掘る特殊な構造である。禮岐からの搬入土器が副葬されている。白鷺山1号墓は銘の入った伝世品の鏡が副葬されている。北縁には群集墳が多く営まれる。横穴式石室を主体部とするもので、中垣内古墳群・景雲寺古墳群・小神古墳群・台山古墳群が丘陵上・斜面に築かれている。総数で100基を超える規模である。中垣内古墳群の1号墳は径17m余りの円墳で、大型の横穴式石室である。全長9.8mを測る両袖式の石室で、1mを超える大型の石材を使用している。東京国立博物館に所蔵されている環頭太刀はこの古墳出土のもので、装飾付須恵器も出土している。小神古墳群の東側の白鷺山でも1基だけ横穴式石室が認められ、大型石室の狐塚古墳も隣接して存在する。白鷺山の南西方向である現在の龍野高校のグラウンド部分に西宮山古墳が立地していた。最後の前方後円墳で、その位置付けは高い。それまで揖西平野南縁に主に弥生時代墳丘墓・前中期古墳が築かれていたのに対して、西宮山古墳構築を境に中心は北側へ移動していく。それが後期群集墳構築につながるものと思われる。さらに古代寺院建設・山陽道敷設も同じ流れにあるものと推定される。西宮山古墳は全長35mの前方後円墳で、初期横穴式石室を主体部とする。装飾付須恵器・馬具・鏡・玉類など豪華な副葬品を保有していた。律令期になると山陽道が整備され、中垣内麻寺・小神麻寺が建立され、小神麻寺の南側に都衙が設置されたと考えられている。小神芦原遺跡では官衙の遺物が多数出土し、関連遺構も検出されている。

東側は特に眺望が良く、揖保川を越えてさらに遠跡を視界に納めることができる。同時期の遺跡では風土記で飯粒の丘と記された中臣山遺跡・内山遺跡・片山東山遺跡・櫛特山遺跡を見ることが可能である。片山東山遺跡は標高が高いこともあって、直接見ることができる。片山東山遺跡の北東にある寄井遺跡は直接見ることは出来ないが、高地性集落である。竹原中山遺跡と同じく高地性集落と考えて問題のない遺跡である。低地には弥生前期の遺跡である門前遺跡・福地相坂遺跡・常全遺跡さらに斑鳩守遺跡が存在する。斑鳩守遺跡は周辺の中心集落で全時代に渡って生活を営んでおり、古墳時代にまで存続する遺跡である。さらに東側の平方遺跡とともに母集落である。斑鳩守遺跡は庄内式土器も多量に出土しており、布留期へと継続している。播磨産以外に大和からの搬入品も保有している。太子町のこの時期の遺跡は変化に富んでいる。揖保川最大の支流である林田川左岸に位置する上構遺跡は庄内式土器を高率に保有する遺跡で中心集落でなく、開発的な要素を持つ集落である。播磨の中では最も高率で庄内式土器を持っている遺跡である。それに比べて斑鳩守遺跡の南方にある川島遺跡は中期に中心をもつ中心集落であるが、庄内式

土器を全く持っていない。このような複雜な状況にある地域で、周辺の山塊には墳丘墓・古墳が築かれている。後期になると東側の大田を中心とする石室が見られるようになる。朝鮮半島の影響を受けた石室である。この時期には聖徳太子によって斑鳩寺が建立され、続いて上大田庵寺が建てられる。律令期山陽道は太子町の北側、姫路市から櫻坂を越えてたつの市域を西進し播磨平野北縁を通っている。しかし、奈良時代でも太子町の方が遺跡は稠密に分布している。その後は法隆寺領の莊園となり、絵図が残され、表示石が残された莊園遺跡として代表的な地域である。当然、掛保川以西全域莊園に取り込まれているが、斑鳩寺を中心とした法隆寺領鶴莊を核とするかのように周辺に広がっている。その点では掛保川以西は最も遅れて莊園化したかもしれない。

播磨平野の南縁となる丘陵には墳丘墓が認められる養久山には前期古墳や後期古墳も構築されている。鳥坂峠を隔てた南西部分の尾根筋にも同様に古墳が聚められている。峠に面した部分に5基から成る鳥坂古墳群があり、1号墳は箱式石棺、2号墳は3基の箱式石棺、3号墳は粘土壇、4号墳と5号墳は横穴式石室と主体部と時期が異なっている。尾根の下から上に向かって構築されている。さらに尾根を登った頂部に三ツ塚古墳群がある。2基の前期古墳で、1号墳は前方後円墳、2号墳は円墳である。

南側は丘陵によって視野は狭まっているものの、播磨灘を経て家島諸島を見ることができる。竹原中山遺跡と同じ高地性集落である男鹿島の大山神社遺跡を可視範囲に納めることが大きな特徴である。手前には山廻に竹原遺跡と竹原窯跡が、その南に初期須恵器が多く出土した宿禰塚古墳や埴輪を有する鶏塚古墳などの単独墳を見ることがある。その後背の視界は山塊となり、さらに上方は播磨灘になる。直接視界には入らないが、鶏塚古墳の西側には中期古墳である塚森古墳や兵庫県で最古段階の須恵器窯跡である丸山窯跡群、そして大型の横穴式石室を有する那波野古墳など特徴的な遺跡が続いている。相生湾周辺にも後期古墳が築かれている。野瀬古墳群など数基の横穴式石室を主体部とする古墳群であるが、相生湾西側突端の塙根古墳群は箱式石棺や小石室を主体部とする特徴的な古墳群である。立地や副葬品から、海上に関連する古墳群に想定されている。尾根筋西側には大型円墳であるみかんのへた山古墳が赤穂市側に存在する。

南東側は龍子の山塊と養久山によって視界は遮られているが、遺跡は数多く見られる。養久山南側には後期の横穴式石室が数基あり、その南側の赤山には弥生末の墳丘墓群が築かれている。その間に養久谷遺跡があり、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡である。弥生前期と庄内期の土器も出土している。さらに南側の独立丘陵である神戸北山にも墳丘墓が数基認められる。龍子三ツ塚古墳群の南麓には後期の横穴式石室を主体とする円墳数基で構成される二塚古墳群があり、南西には大門古墳群がある。国道2号線・山陽本線を隔てた南側の丘陵には添田古墳群が認められる。初期横穴式石室を含む遺跡で、出土遺物にも初期須恵器など興味あるものが含まれている。その東側の掛保川を眼前にする尾根に宝記山遺跡・古墳群と袋尻浅谷遺跡がある。宝記山では弥生末の土器棺が検出され、袋尻浅谷遺跡では古墳後期のミニチュアの竈が出土している。その南側の丘陵にも金剛

山古墳群・馬場古墳群など多くの古墳が構築されているが、明確に視界に納めることはできない。その南側の播磨灘を前にした権現山古墳群は見ることが可能である。山頂の51号墳は三角縁神獣鏡など豊富な副葬品を出土している。続部山古墳群や兵庫県で5番目の大きさである大型前方後円墳である糞塚古墳なども存在する。



遺跡からの風景

### III 調査結果

確認調査の結果、北地区1,692m<sup>2</sup>について全面（本発掘）調査を実施した。その結果、弥生時代中期の集落以外にも、中世の遺構も僅かに確認した。弥生時代中期の集落は短期間に営まれた集落で、堅穴住居跡14棟、落ち込み2基、土坑3基、溝3条を確認した。

丘陵上の遺跡であることから、堆積土はほとんどなく、表土直下が遺構面となっているところもかなりある。基本層序は、Ⅰ表土 Ⅱ黄褐色砂 Ⅲ明黄褐色シルト質中砂 Ⅳ地山（明赤褐色細砂）である。近世の遺構は表土直下のⅡ層上面とⅢ層上面に、中世の遺構はⅢ層上面に、弥生時代の遺構はⅣ層地山面に築かれている。

#### 1. 近世の遺構

近世の遺構は、尾根筋を通る溝3条である。尾根筋は調査区中央を北西から南東方向に延びているが、その尾根筋に掘られた溝が近世の遺構である。3条の溝があるが、遺構面が異なることから、時期差がある。SD03だけがⅡ層上面に構築されている。

##### SD01

尾根筋よりやや北側斜面よりに位置する溝で、最大幅2mを測る。尾根沿いの等高線に平行に掘り込まれ、一部削平を受け残存していない。最大長7.8mを断続的に調査している。南側では中世の遺構であるSX03を切っている。最も深い部分で、肩部からの深さ34cmを測るが、多くは10cm前後と浅い溝である。

##### SD02

SD01の南西側である尾根筋の南斜面に近いところに位置しており、SD01と平行関係にある。やや平坦化する部分で溝は1度消失しているが、北西側の標高の高い方にさらに続いている。溝の主軸は、消失点付近で尾根筋から北側に位置を変えている。溝の延長方向である標高の低い南東のSH12では住居跡肩部に窪みがみられ、SD02が延びていた可能性がある。遺構として確実に検出した長さは、約32mである。最大幅は2mで、狭い部分で1m余りである。深さは最も深いところで0.55mを測る。

自然流路の可能性の高い溝であるが、道としても利用されていたと思われる。Ⅲ層上面から掘り込まれており、下層にはⅡ層とⅢ層の2次堆積土が互層となっており、埋まった状況は自然堆積を示している。上層は腐植土やⅡ層が堆積している。時期幅があるものと思われ、構築時は中世にならうかと思われる。Ⅱ層が堆積していることから、SD03よりは古い時期に埋没していたことになる。

##### SD03

SD02の南西側に築かれた溝で、SH05上面に築かれた新しい時期の溝である。主軸方向はSD01とは異なっており、東西に近い方位を取っている。幅0.6～0.75mと他の溝よりも狭くなっている。深さは0.2mである。上の面から掘り込んでいることから、最も新しい遺構と考えられる。

#### 2. 中世の遺構

落ち込み3基（SX01・03・04）と石室状の石組（ST01）、調査区北側に広がっている溝群（SD09～12）が、中世の遺構に該当する。また、上記のSD02の下層は中世まで遡ると考えられる。

##### SX01

尾根筋から南斜面にかけてのところに弧状に掘りこまれた落ち込みである。長さ9.2mで、最も深い部

分で0.8mを測る。幅は最も広いところで1.8mである。弧状の両端に小土坑が数段されたような状況が特徴的である。東端は浅い土坑状に広がっている程度であるが、西端は2基の土坑（ピット）になっている。西側の土坑は、円形で径0.65m、深さ0.45m、東側は長径0.5m、短径0.35m、深さ0.15mを測る。中央付近から東側には地山内に含まれる角礫が入っている。遺物は出土していないが、切り込んだ層から中世と考えられる。

#### SX03

SD01に切られた溝状の落ち込みである。尾根筋から北側斜面に近い位置に築かれている。SX04を切っている。東側が埋土から新しい時期で、2時期に分けることができる。上層の遺構は僅かに弧状となるが比較的直線的で、6.2mの長さがある。深さは最大で0.45mで、全体的には0.2m前後である。下層の遺構も主軸方向はほぼ同じである。上層の遺構から、さらに1m西側に延びている。下層の埋土から須恵器碗の破片が出土している。小片で確実な時期を押さえることは困難である。胎土などから中世のもので、近くに操業している竹原窯跡群などの時期かと思われる。

#### SX04

SX03に切られた遺構である。不定形の落ち込みで、最大長2.2m、短径1.6m、深さ0.6mの壺鉢状の落ち込みである。堅穴住居跡（SH04）を切っている。

#### ST01

SD02の西端南側の尾根部分に位置する石組遺構である。尾根筋で平坦になっている部分で、南斜面に向かう眺望の良い地点に築かれている。斜面の一段下がった地点にSH05が存在する。

地山に含まれる竹原石は板状の節理を持つ石材であり、その板石を使って長方形の小石室を作っている。蓋石も同様の竹原石を使用している。蓋石は強く被熱しているが、上面に焼土層や炭層は認められなかつた。蓋石は厚さ15cmの上辺15cm、下辺30cm、高さ20cmの台形をした石材である。石組の内法は長さ40cm、幅30cm、深さ18cmを測る。側壁は長辺短辺ともに2石から成っている。石室内埋土にも焼土・炭は含まれず、骨も出土していない。出土遺物もなく、時期・性格とも断定する資料は提示されていない。地山を掘りこんでいるが、僅かにⅢ層が肩部にみられたことから、中世の遺構と考えられ、中世墓の可能性を考えている。

#### SD09

調査区北側の東斜面に平行して4条の溝が検出されている。同様の性格を有する溝と考えられる。すべて等高線に沿うように掘られている点が共通している。SD09は、最も上方に築かれた溝で、標高93.4mと93.5mの間に位置している。半円形に曲がっており、延長で7mある。幅は0.3m、深さも0.3m前後である。南側は自然崩壊で地形が変化している。

#### SD10

上方から2本目の溝で、標高92.9m付近に築かれている。SD09とは平面で2m、比高で0.5m離れている。延長で12.5mを測る。緩やかなS字状を呈し、深さ・幅とともに0.3m前後である。

#### SD11

上方から3本目の溝で、標高92.2m、92.3m付近に築かれている。SD10とは平面で2~2.5m、比高で0.6m離れている。延長で18.8mを測る。全体的には緩やかなS字状を呈しているが、中央部分は大きく屈曲している。深さ・幅ともに0.3m前後である。北側のやや平たい部分に弥生時代の堅穴住居跡（SH11）があり、それを切っている。ただ、自然に大きく削平されていたようで、かろうじて壁溝とピットが残っている程度である。

最も下方に位置する溝で、標高91.7m付近にある。SD10とは平面で2.0~4.2m、比高で0.5m離れている。延長14.5mを測る。幅・深さは他の溝と同じく0.3m前後である。

これら4条の溝は、コンタラインに沿って平行に存在する。遺構の性格は当然同一のものと考えられる。確定なことは解らないが、水を導くなどの性格が推定される。溝の形状は規模が小さいながらも、後世の鉄穴流しの鉄穴溝に酷似している。導水施設である確率は高いものと思われる。

今回の調査では、確認調査で3点の須恵器が出土しているが、本発掘調査では全くこの時期の遺物は出土していない。不時発見時には少量ながらも須恵器が採集され、周辺に竹原窯跡が存在している。そのようなことからも本遺跡周辺にも窯跡が存在した可能性は十分に考えられる。

### 3. 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は、丘陵上に営まれた集落で、堅穴住居跡14棟、落ち込み2基、土坑3基、溝3条を確認した。一般的にいわれる高地性集落で、中期後半の短期間の遺跡である。

堅穴住居跡は尾根筋と各斜面（南・北・東）に築かれている。尾根筋に7棟、南斜面に1棟、北斜面に5棟、東斜面に1棟存在する。

#### SH01

尾根筋の標高の低い部分に位置している。尾根上からやや南斜面向に向かった部分で、南半分は流失している。隅円方形の対角線を結んだ北側がほぼ残存していると思われるが、北辺・西辺ともに多少延びているかもしれない。焼失住居で、埋土には焼土・炭が広く認められる。数個所の焼土集中地點があり、そこには炭化物も混じっている。炭化材もあり、北辺から直交方向にあることから垂木の可能性が高い。

西辺は3.6m、北辺は3.1m残っている。両辺とともに壁溝を持つ。幅25~40cm、深さ5~15cmを測る。焼土・炭の広がった床面には弥生土器片も散在している。壺・高杯が出土している。壁は最高で28cm残っている。床面には礎も多く認められた。床面には4基のピットと2基の土坑を検出している。ピットには切り合ひ関係があり、建て替えが1度行われたことは確定である。土坑は床面残存端部から残存していない部分で検出している。不定形の土坑には焼土が詰まっており、壁もより強く被熱しているので、炉跡と考えられる。もう1基は残存状況が悪いが、幅20cm、長さ55cm、深さ15cmの溝状の土坑である。また、床面から60cm離れた位置にSK02が存在するが、一応住居跡SH01に伴うものとは断定できないので、別遺構とする。

出土遺物は多くはないが、竹原中山遺跡の遺構の中では多い方である。土器は6点図化しており、他の破片は少なく、6個体余りの土器である。焼失住居であることから、被熱した土器がほとんどである。強く熱を受けておりボロボロの土器もある。また、床面からはサヌカイトの剥片が出土しており、石器製作を行っていたことが看取される。

#### SH02

調査区東端の北側コーナーで確認された住居跡である。壁溝を検出している。床面は調査区外へ延びている。形状から南西隅部と思われる。延長2mを調査した。堀溝は、幅25cm、深さ14cmを測る。床面には礎が集中して置かれている。出土遺物は少量である。図化できる土器はないが、壺の胴部は確認できる。

#### SH03

調査区東端でSH02の西側に位置している。北側は谷地形の自然地形によって流失して存在していない。遺構残存部はSH02と0.7mと近接している。2基の堅穴住居跡は当然切り合ひ関係があるが、前後関係は明らかでない。

残存している遺構は壁溝と僅かな床面だけである。壁溝は直線的で2.1m調査している。幅25cm、深さ11cmを測る。床面は40cm残存している。

出土遺物はない。

SH04

尾根筋に位置する住居跡で、眺望の良い好位置に築かれている。SH08を切っている新しい時期の住居跡で、南東部分をSX03・SX04に切られている。特にSX04は大型円形の落ち込みで東側の床面を完全に損壊している。尾根南西部にはSD02が存在する。SD02を隔ててSH05が3.3m離れて南西方向に位置している。さらに、斜面下方の山腹に竹原中山遺跡で最も大型住居跡のSH06がある。

円形の住居跡で、最大径4.4mを測る。深さは0.5m残存しており、残存状況は良好と言える。壁溝を有しており。中央に間仕切り溝も敷設されている。ピットは5基検出しているが、上屋構造は決しがたい。切り合い関係のあるSH08のピットである可能性もある。

出土土器は6点図化している。SH01同様サヌカイトの剥片が多く出土しており、石器製作に関わっていた遺構である。

SH05

尾根筋南斜面のSH01と似た立地条件を持つ。8m北西方向に位置している。北側にSD02が、上部にSD03の近世の遺構が存在し、住居跡肩部を損壊している。斜面下方に竹原中山遺跡で最も大型のSH06がある。

比較的角張った隅円方形のプランの竪穴住居跡で、いわゆるイチマル土坑を有する住居跡である。北辺は完存しているが、南辺は全く残っていない。北辺は3.3mで弧状になっている。東西辺は2.9m残存している。方形とすると、床面の約5分の4が残っていることになる。床面周囲には壁溝が巡っており、幅15～30cmを測る。北西コーナー部は50cmと幅が広くなっている。北側壁溝に小型の壺が出土している。

上屋構造は2本柱である。西側の柱穴は45cmの方形に近い形状で、深さは52cmを測る。東側柱穴は径40cmで深さは24cmを測る。2基の柱穴の心々割の距離は1.65mを測る。柱穴間に円形の土坑が、南側に溝状の土坑が築かれている。方形の土坑は長辺55cm、短辺40cm、深さ14cmを測る。溝状の土坑は幅30cm、長さ135cm、深さ13cmである。各遺構は接しており、近距離に築かれている。壁の残存状態は北西部が最も良好で、55cm残っている。

土器は少量出土しているが、石器は多数出土している。製品はこの住居跡に限られている。土器は火を受けており、強く赤化している。(16)の甕は瓶に接して倒置状態で置かれている。石器は磨石・砾石・石礫以外に多数のサヌカイト剥片が出土している。剥片の量は竹原中山遺跡の中で最も多く、石器製作の拠点住居であったと思われる。

SH06

南斜面に位置する竹原中山遺跡で最も大きい住居跡である。確認調査の結果を合わせても、当住居跡より下方には住居跡は存在しないよう、低い位置に存在する遺構となる。上方にSH05が位置しているが、微妙な時期差があるかもしれない。西側にはSD05とSD04が等高線に沿って掘られている。南側床面は流失しているが、ほぼ全体像を想定できる。東西の長さは6.0mで、南北は4.4m残存している。床面は低い方がやや下がっているが、比較的平坦である。中央に不定形の土坑があり、断面も不定形に落ち込んでいる。その東側に溝状の浅い土坑があり、イチマル土坑の変型と思われる。不定形の中央土坑は最大長1.7m、短径1mで、深さは0.45mを測る。中央から北側の方が深くなっている。溝状の土坑は長さ1.5m、幅0.35mで、堆土は中央土坑と同じような層である。ピットは11基検出しているが、明瞭な主柱穴を確定できない。壁溝は周全していないが、標高の低い方の床面が流失したことによるものと思われる。幅15～30cm、

深さ15cm前後を測る。壁溝は床面にあり円形を呈するが、壁は斜面の高低差によって高い部分では大きく掘り下げている。そのため平面の形状はやや歪になっている。ただ、西端は二重になっており、建て替えた痕跡かもしれない。

住居跡内の堆積状況は自然堆積を示している。高い方から流れ落ちた堆積になっている。壁溝などの堆土には焼土が認められる。そのことから焼失住居の可能性が求められる。焼土は床面などに広がっているが、炭は多くは認められなかった。

出土土器が最も多い住居跡である。15点図化している。住居跡の規模も竹原中山遺跡の中で最大であり、遺物量の多いのも当然かもしれない。砾石か磨石かと思われる石器が1点と剥片が出土している。剥片の量はSH05に比べると少ない。

#### SH08

SH04に切られた住居跡である。壁溝と床面の一部がかろうじて残っている。床面のレベルはSH04より30cm前後高くなっている。壁溝の幅は20~30cmと他の住居跡と大差ない。径は何とか復原できる残存状態で4mの直径になる。

#### SH09

尾根上の最も高い位置に築かれた堅穴住居跡で、SH10を切っている。南半が流失しているが、復原すると、5.5m前後の円形住居跡である。焼失住居で床面全体に焼土・炭が認められるが、特に中央部から西側にかけて焼土・炭が集中している。尾根直交部の一部が水道になったためか、欠失している。その周辺は壁も壁溝も歪になっている。また、壁の下端と壁溝の間に僅かの空間があるのも竹原中山遺跡の住居跡の特徴である。平面図でSH10の壁溝がSH09の壁を切っているように描いているが、壁溝（床面）の残存部を表したためである。

床面は残っていないが、南側で中央土坑を検出している。径60cmの梢円形で、現況で30cmの深さがある。ピットは7基検出しているが、主柱穴は明確でなく、SH10のピットであるのも含まれており、分別はできなかった。焼土・炭集中部分には明瞭な窪みを検出できなかったが、炉跡の可能性が高い。

出土遺物は壺3点と少数のサヌカイト剥片である。壺は口縁部と体部・底部各1点ずつである。他に数点の破片が出土している。

#### SH10

SH09に切られた住居跡で一部であるが、梢円形かとも思われる平面プランである。南側は流失しており、1.3m残っている。東西は1.1mを測る。切り合い関係にあるが、床面のレベル差は小さく、10cm高くなっている。出土遺物は少なく、少数のサヌカイト剥片と壺底部が1点と体部の破片数点である。

#### SH11

尾根筋北側の東斜面に位置する唯一の住居跡である。中世の漁群によって大きく削平されているが、床面をかろうじて検出している。円形の壁溝を調査しており、2.5mを測る。深さ20cm、幅は20~30cmである。壁溝の径から復原すると、4m余りの円形住居跡になる。壁溝端部から60cm離れてピットが1基存在し、弥生土器片が出土している。径35cm、深さ20cmとやや大型のピットである。さらに南東1.1m離れたところにもレベル的には25cm下がっているがピットが1基存在する。中央土坑の可能性もある。埋土は同じである。

壺口縁部1点が出土している。同一個体と思われる体部も数点出土しており、他の個体の破片も見られる。調査段階では、この住居跡からは剥片は出土していない。

#### SH12

尾根上の最も低い部分に位置し、焼土坑SK01の下層に存在する住居跡である。西側は弧状を呈しているが、南側は直線的である。2辺の状況から検討すると、隅円方形のプランとした方が妥当であろう。南東部はSX01に切られている。東側は後世の自然の流れがあるようで、流失している。2辺の形状は異なっているが、壁溝はつながっており同一の溝である。壁溝は最小で18cm、最大で30cmを測る。深さも20~30cmと幅がある。ピットは床面外も含めて7基検出している。現状からみると4本柱の上屋構造を復原することができる。中央近くに溝状の土坑がある。幅30cmで、残存長75cmを測る。

図化できる土器は出土しておらず、小片に限られる。サヌカイト剥片は出土している。

#### SH13

調査区東側の北端に位置している。北側斜面で、尾根筋から一段下がった部分に構築されている。円形に近い不定形の小型の住居跡である。西側に斜面を削り出した壁面が認められ、やはり竹原中山遺跡の特徴でもある壁溝との距離が開いている。住居跡は東西2.6mで南北に2.1m残存している。中央土坑が存在し焼土・炭が検出されている。2段に掘り下げられた土坑で、深さ35cmを測る。ピットは2基あるが、上屋構造は不明である。SH14を切っている。SH15に近いタイプにならうかと思われる。

土器小片はやや多く出土している。図化した土器は底部を中心に5点である。高杯・壺・甕と各器種が出土している。石器は剥片も含めて出土していない。

#### SH14

調査区東側の北端に位置しており、調査区外に延びている。隣接してSH13が存在している。立地条件なども同じである。隅円の方形に近い平面形態を呈しており、南辺と西辺の南側を調査している。東辺はSH13に切られている。北側は調査区外に続いているが、斜面地であるので完存していないように思われる。床面検出部分は南西隅を掘り残した壁溝が巡っている。幅20~30cm、深さ10cm前後を測る。その内側に径30cmのピットが1基あり、さらに内側に最大径1.8mを測る大型の円形土坑が存在する。

5点の土器を図化しているが、他にも土器片は少量出土している。石器は出土していない。

#### SH15

北斜面の高いところで検出した住居跡で、SH14から4.5m離れている。隅円長方形の住居跡で、床面が完存している唯一の住居跡である。長辺を等高線に沿って築いている。南北方向の高い部分は壁を大きく掘り下げている。低い方も地山を掘り込んでおり、盛土は行っていない。壁溝が巡っているが、南東隅は掘り下げず陸橋部としている。壁溝の北側は角張り、南側は弧状を呈している。幅15~20cm、深さ12~20cmを測る。床面は水平で、南北2.8m、東西1.8mを測り、壁で最も残っているところで0.75mある。中央に円形と溝状の土坑が並んで築かれている、いわゆるイチマル土坑である。北側が円形で直径50cm、深さ20cm、南側が溝状で長さ108cm、幅30cm、深さ10cmを測る。溝状の方が浅く、埋土も炭を含んでいる。西側にピットを1基確認しているが、主柱穴とは断定できない。遺構としては確認していないが、2本柱の建物を考えるのが普通かと思われる。

出土遺物は土器・石器とともに多い方である。住居跡の規模からいくと小さい方であるが、保有率は高い。土器は唯一の完形品を含めて4点図化している。石器は製品はないが、サヌカイト剥片は出土している。

落ち込みは2基調査している。

#### SX07

当初堅穴住居跡として調査したものであるが、調査を進めていくと壁溝がなく、柱穴も検出できなかつたことから、落ち込みとして報告する。ただ、サヌカイトのチップなど出土している状況は堅穴住居跡と大きな差異はない。出土土器は底面から壺底部が、埋土から壺体部がある。

最大長4.3mで幅1.6mの平坦面である。深さは最大0.8mを測る。方形に平坦面を作り出しており、壁溝を有していない以外は竪穴住居跡である。

#### SX04

SH04を切っている円形の大型の土坑ともいえる落ち込みである。最大長1.0m、深さ0.3mを測る。土器は小片しか出土していない。

土坑は3基確認しているが、性格が明らかなものはSK01だけである。

#### SK01

確認調査で検出した遺構で、全面調査時に全掘した。焼土・炭を多量に有する焼土坑である。尾根筋の突端に位置している。最も眺望の良い部分であり、獣獵場として考えている遺構である。焼土坑本体は南北に長い北側が広い卵形に近い不定形をしている。南北65cm、東西45cm、最大の深さ15cmを測る。そこから北側斜面の北東方向に炭・焼土が広がっている。最大の広がりは土坑端部から1.3mまでである。焼土・炭層とともに複層あり、数回の使用が考えられる。

#### SK02

性格不明の不定形の土坑である。SH01の南側にあり、関連する土坑かもしれない。不定形円形で、長径60cm、短径40cm、深さ25cmを測る。

#### SK04

SH09の南側に位置する土坑で東西に長い。東西90cm、南北35cm、深さ30cmを測る。SH09とは1.5m離れており、関係のない遺構と思われる。

溝は4条調査している。集落を画するなどの性格を明らかにできる溝は確認していない。

#### SD04

幅0.5mで長さ4mの溝である。緩やかに内湾するが、直線的で等高線に沿っている。断面形状はU字形から箱形と地点によって変化がある。

#### SD05

幅0.5mで長さ1.2mの溝である。SH05の肩部にはば接している。断面形状はU字形である。

#### SD07

SD04の北西部にある長さ1.8mと短い溝で、幅は0.3~0.5mである。土器は出土していない。

#### SD08

SH09とSD07の中間地点にあり、調査区外の西側へ延びている。幅50cmで長さ2.3mを測る。等高線に沿って築かれている。

竹原中山遺跡 竪穴住居跡一覧表

住居跡番号	平面形態	規模(最大×最小)(m)	残存深さ(m)	備考
SH01	隅円方形	(3.5) × (3.0)	0.21	
SH02	不明	(1.6) × (0.9)	0.18	調査区外へ延びる
SH03	不明	(2.0) × (0.9)	0.3	SH02に切られる
SH04	円形	4.3 × (3.0)	0.37	
SH05	隅円方形	4.0 × (3.2)	0.52	
SH06	円形	6.0 × (4.3)	0.71	
SH07	隅円方形	4.3 × (1.6)	0.8	欠番SX07に変更
SH08	円形	4.1 × (0.5)	0.33	SH04に切られる
SH09	円形	5.5 × (2.7)	0.59	
SH10	円形	(1.6) × (1.3)	0.28	SH09に切られる
SH11	円形	(2.6) × (2.5)	0.05	SH11に切られる
SH12	隅円方形	(3.8) × (1.6)	0.21	上にSK01あり
SH13	隅円方形	(3.6) × (3.2)	0.57	調査区外へ延びる
SH14	隅円方形	(3.1) × (1.6)	0.42	SH13に切られ外へ続く
SH15	隅円方形	3.5 × 2.2	0.81	

## IV 出土遺物

出土遺物の量は多くはない。コンテナ（TS-28タイプ）で6箱と少量である。弥生土器・石器・鐵器・須恵器が出土している。鐵器・須恵器は1点ずつである。

### 1. 弥生土器

出土遺物の半数近くは包含層から出土している。遺構出土の遺物は遺構の切り合ひ関係があり、新旧関係があるはずである。しかし、形式的な時期差を明瞭に指摘できない。ほぼ同時期の遺物で、短期間の生活を行った遺跡と考えられる。高地性集落のため、土器の保存状態は悪く、表面磨滅したものが大半である。さらに、被熱している土器が多いことからなおさらである。

遺構出土遺物は、堅穴住居跡からの遺物が多くを占める。堅穴住居跡の中で土器を図化していないものはSH02・03・08・12の4棟である。それ以外は少量ながらも図化した土器がある。完形になったのはSH15の台付無頸壺1点だけである。

#### SH01出土土器

6点図化している。壺口縁部1点と壺底部1点、甕口縁部2点と甕底部1点、高杯脚部1点である。(1)は壺口縁部で直立ぎみの頸部から口縁部は開き、端部が肥厚し2条の凹線文を有する。(4)は小型の壺底部である。(2)(3)(5)は甕で、(2)は大型品の口縁部である。(3)は小破片のため径を復原することができないが通常の大きさ（15cm前後）の甕口縁部であろう。(5)は底部である。(6)は高杯で器高のある脚部である。内面はヘラケズリ、外面はハケ整形である。円板充填法で杯部と接続する。

#### SH04出土土器

壺（水差し含む）3点、甕1点、高杯2点の6点を図化している。(7)は水差し形土器で把手部と体部は接合しなかつたが同一個体と考えられる。体部の破片もあるが、薄く脆弱になつており復原できなかつた。外傾し端部が平坦なオーソドックスなタイプである。(8)はラッパ状に開く口縁部で壺部は内外に肥厚する大型の口縁部である。(9)は底部であるが、(8)の底部かもしれない。(10)は本来精製であったろうと思われる甕で、頸部内面の稜線が明瞭である。強く被熱しており、色調が赤くなっている。(11)(12)は高杯脚台の根部で大小がある。

#### SH05出土土器

壺2点と甕2点を図化している。(13)は直口壺の口縁部で直線に延び端部が内側に肥厚する。(14)は壺体部の破片で3条の凹線文が施されている。(15)(16)は脆弱となつて壺で、特に(15)は器表が荒れている。(16)も残存状況は良好とはいえない。かろうじて口縁部が接合しているかと思われる程度で明確に接合することができず、図上復原した。壺にそつて逆さに置かれており、口縁端部は赤く変化するほど被熱している。

#### SH06出土土器

壺口縁部2点と底部8点、甕口縁部3点と底部1点、脚台部1点の15点を図化している。竹原中山遺跡の堅穴住居跡の中で最も土器保有の多い住居跡のものである。(17)は直口壺でやや外反している。(18)は搬入土器かと思われる破片である。角閃石など明瞭な鉱物は確認できず、赤色の酸化鉄が多く含まれる。直線に延びる破片で、端面中央にへこみがあり沈線状になっている。当初壺口縁部かと思ったが、高杯脚部である可能性の方が高い。(19)～(24)(28)(29)は変化があるものの壺底部と思われる。(25)は甕口縁部

で内面に明瞭な縦線を有し、短く屈曲する。端部は内側に大きく肥厚している。(26)は径25.6cmを測る大型の壺でくの字に短く屈曲する口縁部である。内面の縦線は甘い。(27)は薄手の壺である。(30)は壺底部である。(31)は脚台部で、円板充填ではない。また、図化していないが高杯脚部で河内からの搬入品かと思われる破片が出土している。胎土から想定している。(図版39下 No.24右横)

#### SH09出土土器

壺3点を図化した。(32)は外反してから大きく開く口縁部で凹線文など装飾はない。端部は内外に肥厚している。(33)は壺体部の破片で磨滅が著しいが、文様が見られる。比較的細かい文様で、上に3条以上のクシ描き直線文、下に10条くらいの細かい波状文を2回以上施している。(34)はその底部にあたるかと思われるものである。

#### SH10出土土器

(35)の壺底部1点を図化している。不接合の破片があるが完全ではない。底中央が薄くなっている。底は平たいが中央部分はやや上がっている。

#### SH11出土土器

(36)の壺口縁部1点を図化している。頸部に4条の凹線文を持ち、外反する口縁部で端部は内外に僅かに肥厚する。端面にも1条の凹線文があったかと思われるが磨滅している。細かい5条以上の波状文が施されている。体部にも波状文があり8条1単位で2段以上施されている。竹原中山遺跡の中では選択された土器である。

#### SH13出土土器

大型の台付鉢口縁部と底部4点の5点を図化している。(37)は口径28.5cmに復原される大型の鉢で強いヨコナデを施すことによって凹線状に仕上げている。(38)(39)は壺と思われる底部である。(40)(41)は壺底部で、壺は図化していないが他に2点が出土している。(写真図版40下)

#### SH14出土土器

体部1点、底部3点、脚部1点の5点を図化している。(42)は壺の頸部から体部の部分で、2条以上の凹線文が認められる。底部は(43)(44)が壺で、(45)が壺であろう。(46)は高杯脚台部で端部は外側に肥厚している。直線的に延びている通常の大きさの高杯である。

#### SH15出土土器

唯一完形になった土器(47)を含めて4点を図化している。(47)は台付無頸壺で装飾を施した製品である。脚台と体部は円板充填によって成形されている。脚台端部は下側にやや尖らせた角張るタイプで、端部から1cmほど上部で小さな穿孔を行っている。円形で18ヶ所施されている。口縁部は大きく内側に内傾させ端部は丸く仕上げている。内面はユビ仕上げのままであるが、外面はユビ整形・調整ののち縱方向のヘラミガキで仕上げている。(48)は壺底部で大型の土器である。(49)は器形的には壺底部であるが、内面に朱が残されている特殊な土器である。現状では塗布された程度しか残存していないが、容器の可能性が考えられる。薄い器肉で、底部の形態が普通の壺とは異なっている。(50)は高杯脚台部である。磨滅が著しいが、端面には凹線文が施されている可能性がある。

#### SX04出土土器

高杯脚部1点(51)を図化している。器高の低いタイプで、僅かに内湾するが直線的に延び、器肉は薄い。端部は内外に肥厚している。

#### SX07出土土器

底部2点と高杯体部1点の3点を図化している。底部は壺で底面は平坦である。(52)は中型の(53)は大

型の壺である。ともにナデ仕上げである。(54)は高杯部の体部から口縁部に至る部分で、端部まであと僅かであろうと思われる。3条の凹線文が施されている。

#### SD03出土土器

(55)は壺体部である。最大腹径を有する部分で、クシ引きによる装飾が加えられている。ハケ整形後、上から波状文一直線文 波状文と施されている。6条単位の施文具で、波状文は粗い施文である。(56)は小型の高杯脚部で、器高の高いものになろうか。円孔は1ヶ所しか残っておらず、方向・数は不明である。内湾して長く延びると思われる。

#### SD06出土土器

壺頸部1点(57)を図化している。幅の広い凹線文を4条施している。その下の扁曲部に貼り付け突帯を付け、さらに指頭圧痕をしている。大型の壺である。

#### SD07出土土器

(58)は大型の壺口縁部である。短い口縁部で、現在の破碎面が頸部になると思われる。断面三角形の端面が最も大きい口縁部である。

#### 包含層出土土器

30点図化している。壺11点、甌10点、高杯9点である。壺は通常の漏斗状に開くタイプと直口壺がある。(59) (60) (61)は漏斗状に開く口縁部である。口作りは個々に異なっている。(59)は直立ぎみの頸部で端部は内外に肥厚する。(60)は外湾し端部は内側に肥厚する。端面には2条の凹線文が施される。(61)は外側につまみ出すように肥厚し、頸部は短い。3条の凹線文が施される。(59)はSH05直上出土で住居跡出土土器としても可能である。(63)は口縁部を欠く頸部から体部で、頸部は直立している。頸部に成形時に生じた沈線状の窪みがある。最大腹径の下まで残存しており、倒卵形になろうかと思われる。内面はナデ整形で、外面はハケ整形、頸部はヨコナデで仕上げている。(64)～(67)は直口壺の口縁部である。(64)は直立し、(65)は僅かに外反する。(66)は内湾し、(67)は外傾する。端部は肥厚しているが、両側と片方だけのものがある。(68)は把手部で水差し形土器であろうか。大型の把手である。(69) (70)は壺底部で大型の壺である。

(71)はくの字口縁の甌で頸部内面の稜線は明瞭でない。端部は僅かに内側に肥厚する。(72)は内面の稜線が明瞭な薄手に仕上げられた甌で、体部は直線に広がる。端部は内外に肥厚し、端面は中央がへこんでいる。(73)はやや小さめの口徑13.7cmを測る甌で、体部は直立ぎみの内湾でほとんど開かない。口縁部は水平に開き、端部内面を大きくなっている。(74)は(72)に似たタイプであるが、頸部内面の稜線は甘い。断面もやや厚い。以上は中型の甌であるが、(62)は大型の壺口縁部である。頸部で割れており、下は残存していない。バチ形の断面形で、端面は平たく角張る。(75)～(79)は甌底部で、(75)は損傷を受けている。(78) (79)は大型の甌である。

(80)～(88)は高杯である。(80)は端部が内外に肥厚し断面三角形になる。杯部変化点の上部に幅の広く浅い凹線を2条施す。口縁部は開きぎみで、杯下半は直線的である。(81)は口縁端部下に3条の凹線文が施され、杯部は全体的には内湾する。端部は外側へ開き、上半は直立する。(82)は浅いタイプで、口縁端部は内側に肥厚する。変化点上部に2条の凹線文がある。(83)は内湾する杯部で、器内は厚めである。変化点のところに3条の凹線文がある。凹線によって稜線はなくなっている。(84) (85)は木器模倣形高杯である。新しい段階のタイプで上方の突帯は低い。(84)は端面が外傾し3条の凹線が施されている。(85)はやや厚手で、端面が直線的で外方に広がる。無文である。(86) (87) (88)は脚部である。(86)は端部が外側に大きく肥厚している。(87)は器高の高いものになると思われ、端面は中央がへこんでいる。

(88)は内外に肥厚する端部で、中央全体がへこんでいる。内湾しており、外面に網目文が見られる。網目文の内側に斜行するクシ描きを入れている。

#### 弥生土器に施された文様

竹原中山遺跡の土器は比較的シンプルで、施文された土器は少ない。当該期の東播磨の土器と比べると装飾をほとんど施していない土器群である。四線文が主体で、波状文・直線文が数点に見られる。円形浮文などは1点も確認されていない。高杯脚台の透孔も2点と限られている。突帯文も1点だけで、装饰的なものは(88)の網目文だけである。



第2図 弥生土器 拓本

## 2. 須恵器

SX03の肩上部から1点だけ須恵器が出土している。(89)は杯口縁部で直線に延び、端部は角張る。色調は内外・断面ともに灰色で、胎土には砂粒を含む。ロクロナデで仕上げられている。竹原窯跡群や周辺の窯跡群の須恵器と思われる。

## 3. 鉄器

(T1)は地山直上の包含層から出土している鉄器である。茎部分で、ヤリガンナか鉄族と考えられる。残存長3.6cm、最大幅1.3cm、厚さ0.95cmを測る。断面形状は方形である。

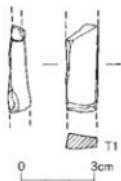
## 4. 石器

8点固化しているが、それ以外に住居跡を中心に多くのサヌカイト製チップが出土している。(S1)は明瞭な敲打痕は認めないので、磨石かと思われる。中央部分が使用されたと思われるが、確実に磨り面かどうかは不明である。遺跡の性格からは投弾石とも考えられる。SH05から出土しており、長さ62.5mm、幅50.5mm、厚さ32.8mm、重さ186.5gを測る。左側面は新しい削れである。(S2)も磨石かと思われる。SH04から出土している。長さ80.7mm、幅62.1mm、厚さ39.5mm、重さ180.7gを測る。花崗岩類である。(S3)は叩き石か磨石である。SH06の壁溝から出土している。上面には敲打痕が見られず、磨り面が看取される。それに対して下面には敲打痕が認められる。砂岩などの柔らかい石材であることを考慮すれば、磨石か砥石に近い性格を考える方が妥当であろうか。長さ93.8mm、幅29.9mm、厚さ21.1mm、重さ80.6gを測る。(S4)は軋石である。本来大きな製品か他製品の転用かと思われる。SH05の壁溝から出土している。使用方向

はまちまちで、痕跡も溝状の深いものと浅い擦痕がある。主作業面は鴻曲しており、反対側は新しい欠損面である。長さ65.2mm、幅50.7mm、厚さ43.6mm、重さ113.0gを測る。(S5)は唯一の加工を加えた打製製品である。大型の平基式石器である。サメカイト製で自然面を比較的多く残している。長さ52.8mm、幅28.6mm、厚さ6.8mm、重さ8.5gを測る。SH05出土である。(S6)はサメカイト製の打製石砲丁かと考えられる石器である。当初は原石としたものを加工を加えて製品としたものかもしれない。背部部分にも割った状況が認められる。両面を大きく割って断面三角形にしたのちに刃部のみを細かい作業で作り出している。長さ129.9mm、幅64.1mm、厚さ18.5mm、重さ131.7gを測る。SH12からの出土である。(S7)は加工を加えているが器種不明である。中央がへこんでいるが、そこを利用したとは思われない。片面は平滑で手をほどんど加えられていない。SH05出土で、長さ36.6mm、幅22.4mm、厚さ6.0mm、重さ4.4gを測る。(S8)は南斜面の包含層から出土している。隣接して鉄器も出土している。大型打製石砲丁である。長さ294.7mm、幅178.0mm、厚さ42.2mm、重さ1220gを測る。やはり両面を大きく割り、刃部を作り出している。表面中央の背部に突起状になっており、持つのに都合が良いようになっている。この面にも剥離痕が認められ、成形したか取り去ろうとしたかは不明である。刃部のみ細かい加工を加えている。背部以外の刃部に近い面と裏面は大きな剥離痕だけで、細かい加工を加えていない。



第3図 須恵器実測図



第4図 鉄器実測図

竹原中山遺跡遺物観察表

番号	片土地・上置	器種	器高 (cm)	L1径 (cm)	器底 (cm)	形態的特徴		備考
						技法	他	
1 SH01	甌		-13.5	-3.2		ヨコナデ、縫合线条の凹線	直立ぎみの頸部から斜めに外へ開く、内外面に肥厚	
2 SH01	甌		-23.8	-4.15		体部外面は蛇行方向のハゲメ、口縁部はヨコナデ	この字口縁で、端部は上方に肥厚、体部側面に内湾する	
3 SH01	甌		-1.8			ヨコナデ	端部上方へつまみ上げる、端部もい、	
4 SH01	甌		-1.4	-5.6		コツ型形・彫刻	平底で立ち上がる	
5 SH01	甌		-2.5	-6.2		コビ竪形のちヨコビ闊形	平底から外反する	
6 SH01	高杯		-9.1	-10.9		内面收り、ヘリカスリのちヨコナデ、回線	外反する器部から肥厚する端部、杯縁内面アーチ	
7 SH04	甌		-14.8	-5.95		外面ハサ型形のちヨコナデ、凹像	外縁的に開く、端部軍かに肥厚	水差し
8 SH04	甌		-21.6	-3.6		ヨコナデ	外側する口縁部、端部内外に肥厚	
9 SH04	底部		-2.2	-10.2		平底で直線的に広がる	平底で直線的に広がる	
10 SH04	甌		-12.4	-6.55		体部から狭縁を持ち、口縁部に肥厚	内湾する全体部から狭縁を持ち、口縁部・内側に肥厚	
11 SH04	高杯		-1.25	-16.6		ヨコナデ?	外反し内外に肥厚	
12 SH04	高杯		-2.5	-14.8		ヨコナデ?	大きめ厚壁する器部、内面ある器部	唇誠
13 SH05	甌		-13.3	-2.5		ヨコナデ、ヘリミガキ?	直線的に広がる器部内外に肥厚	
14 SH05	甌		-4.3			ナデ仕上げ	体部破片・直線的	
15 SH05	甌		-14.9	-7.2		ヨコナデ?	甘い輪廓の頸部、体部内外窓、口縁部左外反	
16 SH05	甌		-13.7	-11.3		ヨコナデ?	内湾する大型の外部で毛穴開く口縁部、端部上方につまむ	
17 SH06	甌		-13.8	-4.65		ヨコナデ?	上方へ直線的に広がる、口縁部	唇誠
18 SH06	甌		-22.7	-1.65		ヨコナデ	直線的に広がる、端部内窓になる	高杯か
19 SH06	甌		-2.35	-8		ナデ仕上げ	平底で窓から内湾する	
20 SH06	甌		-2.7	-7.2		ナデ仕上げ	平底から外拡する体部引く縦く	
21 SH06	甌		-2.6	-8.6			平底から直線的に広がる	唇誠
22 SH06	甌		-2.4	-4.7			小ささな可憐な直線的に広がる	唇誠
23 SH06	甌		-6.3	-8.1		ナデ仕上げ	平底から直線的に広がる	
24 SH06	甌		-2.5	-5.8		ナデ仕上げ	平底から内窓する体部引く縦く	唇誠
25 SH06	甌		-17.9	-6.3		ヨコナデ	直線的な内窓から狭縁を持つて水平に延びる口縁部、肥厚	
26 SH06	甌		-25.6	-2.5			くの字形の口縁部、端部内外に肥厚	
27 SH06	甌		-16.8	-5			内湾する器部、端部から端部が内側に向く傾いた縁部	
28 SH06	甌		-2.1	-7.4			平底で外反する器部	唇誠
29 SH06	甌		-8.1	-11.2			平底から直線的に広がる	唇誠
30 SH06	甌		-5.95	6.3			平底から直線的に広がる	唇誠

竹原中山遺跡遺物観察表

31	SH408	脚台	-3.75	6.6	ヨコナデ	直線的に短い張り合部、体部外反する 外傾する頭部から外側に聞く頭部、内外に肥厚し端面平坦
32	SH409	蓋	-17	-4.8		僅かに内側する外側に張り合部、内外に肥厚し端面平坦
33	SH409	蓋	3.15		外面のシテ整形、液状文、内面ナデ	僅かに内側する外側に張り合部、内外に肥厚し端面平坦
34	SH409	蓋	-2.75	6.4		僅かに内側する外側に張り合部、内外に肥厚し端面平坦
35	SH110	蓋	-2.15	-8.1	窓部ナデ仕上げ	僅かに上げた感じとなり、内側溝のみの体部
36	SH111	蓋	-14.8	-8.05	ハク整形のものナデ仕上げ、口縁部ヨコナデ	直線的な体部からちいさい横筋で外反する口縁部
37	SH113	蓋(合口)	-28.5	-4	ヨコナデ	僅かに内側する外側に張り合部、内外に肥厚
38	SH113	盖	3.35	-10.6	ナデ仕上げ	僅かな上げ感で、内側ぎみの体部
39	SH113	蓋	-2.75	6.1	ナデ仕上げ、外面ヘラヨガキ	平面で体部外反する
40	SH113	蓋	-7.15	-7.5	ナデ整形のもの外面ヘラヨガキ	平面で直線的に広がる
41	SH114	底部	-4.2	5.9	ナデ仕上げ	平面で脚部突起し、外反する
42	SH114	蓋	-3.85		外側方向のハケ整形のものヨコナデ	水差し
43	SH114	蓋	-1.75	8.5	ナデ仕上げ	平面で前方に内側するが直線的
44	SH114	蓋	-2.75	6.7	外側方向のハケ整形のものナデ	平面で横みに内側すが直線的
45	SH114	底部	2.95	6.2		僅かに上げ感で外張する
46	SH114	高杯	-3.7	-13.5	ヨコナデ	直線的に広がり、端部肥厚する
47	SH115	無根盤	-10.95	11.55	コビ成形、整形のものヨコナデ、外腹ヘラガキ、内腹版ナデ	直線的に毛穴や窓が開く体部で端部丸く、右端部角張る
48	SH115	帶底部	-3.5	9.7		平面で直線的に広がる
49	SH115	臺底部	-4.65	4.55		平面で内側する底部の頭部
50	SH115	高杯	-4.85	-1.6	ヨコナデ、端面1条の凹線	器内側は、端部外側トントに肥厚
51	SX044	萬杯	-2.5	-14.5		内側する脚台部で、内外に肥厚
52	SX077	蓋	3.5	-6.2	ナデ仕上げ	平面で横みに内側するが直線的
53	SX077	蓋	-6.15	9.55	ナデ整形、仕上げ	平面で直線的に広がる
54	SX077	内杯	-4.05		ナデ仕上げ	内側する
55	SZ003	臺	6.6		織り方向のハケ整形のものナデ、6条押付の液状文	直面に毛穴が内側する体部
56	SZ003	萬杯	-3.85	-7.7		直線的に開き、端部肥厚
57	SZ006	蓋	6.5		ナデ仕上げ、4条の凹線、輪郭指頭正輪付炎袋	外反する
58	SZ007	臺	-26.8	-1		バチ形の口縁部
59	包含層	蓋	-18.6	-5.4		直面に毛穴が内側する口縁部、端部肥厚
60	包含層	蓋	-21.2	-8.15		大・外反し、輪部上方へつまみ上げる、
61	包含層	蓋	-16.2	-4	外側方向のハケ整形のものナデ、3条の凹線	外反し輪部下縁へ肥厚
62	包含層	臺	24.8	-1.5		バチ形の口縁部

竹原中山遺跡遺物観察表

63	包含層	臺		-15.3	外面ハケ整形、体部ヲチ付上ヶ、頭部ヨコナデ	内湾する体部から上方へ垂直に延びる頭部
64	包含層	臺		6.65		直立する口縫部
65	包含層	臺	*12.8	-4.05	ヨコナデ	外反する口縫部で、端部肥厚する
66	包含層	臺	*12.3	-4	外面ハケ整形、ヨコナデ	内湾する口縫部で、端部傾斜する
67	包含層	臺	*9.2	-4.5		直線的に外方へ広がる、端部角張り外側に肥厚
68	包含層	臺		-12.1		断面隅丸の方形
69	包含層	臺	-3	-11.8	ナデ	平底から外反する
70	包含層	臺	-3.2	-10.5	ナデ仕上げ	平底から外側へ開き体部
71	包含層	臺	-15.8	4.65	ヨコナデ	内湾、端部で小窓する口縫、口縫部も内湾部分で端部肥厚
72	包含層	臺	*15	-4.85	ヨコナデ	直線的に内傾する体部から幅広い形の口縫部四隅
73	包含層	臺	*13.7	-7.3	外面ハケ整形、内面コビ整形、口縫部ヨコナデ	内湾する体部から水平へ開き、端部直する延べ方に延びる
74	包含層	臺	*15.9	-5.3	外面ハケ整形、内面コビ整形、口縫部ヨコナデ	直線的に内傾する体部から外傾する延べ口縫部、端部直方に肥厚
75	包含層	臺	-2.55	3.5		不安定な小さな底盤、体部は内傾する
76	包含層	臺	-3.95	-5.6	ハケ整形	平底から引窓する体部直線的
77	包含層	臺	-3.95	3.7	コビ成形のちコビ調整	突出平底で体部直線的に延びる
78	包含層	臺	-6.75	-9.2		平底で体部直線的に延びる
79	包含層	臺	-8.9	7.8		平底で体部直線的に延びる
80	包含層	萬杯	-23.4	-7.55	ヨコナデ、2条の凹線	直線的に延びながら、屈曲状態は外側に肥厚
81	包含層	萬杯	-19.9	-7.5	ヨコナデ、3条の凹線	内湾する外側部で端部は外側に肥厚
82	包含層	萬杯	-22.3	-5.05	杯前部ヨコナデ、口縫部はヨコナデ	内湾する外側部で端部は外側に肥厚
83	包含層	萬杯	-21.6	4.95	ヨコナデ、3条の凹線	内湾する下部で輪郭はなく、端部は外側に肥厚
84	包含層	萬杯	-17.8	-2.5	ヨコナデ、端面:3条の凹線	内湾する外部で、水平に開き垂下する
85	包含層	萬杯	-18	-2.95	ヨコナデ	内側する部分で、水平に開き斜め下方に垂れる
86	包含層	萬杯	-4.2	-17.6		直線的に広がり、端部大きさ上方に肥厚
87	包含層	萬杯	-3.55	-14.2	内面ヘタケズリ、外面板ナナメヨミ	外反する脚部で、端部内外に肥厚
88	包含層	萬杯	-2.45	-17.1	内面ヘタケズリ、外面斜行輪齒文	内湾し、端部外に肥厚
89	包含層	漁器	-12.5	-2.4	ロクロナデ	直立がみに延び、端部内側が尖りぎみ

## V 総括—揖保川下流域の弥生時代中期社会の動向—

### 1.はじめに

竹原中山遺跡の調査を通して、この章では揖保川下流域の弥生時代中期社会の動向を検討していきたい。竹原中山遺跡を高地性集落と理解しているので、主に高地性集落の遺跡の実態を通じてこのことを検討していくといふと考えている。構成としては、高地性集落の定義と類型という研究史からはじめて、竹原中山遺跡の調査から得られた成果の特徴に触れ、揖保川下流域の弥生遺跡の実態の様相をみるとことによって、この時代の社会の動向の実態に少しでも近づければと思っている。

高地性集落の出現によって、弥生社会も大きく変質していくと捉えている。播磨地域の高地性集落の出現は、弥生時代中期中葉以降のことである。瀬戸内海の諸地域の弥生社会と連動している現象である。

そこで、まず、播磨地域の弥生土器の様式と編年のこととを簡単にでも触れておく必要がある。そこで、作成したのが、第1・2図である。

かつて、二十歳前半代に、この地域の弥生中期上器の分類と編年のこと（山本1971）を今里幾次先生の論（今里1969・1980）を主として、佐原真氏（佐原1964・1968）、石野博信氏（石野1967）の研究に導かれて論じたことがある。

今回、提示している案は、その時と変わっているので、そのことの説明を簡略にしておきたい。第Ⅲ式としたのは、凹線文採用以前で、かつて今里先生の編年に従い中期Ⅲとしたものである。凹線文採用以降を第IV式と捉え、第IV-1式、第IV-2式、第IV-3式と細分している。第IV-1式は中期4に、第IV-2式は中期5（古）、中期5（新）にはば相当している。第IV-3式は当時良好な資料がなく設定していない様式であり、今回、龜田遺跡出土弥生土器を基準資料と設定（注1）した。

第IV-3式は、岸本道昭氏の編年案（岸本1995）の中期Vの特徴と同じであり、同様式と捉えている。それは、第Ⅲ式以降の西播磨の地域的様式の特徴であった広口壺口縁部内面の凸帯文の消失であり、脚部の網目文が消え円形透孔の増加、摺津系広口壺の増大などであり、総じていえば西播磨の地域的様式が失われていく過程の現象とみることができる。

中期中葉	中期後葉		中期末葉	後期前半	
Ⅲ	IV-1	IV-2	IV-3	V-1	

山本 2005

第Ⅲ様式(古)	第Ⅲ様式(新)	第IV様式		第V様式

佐原 1968

中期前半		中期後半	
中期中葉		中期後葉	
中期Ⅲ	IV	V(古)	V(新)

今里 1969

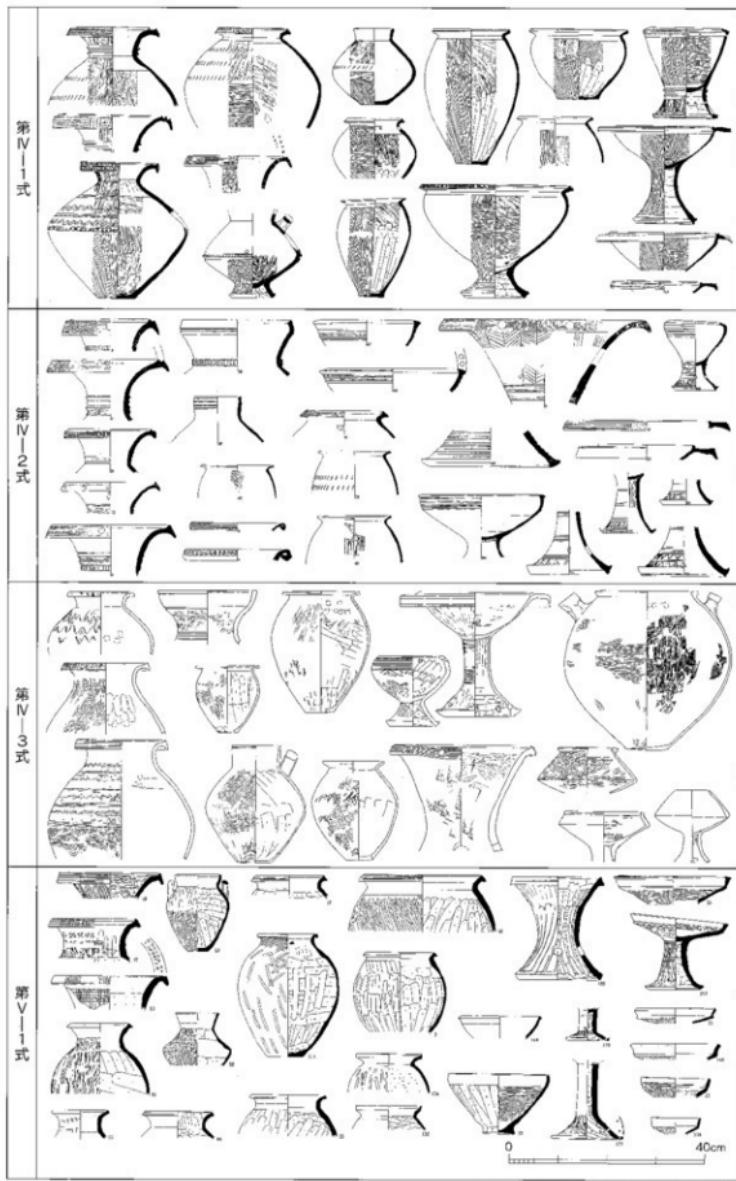
中期Ⅲ	IV	V(古)	V(新)

山本 1971

中期Ⅲ	IV(古)	IV(新)	V	後期1

岸本 1995

第5図 播磨地域の弥生時代中期土器編年案の比較



第6図 拠保川下流域の弥生時代中期後半縄年試案  
 (第IV-1式:北山遺跡・川島遺跡出土土器  
 第IV-2式:川島遺跡出土土器  
 第IV-3式:亀山遺跡出土土器  
 第V-1式:小神辻の堂遺跡出土土器)

時期区分としては、第III式を中期中葉、第IV—1式と第IV—2式を中期後葉、第IV—3式を中期末葉としている。曇年代については、森岡秀人氏（森岡1985）や岡村秀典氏（岡村1999）の研究を参考には大まかに、第III式を紀元前2世紀前半、第IV—1式を紀元前2世紀後半、第IV—2式を紀元前1世紀前半、第IV—3式を紀元前1世紀後半と捉えておきたい。

弥生時代後期については、ほとんど触れていないが、二重口縁壺の出現前を後期前半とし、以後を後期後半と時期区分し、後期前半を第V—1式、第V—2式の2細分に、後期後半を第V—3式、第V—4式、第V—5式と3細分の案（山本1990、2000）を考えている。

「魏志倭人伝」が伝える2世紀後半の「倭國亂」は第V—5式前後の時期と捉えていることを付記しておきたい。

## 2. 高地性集落の定義と類型

### (1) 高地性集落の定義

高地性集落とは、沖積平野等の低地を利用して水田經營を行う弥生時代の水稻耕作民にとって、不便な高地に立地し、異常と考えられる場所にある集落遺跡の総称と定義されている。そして、高地性集落の固有の特徴として、高所立地と見通しのきく立地（都山1974、1998）が強調されている。

しかし、「高所立地」ということ以外に、遺構のあり方や遺物組成などの考古学的事実によって低地の集落との機能的な差を、様々な多くの研究努力にもかかわらず、明確に指摘できないというのが実情であろう。

筆者は、高地性集落は低地の拠点的集落の動向と不可分に連結した弥生集落のひとつの類型である捉えている。弥生時代の農業共同体の集團関係は、低地の拠点集落を中心に展開されていると把握してまず間違いない。高地性集落は低地の拠点集落に社会的混乱や不安定、あるいは、政治的混乱等が生じた非常事態時に出現する現象と理解される。そのような意味で、低地の拠点集落を中心に展開する日常的社会であると規定すると、高地性集落は非日常に現出した社会状況と規定できる。高地性集落は拠点集落との関連で捉えてはじめてその意義が生き生きしたものになると認識している。

佐原真氏は、「多数の殺傷をともない得る集團間の武力衝突」と戦争を定義し、弥生時代の遺跡からは「環濠集落、高地集落、矢尻の発達、殺傷人骨をはじめとして戦争に関わる可能性をもつ考古学的事実が数多くそろっている」と指摘し、「弥生時代は戦争のあった社会と認めてよいであろう」（佐原1999）と結論づけている。都山比呂志氏も低地や高地の立地の有無にかかわらず防衛機能は弥生集落普遍の機能（都山1974）であると理解している。このように捉えれば、高地と低地の弥生集落の機能や性格の相異を遺構や遺物の差から把握するのは困難だということが本質的ではないのだろうか。

寺沢薰氏は、「高地性集落」一般的の抽出が高地性集落の研究の目的ではなく、「弥生時代の高比高の丘陵や山頂に經營された政治的緊張を背景にしたであろう「軍事的（防衛的）集落」の抽出なのであると論じる（寺沢2003）。このように論じるのであれば、低地の環濠集落にも、軍事的（防衛的）機能が属性としてもつことは、愛知県朝日遺跡で環濠の外側に造られた「逆茂木」の発見などみれば明らかであろう。要は、弥生社会の集團間の戦乱は高地や低地にかかわらず地域集團を巻き込むのであるから、両者を併せて研究することが高地性集落を論じるということに繋がっていくのであろう。

2002年に『古代文化』第54巻第4号で、「弥生時代高地性集落研究の現状と課題」が特集されてから高地性集落論が混沌としている研究状況のなかにすると取看される。混沌という言葉が高地性集落論のなかに頻繁に使用されている。

高地性集落の発掘調査事例の蓄積と、その多様な研究成果から、高地性集落論もその研究の成熟化に伴い論点が多様化、複雑化し、地域的研究の中に埋没を余儀されない状況（荒木2002）の中にあると指摘される。そして、森岡秀人氏は「[高地性集落]という用語や概念が用いられていること自体」そのものが当を得たものであったかどうかの根源的な再検討が必要（森岡2002）であると説く。第一線の高地性集落研究者がこの言辞を吐露するごとく混沌とした状況の中に高地性集落研究が嵌り込んでいるのであろうか。

そのようななか、寺沢薰氏は「高地性集落」なる用語を、弥生時代の「軍事的・防衛的機能を第一義的に有した高地や丘陵上の集落のみに限定的に使用する」とし、その遺跡の抽出と分析を通して、その類型化とその発展の諸段階の中に、すぐれて政治的・社会的課題である日本列島の王権形成のダイナミズムを読み解こう（寺沢2003）としている。柴田昌児氏も同じような視点で、高所立地の遺跡を軍事的・防衛的な「高地性集落」と山の生業主体の「山住み集落」の用語の分離を提唱（柴田2002、2004a、2004b）している。

しかし、いまだ高地性集落という用語は有力な代替案や撤回論のない状況の下でその歴史的意義（寺前2004）が模索されているのが現状であろう。

私はここで播磨地域の揖保川下流域の高地性集落の遺跡の実態を検討する。また、地域性の中に高地性集落を埋没さすとそしりを受けるかもしれないが、地域の実態を竹原中山遺跡の調査成果を通して叙述していきたい。

地域の実態を検討する前に、必要な事項の高地性集落がもつ要素の類型化を研究史の中から整理しておきたい。

## (2) 高地性集落の類型

①立地の二大別 「狭義の高地性集落」と「広義の高地性集落」の二大別は、戦後本格的な高地性集落の構築者である小野忠熙氏の命名である。小野氏は比高15m内外を境に低位集落と高位集落に大別し、後者を「軍事的戦闘と防衛にかかる遺構や遺物」をもつ遺跡を「狭義の高地性集落」とし、遺跡の立地という属性に基づき「広義の高地性集落」と分離（小野1953）した。

その後、都出氏は小野氏の分析視点とは異なる観点から、高地性集落を平野部との比高差を基にAタイプとBタイプとに分けた。Aタイプは「平野からの比高が100mを超える急峻な山頂や尾根上に立地して水稻栽培には極めて不便な場所にある」集落とし、いわゆる狭義の高地性集落に相当するとする。Bタイプは「平野からの比高が20から30m前後、平野との距離は特別に遠くないが、丘陵上の先端など自然の要害とも言うべき位置あるいは見晴らしのきく場所に集落を構え、平野部の集落とは区別すべき」集落とし、いわゆる広義の高地性集落あるいは準高地性集落にあたる（都出1974）とする。

高地性集落のこの二大別は最近までの傾向であり、石野博信氏の山稜性・丘陵性（石野1973）、寺沢の第I類型・第II類型（寺沢1978、2003）、森格也氏のI型・II型、駒井正明氏の山稜性・丘陵性（駒井2001）などの分類は都出氏の視点を引き継いだものである。いずれも前者が狭義の高地性集落に該当し、その理解に大きな相違はないが、問題は後者の広義の高地性集落の捉え方である。丘陵上にある集落をすべて広義の高地性集落と把握するかとどうかという問題である。もちろん丘陵上にある集落すべてを広義の高地性集落として捉えている訳ではない。

理論的に高地性集落を類型化する寺沢氏は、広義の高地性集落すなわち第II類型の高地性集落を「日常的な通常の生産活動や生活システムを根本的なところで逸脱しない」集落と規定し、「丘陵性集落」とでも呼ぶべき農耕集落範疇の集落だと論断し、高地性集落からの分離を提唱している。そして、「日常の農業経営に文脈をきたすほどの山頂や急峻な丘陵上につくられた集落」を第I類型とし、そこに、「共同体

の对外的権力発揚」の機能を読み解く。この二者の差違を生産地（水田）からの比高差に求め、生産地からの比高差が40mという目安を設定する。その根拠に、「大多数の低丘陵性の集落が比高40m以下に集中すること」と「古墳時代以降、現在に至るまでの水稻農業を生業とした深耕集落の立地が、全国的にも比高40mを超えることは稀であり、比高40mが水田での日常の農作業を支障なくおこなえるおよその境目である」と指摘（寺沢1978、2003）する。この数値は絶対的なものではなく、相対的な目安であるとし、高地性集落の抽出には集落固有の属性の検討が必要であると注意を喚起する。

この指摘は当然であり、一般に集落の立地条件は地域差が大きく、広義・狹義の高地性集落の分別、そして、広義の高地性集落と一般の丘陵上の集落の分別は、集落の経営時期、規模、低地の拠点的集落の関係など地域に則したきめ細かい分析が必要であることは言を要しないであろう。

ここでは、都出氏の高地性集落の類型化の視点を基本的に踏襲し、狭義・広義の高地性集落の用語を使用している。必要に応じて、寺沢氏の比高差40mの視点等の論点も参考に揖保川下流域の高地性集落を検討していきたい。

**②規模からの類型** 森岡氏は高地性集落の調査例の増加したことを見て、これまでの立地論からの脱却をも意図し、併存住居数の数から規模の類型化を試み、A～D型の4類型を設定（森岡1986）している。A型は1～2棟からなるきわめて小規模な高地性集落、B型は3～4棟止まりの住居群から成り、付帯遺構が伴うことが多い高地性集落、C型は6～7棟構成で、いわゆる単位集団の規模・構造をB型より満たす高地性集落、D型は広範囲な丘陵上に20棟を超える集住形態をとる高地性集落とする。そして、B・C型はその中間形態とし、C型の多くの実態がB型になる公算が高いと捉えている。

駒井正明氏も同じ視点から大規模・中規模・小規模の高地性集落が存在すると分析（駒井2001）している。2棟1単位からなる小規模な高地性集落と10棟前後で構成された中規模な高地性集落、集住形態をとる大規模な高地性集落の3類型を設定している。

私も後述する遺跡の実態と両氏の研究から学び、小規模・中規模・大規模の3類型の高地性集落があるとみている。1～2棟から小規模な高地性集落の類型は森岡氏と同じである。中規模な高地性集落は4～5棟前後からなるもので、低地の集落から高地性集落に移動する基礎的な単位の類型で、近藤義郎氏の定義するひとつ単位集団（近藤1959）で構成される規模の集落と捉えている。大規模な高地性集落とは、低地の拠点的集落の機能を引き継いだ集落で鉄製石剣や弥生小型彷彿鏡等の威信材を所有し、遠隔地との交易活動で入手したサヌカイトの大型素材剥片を所有する高地性集落で、住居数も前二者に比べて多いと捉えている。

**③経営時期からの類型** 高地性集落の生成にはいくつか波があることは多くの研究者が認めており、個々の高地性集落の存続期間にも短期間と長期間および間断期が存在していることも知られている。

森岡氏はかって高地性集落を、弥生前期～中期初頭型、中期後半型、中期末單純型、中後期連続型、終末期型（森岡1994）とその経営時期から類型化した。しかし、その後、前期～中期初頭型は「稻作農耕伝播に伴う地域的な拠点形成」に関連する集団移動の丘陵地に進出する類型とみなして高地性集落の範疇から分離する。そして、第1段階（弥生III・IV期）、第2段階（IV期末～V期初）、第3段階（V期前半～中期）、第4段階（V期後半～末）、第5段階（庄内期）の5段階を設定（森岡1996）し、その性格と歴史的意義を論じている。

都出氏は高地性集落からみた弥生時代の抗争や戦いの三段階説を提唱（都出1998）する。第1段階は紀元前後のもので小地域を統合する過程の争い、第2段階は2世紀末の「倭國の乱」期のもので西日本全体を巻き込む動乱、第3段階は3世紀のもので東日本に波及した動乱であるとする。

寺沢氏も高地性集落三段階説（寺沢2000）を唱える。第1次高地性集落は、弥生中期後半～後期初頭（BC1世紀～AD1世紀）のもの、第2次高地性集落は主に立地から第1タイプと第2タイプに分ける。第1タイプは第1次の高地性集落が後期の前半へと継続するが後期前半の限られた時期のもので、瀬戸内海や大阪湾沿岸の比高の高い山頂に多いものとし、第2タイプは比高差約100m未満の丘陵上の集落で、後期の全期間に継続するタイプのもので、拠点的高地性集落の性格付けをする。第3次高地性集落は3世紀前葉～後葉のもので、王權の誕生後中部瀬戸内や近畿の高地性集落は姿を消し、かわって東海や北陸、中国西部に集中するヤマト王權がかわる高地性集落と捉えている。その後も寺沢氏は高地性集落の論（寺沢2003）を展開し、第1次高地性集落をA・Bタイプに、第2次高地性集落をA-1・2タイプ、Bタイプに分類して、後期前半と後期後半に分離し、その性格や歴史的意義を詳論している。

拙稿では、各氏の論を参考しながら、揖保川下流域の高地性集落の生成と消長の課題を論じてみたい。

### 3. 竹原中山遺跡の集落の特徴

ここでは、比高差60m前後の丘陵上に立地する弥生時代の竹原中山遺跡の性格を前述してきた研究をも参考にしながら考えてみたい。再度、調査成果の内容を検討し、その特徴について列記しながらみていきたい。

①立地 遺跡は揖保川下流域に形成されたひとつ沖積平野である揖西平野を眼下に見下ろす位置に存在する。そして、遺跡はこの平野の西側に拡がる丘陵斜面上に立地し、標高85～95m前後である。地形を少し詳しくみれば、丘陵斜面の支尾根稜線の南北斜面に堅穴住居が築かれていた。この支尾根の南北には谷筋が走っており、遺跡を区切る役割を果たしている。遺跡の東側に発達する沖積地で、この遺跡と至近距離にある弥生時代中期の尾崎遺跡付近の平野部との比高差は62～67m前後である。

②眺望 この遺跡からの眺望はきわめて良好で、揖西平野の拠点的集落である清水・佐江遺跡をはじめ低地の弥生集落を眼下に見下ろし、養久山丘陵の北側にある養久・前地遺跡等の丘陵上の遺跡や揖保川東岸にある狭義の高地性集落である片山東山遺跡も充分可視できる。遠望できる範囲はさらに広く、播磨灘から揖保川河口を含む揖保川下流域の山並みや平野部をも含む。家島群島の男鹿島にある狭義の高地性集落の大山神社遺跡、揖保川下流域のこれも狭義の高地性集落である壇特山遺跡も遠望できる。

③経営時期 集落の維持期間をそれほど多くない出土土器からであるが、弥生時代中期末葉（第IV-3式）にその形成が始まり、その様式の期間内に終える短期間の集落と捉えて間違いないであろう。

④堅穴住居の占有面積 堅穴住居は切合いや拡張がみられる住居址があり、住居址の数え方として10基以上の番号を付しているが、同時併存の可能性の高い住居数は8棟前後と把握している。

その根拠は以下に述べることの検討がその前提として必要である。

藤田憲司氏の研究によれば、1軒の堅穴住居の占有面積は、防火対策の上からも堅穴住居間が10mをかなり下回る場合の同時併存例はあり得ないという重要な指摘（藤田1984）を行っている。この指摘は発掘された集落内の住居・建物の構成を分析する上では基本的観点であろう。

最近の発掘調査で、洪水で埋もれた弥生時代後期前半の堅穴住居址がきわめて良好な状態で検出された大阪府八尾南遺跡（大阪府文化財センター2004）が如実にそのことを物語っている。八尾南遺跡の各堅穴住居みれば、住居の壁体から約2～3m幅の周堤を巡らし、さらに周堤の外側に幅2m前後の浅い溝底の高低が一定でない周溝を巡らしている。なお、周堤の高さは20cm前後のものが多いが、40cmの高さを有するものもある。このことからみれば、通常、私達が発掘する堅穴住居址は周堤や周溝が削平を受け深い壁体を検出するのみであり、本来、堅穴住居はその壁体から少なくとも4～6m前後の占有空間が必要であ

ることがわかる。この発掘からも藤田氏の指摘が正当であることが実証された発掘例である。

八尾南遺跡の集落の居住域は河川を挟んで東西二つのグループに分れ、その西グループでは竪穴住居5棟、掘立柱建物2棟、竪穴道構と呼称される遺構1基、戸門3基から構成されている。竪穴住居5棟の内、竪穴住居1・4と竪穴住居2・3は大小の竪穴住居が2棟近接して築かれ様相を呈しており、2棟1単位で構成される住居群と読取れる。前者の竪穴住居壁体間距離は約7m、後者の壁体間距離は4mであり、2棟1単位で構成される住居の壁体間距離は藤田氏が想定するよりも短いことがある場合の例である。そして、竪穴住居7と前述した2棟1単位の住居間距離はそれぞれ約20m距離を有し、三角形状に計画的に配置された住居配置形態を採用している。そして、居住域の範囲をみれば東西の距離が70m前後、南北距離が70m以上である。

これは、まさに近藤義郎氏がいう5棟前後の竪穴住居の繋まりが、経営と消費の単位であり、また、生産の単位でもあるというひとつの一単位集団（近藤1959）の姿のみごとな実例である。そして、基礎的な単位集団の居住域の占める領域が100m前後の規模を有しているという藤田氏の指摘（藤田1984）とも適合している。

ひとつの竪穴住居が占める占有面積が平地の八尾南遺跡と同じ様相を示す丘陵上の遺跡として兵庫県養久・乙城山遺跡（深井、市橋1988）が上げられる。養久・乙城山遺跡は中原竹山遺跡と同じ揖西地域にある遺跡であり、その竪穴住居址3は竪穴住居址の像み状の上に後期古墳が築かれており、竪穴住居址の上部が古墳に守られ流失が免れたのであろう。丘陵上にある竪穴住居址としては比較的良好に遺存していた。竪穴住居址3は長方形を呈する2本柱の小形の竪穴住居であるが、住居壁体から周堤の痕跡と周溝を併せて幅が約3mを有する竪穴住居址が検出されている。時期は弥生中期末葉（第IV-3式）である。なお、この竪穴住居は後述する10型中央土坑をもつ六角型住居である。

低地の弥生時代前期前半の竪穴住居址であるが、神戸市玉津田中遺跡の例が同じ様相を呈しているのではないかとみている。発掘調査時や報告時では、竪穴住居址の周間に7基の浅い土坑（山本1984）がめぐらると捉えていたが、八尾南遺跡を見学したとき、周堤の外側をめぐる周溝に浅い窪み状のところが何カ所が認められたことから周堤の外を巡る周溝の痕跡ではないかと想い至った。この住居址をめぐるように配置されている7基の土坑と報告しているものも住居壁体からの幅をみると1.5~3.0mの間に収まる。本来この住居にも周堤と周溝が巡っていたと捉えてよいであろう。なお、この住居は4本柱で中央に灰穴炉をもつ径4.6mの円形の形態で、床面から多くのサヌカイトの削片・碎片が検出されており住居内で打製石器の製作を行っていたことも判っている。

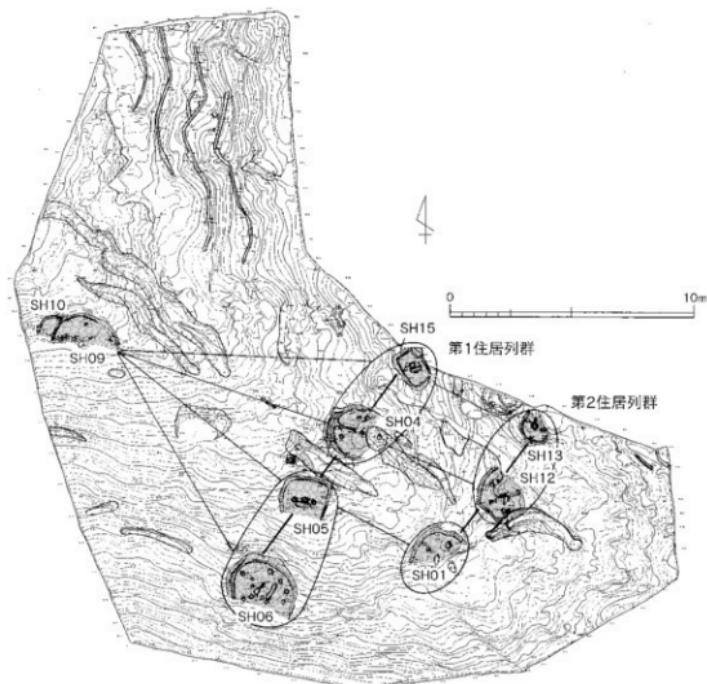
このようにみてくると、弥生時代前期前半から後期まで、低地に築かれた竪穴住居にも丘陵上に築かれた竪穴住居にも概体の外側に周堤・周溝を配するのが普遍的構造であり、一つの竪穴住居に一定の占有面積が必要であるとの藤田氏の指摘は当を得たものである。なお、このことは都出氏の竪穴住居の復元（都出1985）でも示されているところであり、東日本の静岡県登呂遺跡の平地式住居にも周堤の存在していることは古くから有名であり、古墳時代の群馬県黒井峯遺跡の住居にも周堤が存在していることは既に知られているところである。

⑤同時併存住居の検討とその配置形態　ここで再び竹原中山遺跡の竪穴住居の構成を検証してみたい。同じ調査担当者の渡辺氏とは遺構の解釈に若干の齟齬があり、私はSH11・SH14・SH02・SH03は竪穴住居址と解釈するのには難があるとみており、今回の検討では除外していることを了解願いたい。そうすると10基の番号を付いている竪穴住居址が対象になるが、SH09とSH10が、SH04とSH08が切合い関係にあり、同時に併存の竪穴住居を俎上にのせるのは8棟の竪穴住居址ということになる。

上層遺構のS D06・S D02・S D01・S X01と呼称している遺構は、尾根稜線上を走る山道が多雨時の水みちになり削られ溝状を呈したもので、この位置がほぼ尾根の稜線に相当する。

竪穴住居の分布をみれば、この尾根稜線を挟んで、南斜面にSH09・SH05・SH06・SH02の4棟、北斜面にSH04・SH15・SH12・SH13の4棟が確認できる。この8棟の竪穴住居が同時併存の可能性の可否であるが、出土七器はいずれも中期末葉の時期であり同時期とするのに文障はなく、住居間距離の検討がなされる。

竹原中山遺跡の竪穴住居の配置と住居壁体間距離をみれば、南斜面のSH09が他の住居群から離れて最高所に位置し、住居規模も大きい。南斜面のSH06とSH05、北斜面のSH04とSH15は大小の竪穴住居が2棟1単位で構成される住居群と把握でき、この4棟が尾根稜線に直交するかたちでほぼ一直線に列状に配置（第1住居列群と仮称）されている。この第1住居列群の4棟の住居壁体間距離が3.5～4.0mとその間隔が狭い。



第7図 竹原中山遺跡の竪穴住居の配置形態

この第1住居列群から東8mほど離れた低い位置に、SH01・SH12・SH13が稜線と直交するかたちで列状に配置（第2住居列群と仮称）されており、そのうちのSH12とSH13は大小が2棟1単位の住居群である。この第2住居列群の縦体間距離も約3mとその間隔が狭い。

周堤幅や周溝幅を考慮すると同時併存とするには少し困難な数値であるが、2棟1単位間の住居壁体間が狭い例は八尾南遺跡でも約4mという間隔のものが知られており、高地の斜面に築かれていることも配慮するとぎりぎり同時併存が可能な数値と捉えておきたい。2棟1単位間のSH05とSH04の住居壁体間が約3.5m、SH01とSH12の壁体住居間が3.0mという狭い間隔の数値は気になるところではあるが、尾根稜線を挟んでいるということもあり、我田引水的ではあるが、これもぎりぎり同時併存が可能な数値であると考えておきたい。

前述してきた細かい数値の検討も大切であるが、なによりも、SH09を頂点にする第1住居列群と第2住居列群の計画的とみえる堅穴住居の空間配置が、この8棟の堅穴住居の同時併存の可能性がきわめて高いことを雄弁に物語っているように直感している。

SH09と第1住居列群との住居壁体間距離は17～23mであり、高さにしてSH09が第1住居列群より6～9m高い位置にあり、また、第1住居列群と第2住居列群の間隔が約8mの間隔で列状に並ぶこと、列状の住居間が3.0～4.0mという間隔で配置されていることは、設計図的なものによって計画的に造成され、堅穴住居を配置した集落と捉えてもいいのではないだろうかと考えているところである。

⑥堅穴住居の平面形態と規模 2棟1単位で構成される堅穴住居群をみれば、平面形態が円形系統と方形系統のものがセットになり、円形系統のものが規模は大きい。例外的にSH12とSH13は方形同士の組合せである。そして、南斜面の住居群の方が北斜面の住居群より概して規模が大きい傾向が読み取れる。特に方形系統の堅穴住居にそのことが顕著であり、SH05とSH15・SH13の床面積を比較すれば、前者が倍以上の面積を有している。

竹原中山遺跡の堅穴住居址は斜面に築かれていることも関係して、その遺存状態がきわめてわるく、床面積を示さないほうが無難であるが、復元的に捉えてその大まかな概数をあえて示せば、一番大きいSH09が約20m<sup>2</sup>前後、SH06が約16m<sup>2</sup>前後、SH04・SH05・SH12・SH1が約12～13m<sup>2</sup>前後、SH13・SH15が約5m<sup>2</sup>前後である。

南斜面と北斜面のグループは、その住居の配置形態から近親的な集団と捉えられるが、それぞれを別な単位集団のまとまりと把握すれば、住居規模から南斜面のグループがより優位な集団と捉えていいであろう。このことが、SH09が南斜面にあることと関係し、SH09はこの集落の二つのグループの家長的なリーダーの住居と捉えていいのであろう。

なお、床面の焼土や炭の存在により焼失住居と捉えているのは、SH09、SH01、SH12の3棟の堅穴住居であり、その比率は37.5%である。その比率は高いといえるであろう。

竹原中山遺跡の堅穴住居は丘陵斜面地に築かれていることも関係して遺存状態はあまり良くない。高地性集落の堅穴住居址によくみられる現象であり、その原因として廃絶後の床面の流失が考えられ、造成時における盛土造成が主因になっているものとみられる。そのため、正確な平面形や主柱穴の本数も、また、住居内部の諸施設も捉えがたくしている。

個々の堅穴住居址の詳しい観察はあまり述べることは得策ではないとみられることは承知しているが、復元的に叙述していくこと敢ていただたい。

堅穴住居の平面形としては、円形系統と方形系統があること、2棟1単位の住居の組合せで円形系統の住居の方が規模は大きく、方形系統の規模が小さいことは前述しているとおりである。

同時期の低地の竪穴住居も円形の規模が大きく方形が小さいことは、播磨地域の姫路市六角遺跡（高瀬編1994）、加古川市美乃利遺跡（山田編1997）などでも確認されており、同時期の集落の竪穴住居の規模では普遍的な状態であることは多くの遺跡で確認されていることである。竹原中山遺跡と同じ高地性集落である攝津地域の北部である奈カリ与遺跡（井守編1983）でも同じ状態が看取される。

低地の先に挙げた遺跡では、相対的に、竹原中山遺跡よりも方形系統の小規模なものでも規模が倍以上大きい。同じ高地性集落でも、奈カリ与遺跡の方形系統の規模の方が竹原中山遺跡の方形系統の規模よりも倍面積の規模を有している。また、先に挙げた遺跡は円形系統の規模も竹原中山遺跡より相対的に大きい規模を有している。このことの理由は明確には指摘できないが、竹原中山遺跡が眺望等の関係で瘦せ尾根に占地せざるを得ないことと関係しているかも知れない。地域の地形的な課題である可能性を有しているであろう。

主柱の本数をみれば、最も規模の大きいSH09が5本柱の可能性が高いことが推定される。次に規模が大きいSH06の主柱が4本か5本かなやましいところであり、壁体からの距離を参考にみれば5本柱の可能性がこされる。4本柱は円形系統のSH04、方形系統のSH01・SH12がその可能性が高いであろう。明確な2本柱はSH05である。

2本柱の可能性のあるものとして、SH13が指摘できかもしれないが、ピットが浅く、方形の住居に対して2つのピットが斜行しており、主柱ではないであろう。SH13とSH15の住居は規模も小さく、主柱のない上屋構造をもつものであろう。

⑦六角型住居の提唱 住居内部の施設がよく捉えられる住居址例は少ないが、弥生時代前期以降の住居中央に灰穴炉をもつ住居はみられないが、SH05が地域的な特徴をよく示す住居例である。SH05は住居の中央に細長い溝状の浅い土坑（溝状土坑）と長方形の深い土坑（中央土坑）がセットで造られている。SH13もその可能性が高い。

いわゆる10型中央土坑（多賀1996）をもつ住居型で、前者に炭化物、灰が充満して縁辺部に熱を受けて赤変していることが多いの遺跡で確認されており、溝状土坑はか址とみて間違いない。中央土坑の機能については明確でない（井守1983）が、溝状土坑にから流れ込んだ炭屑が兵庫県三田市奈カリ与遺跡や兵庫県姫路市六角遺跡で確認されており、住居使用時には開かれていたことは明らかである。六角遺跡ではサヌカイトの剥片・碎片が多量に出土しており、そのうちの9割を超す量が中央土坑から出土しており、中央土坑が石器製作の際に出る石屑の廻叢場所（三原1994）であると捉えられている。炉からの炭や灰の流入や石屑が多く出ることから、中央土坑は住居内を清掃するための廻叢土坑である可能性が高いと言える。

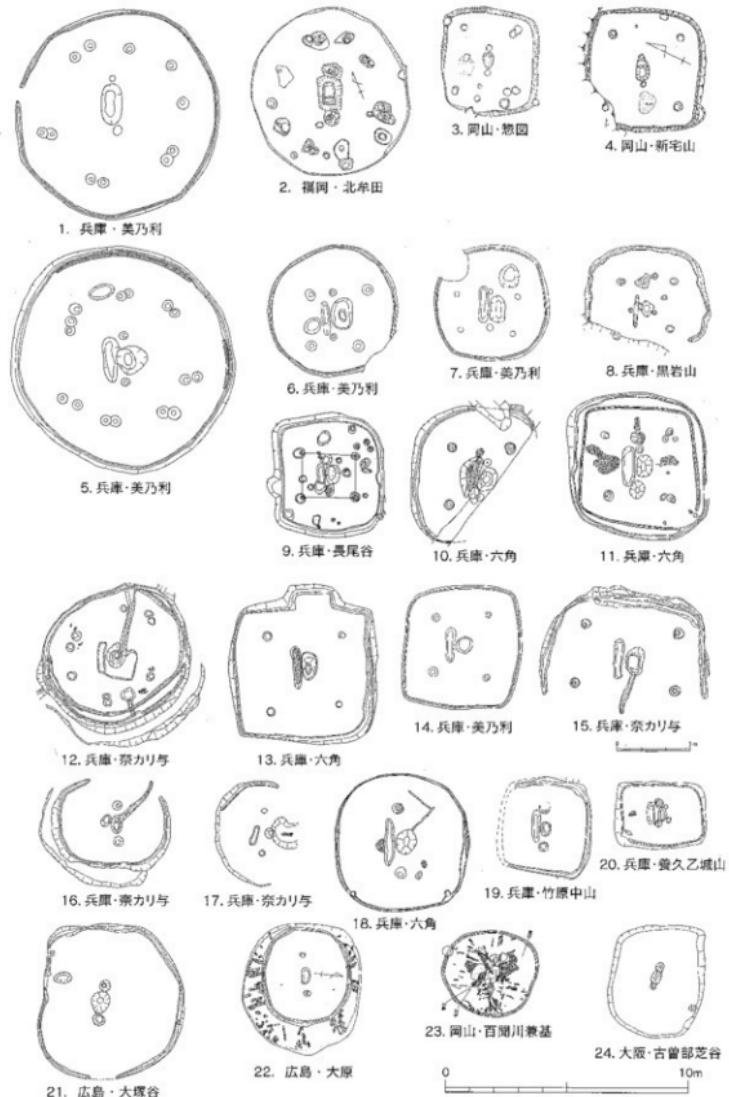
この10型中央土坑は規模の大きい円形の住居にも、規模の小さい方形の住居にも採用される形態で、もちろん主柱の本数とも関連していない。

10型中央土坑をもつ住居型はきわめて偏った分布をしており、播磨地域から三田盆地を含む北摂地域や丹波地域に限定された範囲（山下1994、1999）でその多くが確認されている（注2）。

この住居型が採用されるのは、弥生時代中期後半、その中でも中期末葉（第IV—3式）の例が圧倒的に多い。後期にも続くが、後期後半には少くなり、終末期（庄内式期）にはほとんど続かない。

この住居型を精力的に研究している山下史朗氏とともに相談したのであるが、「10型中央土坑をもつ住居型」と記述するのは面倒であり、この住居型の開始はどうみても播磨地域であり、その特徴を的確に指摘し報告された六角遺跡の名をとって「六角型住居」と呼称したい（注3）。

六角型住居の成立の淵源は、中間研二氏が提唱した発展期の松菊里型住居（中間1987）の中にあり、石野博信氏が発展期の松菊里型住居を北牟田型住居と神辺型住居という二類型を設定（石野1985）した。そ



(北牟型住居：1～4、六角型住居Aタイプ：5～11、六角型住居Bタイプ：12～20、神辺型住居：21～24)

第8図 六角型住居とその関連の堅穴住居

の前者の北牟田型住居が影響して六角型住居が成立した（第4図）とみている。石野は北牟田型住居の分布は、筑前・筑後・肥前・肥後にあり、神呪型住居の分布は広島県にあると指摘している。

六角型住居を多く検出している美乃利遺跡・六角遺跡等でも北牟田型住居を確認しており、吉備地域の用木山遺跡（押原1997）、奥坂遺跡（高畠、福井1983）等でもその存在が知られている。伊予地域の平坂II遺跡（作田1991）、半田山遺跡（半嶋編1991）等でもあり、東方に拡散している状況が窺い知れる。

北牟田型住居とは住居中央部に単独の土坑をもち、主柱とは別に土坑両端に柱穴状小穴をもつ住居型である。六角型住居の多くの例にも10土坑の両端に主柱との柱穴状小穴を確認されおり、北牟田型住居の中央部の土坑が炉（溝状土坑）と施業土坑（中央土坑）に機能分化した形態であると捉えている。そして、溝状土坑が中央土坑に対して南側に位置するという原則（山下1994）が堅く守られている。

柱穴状小穴の機能はよくわからないが、美乃利遺跡の例では柱痕跡が認められるものと認められないものの両者がある。柱穴状小穴の規模も大小がみられる。なお、10型中央土坑両端に柱穴状小穴をもつ六角型住居をAタイプ、もたないものをBタイプと分類しておきたい。

六角型住居の成立と流行は、拠点的な集落が廃絶する前後の時期にみられる現象で、播磨地域の竪穴住居の構造にもきわめて大きな変化をもたらしたと捉えている。播磨地域の次の住居の大きな変化は、ベット状遺構をもつ住居の盛行で、後期後半から終末期にかけての時期である。この住居型も西方からの波及によってその存在が考えられる住居型である。

⑥出土石器 竹原中山遺跡の遺構や包含層から出土した石器（注4）をみれば、武器類や農工具の磨製石器類は1点も出土していない、圧倒的にサヌカイトの剥片・碎片が多い。サヌカイトの定型的な打製石器は石鐵の先端片2点のみであり、不定形な打製石器では楔形石器、削器が、そして、二次加工のある剥片も出土している。包含層の出土であるが、長さ12.99cm、幅6.41cm、厚み1.85cm、重量131.7gの大形素材剥片の出土が注目される。他に、投擲石2点（後述する鉢巻状のもの1点）、砥石2点、磨石（叩石）1点が出土している。

先に同時併存の竪穴住居8棟のうち6棟からサヌカイトの剥片・碎片が検出されており、これらの住居ではサヌカイトを素材とした石器製作を盛んに行っているのに、その定型的な石器の出土量がきわめて少ない特殊な状況が看取され、高地性集落の石器組成上においても、きわめて偏在性の高いパターン（寺沢2003）を示している。なお、サヌカイトは肉眼観察であるがそのほとんどは潤滑面のものとみられる。

各竪穴住居の埋土や床面から出土した石器を記せば、SH09からは楔形石器片1点、削器1点、剥片・碎片80点、砥石片1点、SH06からは楔形石器片5点、剥片・碎片8点、叩石（磨石）1点、SH01からは削器1点、二次加工のある剥片1点、剥片・碎片649点（その多くが碎片）、SH05からは打製石鐵片2点、楔形石器片5点、削器1点、二次加工のある剥片9点、剥片・碎片34点、投擲石1点、砥石片1点、SH12からは削器1点、SH15からは楔形石器片1点、削器片1点、SH13からは二次加工のある剥片1点、剥片・碎片12点である。その内サヌカイトの各住居の総重量を記せば、SH09は21.0kg、SH06は91.9kg、SH01は37.5kg、SH05は91.6kg、SH12は131.7kg、SH13は9.0kgである。

低地の六角遺跡も12棟中10棟までの竪穴住居で、サヌカイトを使用した打製石器の製作を行っており、その占有率が竹原中山遺跡と同じように高い遺跡である。遺跡から出土した総数10,154点、重量364.45kgのうち、SH02が数量比率で56.6%、重量比率で51.5%も占め他の住居を凌駕していることから「SH02が素材剥片の生産を担い、他の竪穴住居において石器製作の工程を分担した」と興味深い分析（三原1994）を行っている。なお、SH02は円形住居で床面積50.8m<sup>2</sup>という大形住居である。

このようなあり方が普遍的な現象であるかどうかは今後の課題であるが、六角型住居を多くもつ低地の

美乃利遺跡や高地性集落の奈カリ寺遺跡でもの打製石器を製作したとみられる堅穴住居の占める割合は高いと言える。また、三田市にある高地性集落の有鼻遺跡の石器を分析した櫛宜田佳男氏も円形住居・方形住居の区別なく、大形住居・小形住居の区別もなく、ほとんどの住居単位で打製石器の製作を行っていた（櫛宜田1999）と考えている。

これらの遺跡は弥生時代中期末葉の集落であり、低地の立地でも、高地の立地でも、これらの遺跡の存在する地域では、拠点的集落が廃絶した後の状況を示している。それまでの拠点的集落が維持経営されていた段階での堅穴住居単位における打製石器の製作の割合などと比較は今後の検討課題としておきたい。

いずれにしても、弥生時代後期になると神戸市表山遺跡（後期前半の高地性集落）にみられるようにほとんどの石器が出石しない播磨地域にあって、縄文時代以来の石器製作技術の伝統が終了する直前の、打製石器製作のこの盛行をどうみればよいのであろうか。同時にみても、弥生中期末のこの現象は異常な事態を物語っていると捉えざるを得ないであろう。時代の大きな転換期の異常な現象であるのだろう。

鉄器は断面が長方形（ $1.3 \times 0.65\text{cm}$ ）のものが1点出土しており、中期末葉の時期のものでよいとみている。

#### 4. 拠保川下流域の高地性集落の実態

拠保川は兵庫県の最高峰、水ノ山の南側斜面に源を発して西播の中部を南流して瀬戸内海にそそぐ、全長69.7km、流域面積770km<sup>2</sup>の1級河川である。上流域、中流域、下流域と分けられる。下流域は栗栖川との合流点より南にある通称鶴鳩山と片山の挟まれた南側に形成された広域な沖積平野を指している。林田川や大津川の下流も拠保川下流域に含めて捉えている。

水田経営を主要な生産基盤とする農耕社会である弥生時代の拠点的集落は、低地おもに沖積平野に形成されることが初期農耕の技術段階では基本形と認識している。農業共同体的結合を成し遂げたとみられる基礎地域（酒井1984、1987）における弥生集落の動向は、この拠点的集落を中心に展開していると把握している。

拠保川下流の右岸域では、地形的なまとまりと遺跡の分布状況から基礎地域とみられる集団を4地域ぐらいの設定が可能であろう。北から摂西地域、半田・神戸地域、河内地域、御津地域と仮称（第9図）しておきたい。

拠保川下流の左岸地域は、右岸地域のような地形的なまとまりから基礎地域を析出することが困難な条件にあるが、判明している弥生遺跡の状況から4つほどの基礎地域を想定している。南から、大津茂川下流域にあたる勝原地域、斑鳩地域、佐用岡地域、林田川と摂保川に挟まれた普田地域と仮称（第9図）しておきたい。

##### （1）摂西地域

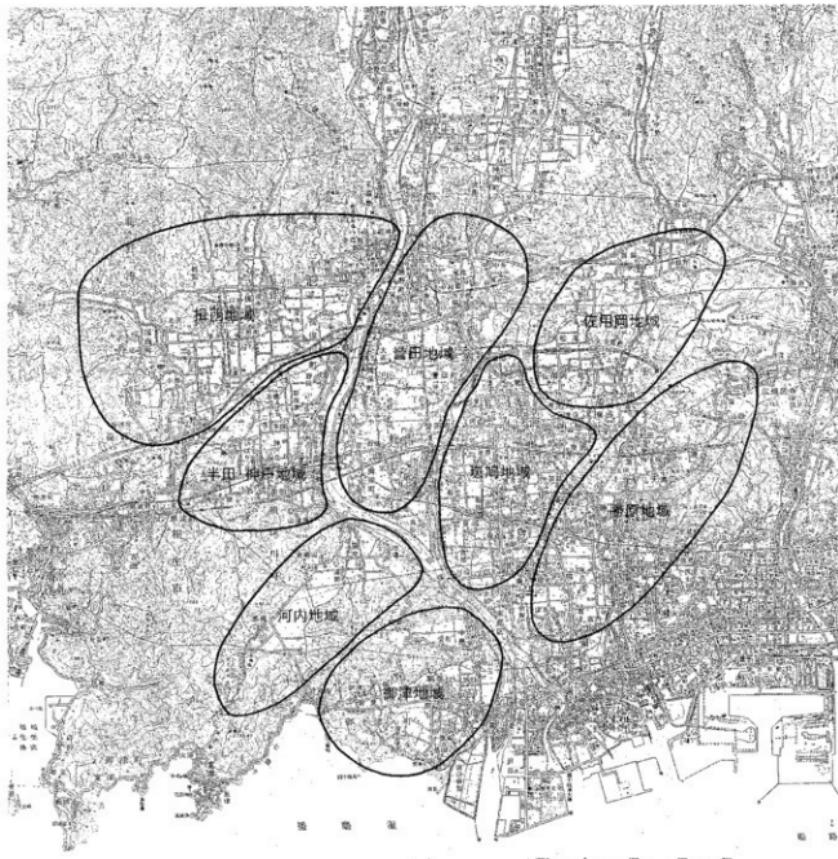
竹原中山遺跡は摂西平野の西縁に位置する丘陵上に立地する遺跡であり、この地域の遺跡から検討していくといきたい。

岸本道昭氏は、摂西地域を「農業共同体的結合」をなした地域的集団のモデルケースとして、弥生集落類型を主に立地と規模から5類型（岸本1995）に分けて捉えている。すなわち、集落類型A=拠点の大規模集落、集落類型B=派生的中規模集落、集落類型C=山村的小規模集落、集落類型D=丘陵上小規模集落、集落類型E=高地性集落である。そして、「中期から後期の断絶」現象を中期後半の争乱状態と解し、抗争の結果として播磨地域は畿内勢力圏に編成されたと解釈する。魅力的な解釈であるが、概念的にすぎるところがあり、今後の検証が必要であろう。

揖西地域の拠点的集落は、中期前葉から集落が形成される清水遺跡（第II～IV-2式）と中期中葉から始まる佐江遺跡（第III～IV-2式）であり、両遺跡は近接しており一体の集落である可能性が高いので清水・佐江遺跡（岸本1995）と呼ぶのがよいであろう。低地の周辺遺跡では北山遺跡（第III～IV-1式）、尾崎遺跡（第III～IV-2式）がある。低地のこれらの遺跡は中期末葉（第IV-III式）から後期前半（第V-1・2式）には集落が廃絶している。後期前半の低地の遺跡としては小神辻の堂遺跡（第V-1式）が調査されている。この地域でも山麓や丘陵上に遺跡が増加するのは中期後葉（第IV-1式）以降である。

揖西地域は播磨地域の中では、弥生遺跡の調査が比較的進んでおり、丘陵に立地する遺跡の調査例も多いが、比高100mを超える狭義の高地性集落は確認されていない。竹原中山遺跡が比高の最も高い遺跡である。

丘陵上の調査された遺跡の実態を検討し、高地性集落の動向をみていくたい。



第9図 搞保川下流域の基礎地域

### ①長尾タイ山遺跡（上田、是川、中溝他1982）

たつの市揖西町長尾字タイ山に所在する。遺跡は竹原中山遺跡の眼下にある独立丘陵上に立地し、山頂の最高所は標高74.6mである。古墳の調査を目的で1970年に発掘調査が行われた遺跡である。山頂のC区（標高74m）や北側の丘陵先端のD区（標高50～60m）にある古墳の下層（盛土や周溝）から弥生土器や太形蛤刃石斧、石鏽、サヌカイトの剥片が出土し、この丘陵に弥生時代の集落が存在することが明らかになった。この遺跡と至近距離にある尾崎遺跡がある平野部との比高差は、山頂で51m、丘陵先端で27～37mである。

弥生時代の遺構はほとんど検出されていないが、山頂のC区に、報告書では古墳時代後期の「円形の堅穴式建築址」（注5）とされ、祭祀的な建物あるいは廃宮と推測されている遺構が検出されている。しかし、筆者は弥生時代の堅穴住居址と理解していいのではないかと捉えている。堅穴住居址とみれば、径7mの円形で主柱の数は8本の大形の住居である。堅穴住居址の外周囲に整然と配置される26ヶ所の小ピットは垂木の痕跡とみていいであろう。山頂区で出土する土器から弥生中期中葉（第III式）であろう。

丘陵から出土する弥生土器は僅かであり、そのすべてが第III式であり、C・D区とも中期中葉のきわめて短期間のみ維持された集落である。

サヌカイト製の打製石鏽が5点出土し、その内の1点は4.45kgの重量感のある有茎式であるが、他の4点は2空未溝の平基式2点、凹基・半基式の石鏽である。

古墳の築造によって住居址など壊されている可能性もあり、どの程度の規模の集落であったのかを把握するには困難であるが、小規模な集落と想定している。

この遺跡を高地性集落と捉えるかどうかの問題であるが、結局のところ比高差に頼らざる得ないところが大きいが、小規模な集落であることも加味して、広義の高地性集落と捉えている。守沢氏の第1次高地性集落の第I類型Bタイプ（守沢2003）の範疇の遺跡であろう。

### ②龍子向イ山遺跡（渡辺、村上他1987）

たつの市揖西町龍子字向イ山に所在する。遺跡は揖西地域の南縁にあたる丘陵の支尾根の先端に立地する。考古学的には著名な養久山古墳群のある養久山丘陵の北側に延びる尾根上にある遺跡である。

遺跡の標高は32～45mであり、遺構は標高35m前後の緩斜面に拡張がみられる堅穴住居址1基（報告書では堅穴住居址1・2号）と標高40～42前に堅穴住居址と断定するには躊躇をおぼえる遺構1基（同・堅穴住居址3号、住居であれば2本柱の住居）、段状遺構（同・柵状遺構）、ピット群が検出されている。

揖西平野部との比高差は前者で11m、後者で22mである。

弥生土器の特徴から、中期中葉の第III式に始まり、中期後葉の第IV-1式も僅かに存在するが、多くは中期後葉の第IV-2式であり、この時期に主体をおく遺跡である。弥生土器の地域様式は西播磨の地域的特徴をよく示している。なお、形態から朱精製土器（内面朱付着土器）が1点出土していることは注目される。

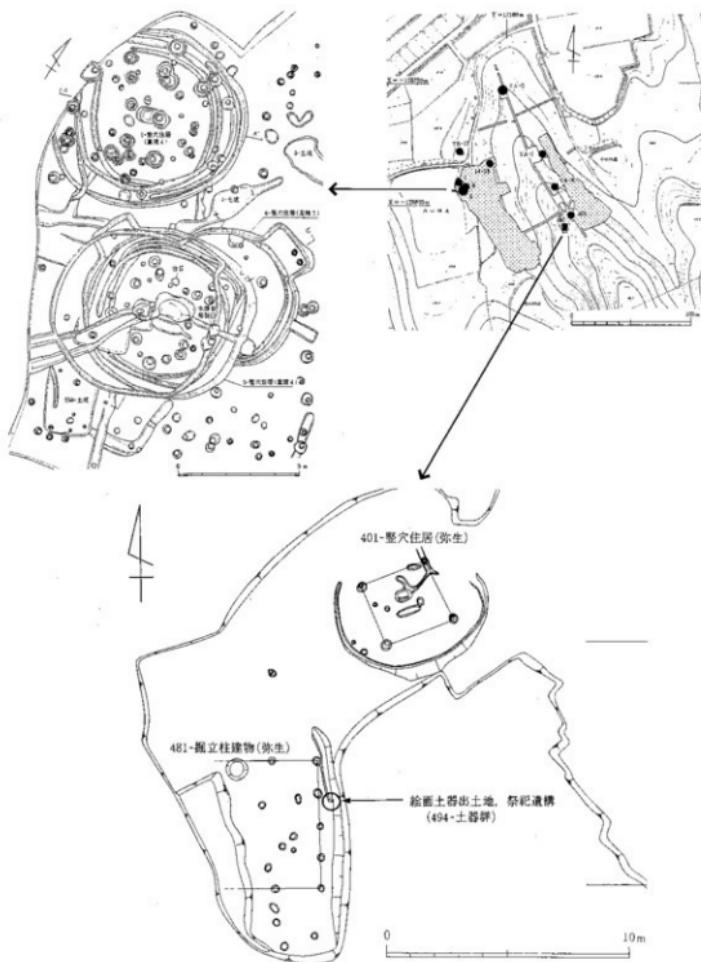
石器の数量は多くないが、磨製石器では太型蛤刃石斧1、柱状片刃石斧2が出土し、石窓1は出土していない。サヌカイトの打製石器では石鏽2（平基式1、凹基式1）で、不定形な石器では楔形石器2、削器4、二次加工のある剥片1が、他に砥石2、叩石1、磨石1、礫石錐1が出土している。

堅穴住居2棟で構成される小規模な集落であり、住居間距離は約20mである。広義の高地性集落として位置づけるに躊躇を覚える遺跡である。

### ③養久山・前地遺跡（岸本編1995）

たつの市揖西町前地字山田に所在する。1993年の開発の事前確認調査で発見された遺跡である。確認調査の結果、遺跡は尾根上から山麓にかけての約12,000m<sup>2</sup>の範囲に亘がっている。尾根上の中心部は保存さ

れ、損壊を受ける尾根の一部と山麓部の約4,150m<sup>2</sup>の本発掘調査が実施された。



第10図 養久山・前地遺跡の遺構（岸本編1995から作成）

弥生時代の堅穴住居の分布をみれば、尾根稜線上付近に築かれたものと谷地形低地部と呼ばれる山麓部に築かれたものに分れる。前者は標高30~45m付近で、平野部との比高差7~22mであり、後者は標高24~30m付近で、平野部との比高差ほとんどなく、わずか1~7mの差である。

堅穴住居址のあり様も尾根上部と山麓部すいぶんと異なっている。山麓部の堅穴住居が拡張や切合い関係によって著しい重複が認められるのに対して、尾根上部の堅穴住居は拡張や切合い関係が認められない。前者が同一場所に何回もの建替えを行い長期間にわたって使用されていたのに対して、後者は短期間のみの使用ということができる。

山麓部の堅穴住居址をみれば、「5—堅穴住居」と「6—堅穴住居」は切合い関係にあるが、「5—堅穴住居」でも6回もの建替えがあり、「6—堅穴住居」で2回の建替えが行われており、同一場所に計8回もの建替えが行なわれていることになる。図示された「5—堅穴住居」出土の弥生土器をみれば、中期中葉の第Ⅲ様式、中期後半の第Ⅳ—2様式、後期初頭の第V—1式の土器が認められ、土器からも長期間の使用が証明されるであろう。他の山麓部の住居をみても、「1—堅穴住居」は4回の建替えがあり、「14・15—堅穴住居」は切合い関係のある住居址も同じ場所に合計4回の建替えが認められる。なお、「1—堅穴住居」と「5・6—堅穴住居」は近接した位置関係にあり同時期の存在とするには疑問があり、同平坦面に造成された位置に建替えられたものと理解すると、合計12回もの建替えられたことになる。

尾根上には確認調査も含めて4基の堅穴住居址と1基の掘立柱建物が検出されており、いずれの遺構も切合い関係がなく、出土弥生土器の示す年代は中期末の第Ⅳ—3式の時期であり、きわめて短期間に経営された遺跡である。

すなわち、山麓部の遺跡は、中期中葉におそらく集団分岐により開始された集落で、後期初頭まで間断期をおいて長期間にわたって経営された集落と捉えられる。対して、尾根上の遺跡は山麓部の集団が尾根上の高所に移動し、中期末の短期間のみに経営・維持された集落と言える。

山麓部の堅穴住居址からは、サヌカイトの剥片・碎片がすべての住居から出土しており、サヌカイトの石器製作を行っていたことが判る。「6—堅穴住居」がサヌカイト剥片・碎片は10数点と少ないが、他の住居址からは50~100点以上のサヌカイトの剥片・碎片が検出されている。注目されるものとして、「5—堅穴住居」から出土した凝灰岩質砂岩の水銀朱精製石臼がある。他に住居址から磨石や投弾石や砥石も出土しており注意をひく。

尾根上では、「494—土器群」以外は遺物の出土はきわめてすくないが、絵画土器が出土した「494—土器群」・「481—掘立柱建物」・「401—堅穴住居」の関係はきわめて注目される。この遺構群は調査された遺構の中では尾根の最高所に位置する。「494—土器群」は掘立柱建物の東桁行と掘立柱建物を建てるために造成した岩盤の間に廃棄された状態で検出された掘立柱建物と密接な関係をもつ遺構とみられる。

「494—土器群」からは推定80個以上の弥生土器と挿入柱状片瓦石斧1点、砥石1点が出土しており、土器には絵画土器とともに大形の壺や器台の占める割合が高く、また、特異な形態の精製な両把手尖底カツブ形土器やミニチュア時の存在から祭祀に使用された土器群と捉えられている。

なお、尾根上で唯一全掘された「401—堅穴住居」は10型中央土坑をもつ六角型住居で、中央土坑の両端に小穴をもつタイプである。この堅穴住居址からはサヌカイトの剥片・碎片は出土していない。

#### ④養久・乙城山遺跡（深井、市橋1988）

たつの市揖四町佐江字乙城に所在する。遺跡は揖西地域の南縁にあたり、養久山山塊の北側支尾根の東斜面に立地する。遺構は標高60~66m付近に分布し、平野部との比高差は27~33mである。

堅穴住居址3基と土坑2基が検出されたと報告されているが、そのうちの2基は周壁溝や柱穴も検出され

ておらず、竪穴住居址と捉えるには難点が多く、竪穴遺構とみておくほうがよいであろう。

竪穴住居址3は前述しているように良好に遺存していた。長辺3.8m、短辺3.0mの長方形の平面を有する2本柱の小形の竪穴住居である。主柱は長辺に対して直交に配し、中央に10型土坑を造っている六角型住居である。溝状土坑を南側に、中央土坑を北側に配する原則はこの住居でも守られており、このことが2本柱の竪穴住居の通例に反し、長辺に対して直交という形を採用した原因であろう。住居の棚状部から柱状片刃石斧の製品と未製品が南北に対のような状態で出土しており、有茎式の打製石鏃片1点も出土した。竪穴住居址の床面からサヌカイトの剥片・碎片が出土しており、この住居でも石器製作が行われていた。この住居の時期は出土土器から中期末葉（第IV-3式）である。

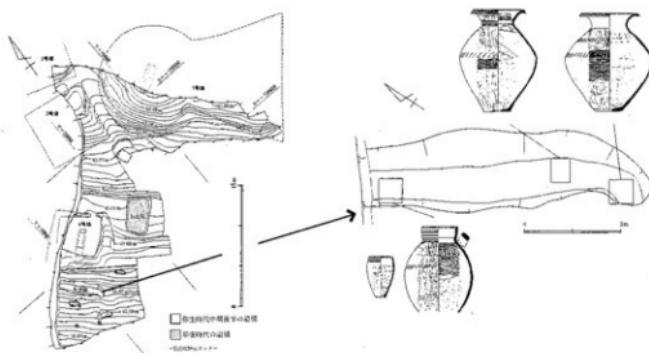
2基の土坑は両者とも岩盤が赤変しており、土坑2からは土器と凹基式の打製石鏃1点が出土しており、土坑2の時期は中期前葉（第II様式）であり、住居の時期よりは古い。

竪穴遺構のひとつからは太形鉈刃石斧片1点ともうひとつ土坑からは凹基式の打製石鏃1点が出土しているが、土器は細片で所属時期は判らない。

小形の竪穴住居1棟からなるきわめて小規模な遺跡である。このような竪穴住居1棟からなる遺跡の例は明石川流域の高地性集落の久留主谷遺跡（千種、安田1988）、鍋谷池遺跡（黒田1994）、大谷遺跡（斎木1996）等で知られている。

#### ⑤中垣内天神山遺跡（岸本編1998）

たつの市揖西町中垣内に所在する。揖西地域の北側の尾根斜面に位置する遺跡である。弥生時代の遺構は標高58m付近に検出された土坑やピットである。報告書では、「4-1土坑」は長さ6m、幅2m弱の段状遺構と呼ばれる遺構と同様なものと解釈され、「丘陵上に小集落が存在することは確実であろう」と報告されるが、土坑内の土器の出土状態をみれば、光明に復原される弥生土器4点が間隔をおいて検出されており、広口壺の1点には焼成後に底部穿孔を施している。この点を根拠に筆者はこの遺構は丘陵上にある周溝墓の可能性が高いと捉えている。時期は土器から中期後葉（第IV-2式）であろう。なお、包含層から平基式と凹基式の打製石鏃2点が報告されていることは気にかかるが、ここでは集落ではなく、墳墓地の遺跡と捉えておきたい。



第11図 中垣内天神山遺跡の遺構（岸本編1998から作成）

## (2) 半田・神戸地域

半田・神戸地域は揖保川右岸域にあり、揖西地域の南部に位置する。現在の行政区画では揖保郡揖保川町にある。北を養久山山塊、南を権現山山塊の間にある小平野で、これらの山塊に守られ、東側に南流する揖保川の氾濫による洪水被害を受けにくい比較的安定した農業生産を展開できる地域である。

この地域の主な弥生遺跡は片島低地遺跡と片島遺跡、山津屋遺跡と黍田・原遺跡である。

片島低地遺跡は分布調査のみの成果であるが、広い範囲に弥生土器の分布の分布がみられ、この地域の拠点的な集落と捉えていいのではないかとみている。片島遺跡は小規模な広義の高地性集落と捉えている。

山津屋遺跡と黍田・原遺跡の地理的関係とその調査成果は興味深い成果をあげている。山津屋遺跡は平地の標高12m前後の平地に立地し、弥生時代中期中葉から中期後葉（第Ⅲ式～IV-1式）の遺物と古墳時代前期の竪穴住居址や遺物が検出されており、この地域の周辺集落とみていい。

黍田・原遺跡は山津屋遺跡の西約1kmのところに位置し、通称中山と呼ばれる小山塊の標高55～36mの中腹斜面から山麓に立地する。山津屋遺跡との比高差約43～24mである。

他に養久・谷遺跡が山麓に立地しており、弥生時代前期後半～中期後半の土器を少量出土し、後期後半から終末期の土器の出土は多く、竪穴住居址や土器棺、土坑墓が検出されている。

### ①片島遺跡（山本編1995）

たつの市揖保川町片島に所在する。遺跡は標高40～60mの狭陵な丘陵の尾根上に立地し、平野部との比高差は20～40m前後である。遺跡の規模は小規模で、遺構としては竪穴住居址2棟、焼土坑3基、土坑1基、段状遺構1基が検出されたのみである。出土土器総量もきわめて少量であることからみても、臨時的な短期間経営・維持された遺跡と捉えて間違いところである。

竪穴住居址をみても、併6mを超える住居で主柱が2本柱である竪穴住居や主柱のない小形の長方形竪穴住居の簡略な構造である。また、住居中央に明確な火所をもつ施設の痕跡もないことも簡略な竪穴住居と関連することかも知れない。このことから竪穴住居と呼称しているものの日常生活をする住居ではなく、非日常的なある機能を付与された建物とみたほうがよいであろう。長方形の竪穴住居からは弥生土器のほか太形蛤刀石斧が出土している。両竪穴住居址からサヌカイトの剥片・碎片は出土していない。

焼土坑が通常の機能をもつ狼煙的施設であるという根拠は得られていないが、焼土坑の比率が高いことは指摘できる。

時期は土器量が少ないとから明確には指摘できないのであるが、中期後葉（第IV-2式）から中期末（第IV-3式）の範囲におさまるとみて間違いない。

小規模な広義の高地性集落と捉えている。

### ②黍田・原遺跡（松木、加藤他2000）

たつの市揖保川町黍田、原に所在する。遺跡は低地の山津屋遺跡の西方約1kmのところに位置する。独立丘陵状の南斜面に立地し、周囲は山塊に囲まれ、この遺跡からの眺望や視界はきわめて悪く、山津屋遺跡も見えない「隠れ里」のような集落景観である。

弥生時代の遺構は標高36～55m付近で検出されており、山津屋遺跡との比高差は約25～44m前後である。

弥生時代の遺構としては、竪穴住居址5棟、段状遺構13基、土坑墓2基、土器棺1基が検出されている。

竪穴住居の配置等の特徴をみれば、次のとおりである。第1住居が最も高い位置に築かれ、第3・2住居と比較的まとまった近い距離に築かれており、第1と第3の住居間距離は約10m、第1と第2との住居間距離は約24mである。第4住居と第5住居は低い位置に築かれており、第1住居と第4住居の距離は約50mの間隔がある。第5住居址が最も離れた位置にあり、第1住居址とは直線距離にして約90m離れた位置にある。

この住居間距離からして、この住居群の同時併存は充分可能である。弥生土器は各住居址の埋土・床面から、丘陵上の遺跡としては多く出土しており、時期差はなく、いずれも弥生時代中期末（第IV-3式）の時期である。以上のことから、この5棟の竪穴住居は同時に存在していたものとみて間違いないであろう。そうすれば、この遺跡はひとつの単位集団が中期末葉の揖保川下流域の弥生社会の動乱の時代に、この隣り的な丘陵に移動し、形成した集落と捉えられる。その出自はおそらく山津原遺跡であろう。ただし、ひとつの単位集団の移動と捉えるには若干の不安がないこともない。それは集落の全体を調査し得ているかどうかの問題であるが、ここではほぼこれぐらいの住居の規模の遺跡として捉えておきたい。

竪穴住居の平面形は丘陵斜面に築造されている関係で不整形であるが、概ね円形系統で構成されているとみてよいであろう。一般的には、隅丸方形や楕円形、隅丸長方形と呼称される平面形態のものである。規模もそれほどの開きはなく、径5~6m前後のもので構成されている。

竪穴住居の建設は、第3住居が少なくとも3回の建替えを、第4住居が4回の建替えが認められるが、第1・2・5住居は建替えの痕跡は確認されていない。

第1住居址からはサヌカイトの剥片・碎片が多数出土しており、打製石器の製作を行っているが、他の4棟の竪穴住居址からのサヌカイトの剥片・碎片の出土は報告されていない。また、第1号住居址の直上の第1段状遺構は柵列のような柱穴を伴いこの遺構からもサヌカイトの大形素材剥片を初め剥片・碎片が数多く出土しており、第1号住居付近で集中して石器製作を行った可能性が考えられる。

石器についてみれば、サヌカイトを使用した打製石器類の出土量はきわめて多く、打製石器は97点が出土しており、形態の把握できる93点の石器のうち53点が有茎式と凸基II式の戦闘用石器であり、67%という高率を占めている。

サヌカイト以外の石器は158点出土しており、そのうち「投弾子」と報告されている投弾行が40点（25%）出土しており注目される。側面に敲打による帯状の浅い溝をつくりだすもの（報告書では「鉢巻状の浅い溝のあるもの」）が18点、ないものが22点である。前者については石錐と報告されている例が多く、他に敲石・磨石（高木2000）と報告されている例もみられる。私は加藤史朗氏の武器として使用された遺物（加藤2000）であるという説に魅力を感じているが、今後の検討が必要であろう。兼田・原遺跡の投弾遺跡の重量は、50空前後、100空前後、200空前後の3グループに分れるという。他に、砥石53点（34%）、打ち欠き石錐19点（12%）、磨製石斧16点（10%）の出土も多い。磨製石磨丁は3点（2%）と少ない。總じていえば、同時期の揖保川下流域の亀田遺跡の石器組成（高木2000）と類似している傾向が窺える。寺沢氏の高地性集落の石器組成パターンでは偏在型に属する（寺沢2003）。

弥生中期末葉と捉えられる土坑墓2基と土器棺1基が検出されており、第2土坑墓からは被葬者に射込まれた可能性がある打製石器4点が出土していることは注目される。

鉄器は住居址や段状遺構から計7点出土しており、鐵劍や鐵鏟の破片ともみえるが明確でない。

兼田・原遺跡を総じてみれば、防衛的性格の強い、逃げ城的な集落と言えるであろう。

### （3）河内地域、御津地域

両地域では弥生遺跡の調査が少なく多くを語れる状況はない。

河内地域では、袋尻浅谷遺跡が発掘調査され、弥生時代の墳墓地であることが判明（松本、加藤他1978）している。遺跡は丘陵斜面に立地し、遺構が検出される標高は30m前後である。遺構としては弥生前期の土器棺1基と弥生中期末から後期前半の土坑墓15基が検出されている。この遺跡の眼下には低地の袋尻遺跡の散布地（弥生土器、土師器、須恵器）が確認（松本、加藤他1988）されている。

金剛山堂ヶ端遺跡は金剛山6号墳（前方後円墳）の南斜面の崖面に竪穴住居址の断面が2棟以上確認され

ており、時期は弥生中期末ごろ（松本、中濱他2001）といわれるがその詳細は判らない。標高は30～40m前後の丘陵斜面に立地し、眼下には低地の金剛山遺跡の散布地（弥生土器、土師器、須恵器）との比高差は24～34m前後であり、広義の高地性集落であると捉えてよいであろう。

御津地域では片鍵遺跡がその弥生土器の散布地として確認されており、調査を行えばこの地域の拠点的な集落になる可能性が高いであろう。

#### （4）勝原地域

勝原地域は揖保川水系の大津茂川下流域にあたり、揖保川下流域の中ではその東南部に位置する。

この地域は、揖保川下流域という地域システム（酒井1987）の中では母集落的な性格をもつ地域集団域と把握している。それは遺跡の内容とこの地域の地理的位置がその主な要因であると捉えているからである。

丁・柳ヶ瀬遺跡（岡崎、深井1985）は揖保川下流域の中では、いち早く水田農耕を受容した弥生集落である。遺跡は縄文時代中期後葉から形成が始まり、縄文後期・晚期へと継続する。そして、弥生時代前期前半の土器も多く出土し、前期後半、中期中葉（第II様式）と継続している。前期の遺物では、みごとな彩文土器や木製の彩文高杯、木製農具が出土している。中期中葉（第III様式）や中期後葉（第IV様式）の土器も少量であるが出土している。弥生終末期（第VI様式）の土器の出土量も多量で、特に但馬・丹後系の土器の出土量が多い。他には山陰系や讃岐系、吉備系の土器も出土している。

まだ、集落の中心部の調査が行われていないとみられるが、揖保川流域の中核的な拠点的集落と捉えてよいであろう。

丁・柳ヶ瀬遺跡の北約1kmの位置にある川島遺跡（樋本編1971）は、中期中葉（第III式）から中期後葉（第IV—1・2式）の遺構や遺物が多く検出されており、方形周溝墓と円形周溝墓の共存が早い時期に確認された遺跡として、庄内期には多くの讃岐系土器が出土していることでも著名な遺跡である。播磨の研究者のなかには、拠点的な集落とみているむきもあるが、私は丁・柳ヶ瀬遺跡から派生した周辺集落と理解している。

和久遺跡（小柴2002）は丁・柳ヶ瀬遺跡より南西約800m前後にある揖保川左岸流域の最も南位置する弥生集落である。最近調査され、弥生中期中葉（第III式）から始まり、終末期（第VI式）へと継続している遺跡である。竪穴住居は後期（第V式）から終末期を中心に100棟余り調査されており、10型中央土坑をもつ播磨型住居も10数棟が調査されている。詳細は報告書の刊行を待つかない。

勝原地域の低地の主要な遺跡は以上である。高地性集落としては、櫛特山遺跡と山田遺跡群が知られている。

#### ①櫛特山遺跡

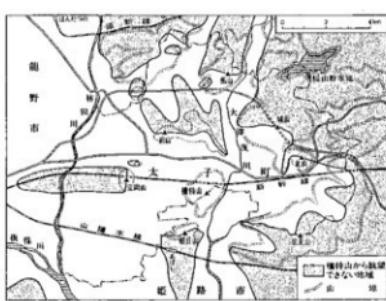
独立山塊の櫛特山頂に姫路市と揖保郡太子町の現在の行政区画の境界線が設定されている。櫛特山遺跡はその山頂付近から弥生土器や銅剣形石剣片等が出土している。遺跡の標高は165mで、平野部との比高差約155mである。典型的な狭義の高地性集落と言える立地条件を備えている。遺跡からの眺望はすぐれ、瀬戸内海を初め、揖保川下流域のほとんどを俯瞰することができる。

以前から弥生土器が散布していることは知られていたが、1969年に山陽新幹線の送電建設に伴い確認調査が実施され、山頂から少し尾根を下ったところで、中期中葉（第III式）の土器とともに竪穴住居の可能性の高い遺構（松下1971）が検出された。1977年には山頂にある巨石の南東側の山頂近くの斜面地で中期中葉（第III式）と中期後葉（第IV—1・2式）の弥生土器とともに銅剣形石剣の細片とサヌカイトの楔形石器片や削器片とみられる剥片石器（松本1981）が採集された。1999年には里山林整備事業に伴い山頂の巨石の北西側が確認調査され、中期中葉（第III式）と中期後葉（第IV—1式）の弥生土器が出上（註6）

した。以上から、遺跡は一番眺望の優れた位置である山頂部を中心に拡がっていることが明確になった。



第12図 横特山遺跡の範囲



第13図 横特山遺跡からの眺望 (松本1984に拠る)

#### ②山田遺跡（上田・中溝他1975）

揖保郡太子町山田に所在する。山田遺跡は姫路バイパスの工事中の1973年に不時発見され、1973・1974年にわたって発掘調査された遺跡である。調査地点は北山山塊の山麓に近い南東斜面の立地し、標高30~34m前後に遺構が確認されている。川島遺跡との比高差は約26mである。この遺跡は四方を山塊に囲まれ、遺跡からの視界は著しく悪く、意図的に眺望できる占地を避けた地を選択して集落を築いている様相を呈している。まさに、「隠れ里」といった立地であり、秦田・原遺跡と同様な立地条件である。

調査では、一辺3.1m前後の長方形の平床形態を探るみられる竪穴住居址1棟、土坑等の遺構が検出され、出土した土器から弥生中期末（第IV—3式）の単純な時期の様相を示している。石器では秦田・原遺跡と同じ形態の打ち欠き石錐1点と有茎式とみられるサヌカイトの打製石器1点が報告されているのみである。

重要なことは、調査後に対面に位置する丘陵斜面が宅地造成工事によって遺跡が破壊され、古墳の残骸や弥生時代の堅穴住居址が削られた断面が露出したことである。当時の諸般の事情から発掘調査は実施出来なかつたが、上田哲也氏や中溝康則氏等の努力により、竪穴住居址の位置が確認され、報告されていることである。それが第14図であり、標高約30~70m付近に竪穴住居址14基が報告されていることである。今となっては詳細な当否は明確にできないのはやむを得ないのであるが、複数の単位集団が形成した集落であることは間違いないであろう。

この不幸な遺跡の評価は、松本正信氏と上田氏では異なっている。松本氏は対面にある昔から遺物の出土している山田地区にある小丸山遺跡、雁谷遺跡、中山遺跡と調査された山田遺跡を総称して山田遺跡群



第14図 山田遺跡の竪穴住居の分布 (上田・中溝他1995に拠る)

と呼称され、川島遺跡から谷水田を求めて派生した分村と解釈（松本1990）される。上田氏は、「弥生中期後半の一時期に限られた」集落であり、「畑作や陸稲栽培のため」この立地を選択した山住み集落ではなく、「山田遺跡をとりまく政治的、軍事的原因」を第一の考えたいと、そして、檀特山遺跡を「峰台的、見張台的性格をもち」、山田遺跡は「緊迫した政治情勢のなか」、平野部を離れて「防御的意味から移住」した集落（上田1975）と捉えている。

私も後者の上田氏の意見に近く、第IV—3期の弥生中期末葉に揖保川下流域の各小地域集団の拠点的な集落を廃絶させ、移住を余儀されるようなきわめて厳しい緊迫した政治的社会が到来してきたことを意味しており、このことは弥生前期末以來順調に発展した地域の安定した伝統的な弥生社会の基盤を揺るがすような事件に遭遇した結果起きた現象と理解している。この遺跡の出自は地理的環境から勝原地域の丁・柳ヶ瀬遺跡や川島遺跡の集団であろうと捉えていることは松本氏と同じである。

山田遺跡群はそのような意味では、広義の高地性集落の範囲の遺跡であり、その中でも防衛的な逃げ城的な集落であると捉えている。

なお、山田遺跡群の小丸山遺跡からは変容した分銅形土製品（今里1959）としてはその終末のものが出土していることは注目してよい。

#### (5) 斑鳩地域

この地域は揖保川の支流の林田川の下流の左岸域にあたり、東は檀特山までの範囲と捉えている。

斑鳩地域の拠点的な集落は、低地にある鶴遺跡と斑鳩寺遺跡であり、後者は現斑鳩寺境内の遺跡として付けた名称であり、その位置からも両者は一體の遺跡であり、弥生時代の遺跡としては鶴遺跡を用いたい。鶴遺跡は部分的な事前調査が各所で行われているが、綿また報告書がなく、太子町史（松本、中溝他1990）などからその状況をみると、集落は弥生前期後半に遺跡の形成が開始され、中期前葉（第II式）、中期中葉（第III式）、中期後葉（第IV—1式）までは確実にその存在は確認されるが、第IV—2式の存在は不明確な部分があるが、この期までの存続は充分予想されるところである。弥生後期後半から終末期の土器は他地域の土器を含め多く出土している。土器以外の出土としては分銅形土製品の出土が注目される。

この地域では、弥生前期後半の土器を出土している遺跡として、福地相坂遺跡（松本、中溝他1990）と常全遺跡（磯崎編1971）がある。福地相坂遺跡は中期中葉（第III式）まで継続している。常全遺跡は間断期をおき中期後葉の土器が少量出土し、後期後半から終末期の土器も出土している。

立岡遺跡（橋本編1971）は鶴遺跡と至近距離にあり、立岡山の東山麓の沖積地に立地している。遺構としては、弥生中期末葉（第IV—3式）の竪穴住居址1棟と後期後半の竪穴住居址1棟と溝状造構等が検出されている。中期末葉の竪穴住居は六角型住居を採用しており、10土坑の両端に小穴をもつタイプである。この住居も溝状土坑が南に位置しており、この住居型の原則を守っている。立岡遺跡の竪穴住居址が、認識はしていないかったが、六角型住居の最初の調査例である。後期後半の竪穴住居はベット状遺構をもつ住居型であり、袋状鉄斧1点、鐵鎌か鉄鎌の茎・柄の部分とみられる破片2点出土していることは注目される。

この地域では、丘陵性集落も高地性集落も確認されていない。

#### (6) 佐用岡地域

この地域の拠点的な集落は平方遺跡（松本、中溝他1990）と捉えており、標高16m前後の低地に立地している。遺跡は縄文時代中期から形成が始まり後期・晩期と継続している。弥生時代は前期後半から始まり、中期後葉まで継続し、中期末から後期前半の間断期において、後期後半から終末期、古墳時代前期まで続いているようである。かなり広範囲に調査が実施され、膨大な量の遺物が出土しているが、報告書が未刊でその詳細な検討は今後に待つかない。太子町史によれば弥生前期後半の土坑やベット状遺構をも

つ堅穴住居址などが検出されていることが報告されている。

枝重・助久遺跡（松本、中溝他1990）は半方遺跡より南西約700mのところにある遺跡であり、弥生中期前葉（第Ⅱ式）から遺跡の形成が始まっており、弥生中期末の堅穴住居址もみられるようである。後期の土坑やベット状遺構をもつ長方形の堅穴住居址などが検出されている。

この地域も丘陵性集落や高地性集落の存在は知られていないが、亀田遺跡が弥生中期末葉の集落として注目されるので別項を設けてみておきたい。

#### ①亀田遺跡（深江編2000、高木編2000）

遺跡は掛布郡太子町亀田に所在する。大津茂川中流域左岸の標高13~18m前後の扇状地に立地している山際の遺跡である。弥生中期中葉（第Ⅲ式）の土器が僅かに出土しており、土坑1基が検出され足跡をのこしているが、本格的に集落を形成するのは中期末葉（第IV-3式）からである。

亀田遺跡からは、弥生時代中期末葉から古墳時代後期にいたる堅穴住居址を統計65棟検出されている。そのうち、時期の判明できるものは、弥生中期末葉が最も多く33棟を数える。ほかに、弥生後期後半のものが2棟、古墳前期のものが3棟、古墳後期のものが15棟である。

弥生中期末葉の堅穴住居の状況を述べれば以下のとおりである。

10型中央土坑をもつ六角型住居が18棟（高木2000）も確認されている。六角型住居でも中央土坑の両端に小穴をもつAタイプともたないBタイプがみられるが、後者が圧倒的に多い。

建替えの状況をみれば、I 地点のSH07が最も多く4回の建替えを行っており、初建時を入れれば5回の変遷がたどれることになる。この堅穴住居は六角型住居ではない。2回の建替えが確認できるものはI 地点のSH17とII 地点のSH14の2棟であり、前者は六角型住居である。1回の建替えを行っているものは8棟ほど確認でき、そのうちの5棟が六角型住居である。建替えがないものは18棟あり、そのうち六角型住居は8棟である。建替えで平面形を変えているのは、I 地点のSH22、SH23で長方形から隅丸方形に替えており、両者とも10型中央土坑をもつ六角型住居である。建替えのことをみてきたのは、この集落の経営期間の問題と同時に併存住居数の参考のためである。

住居間距離から同時併存のことをみれば、II 地点の2ヶ所ほどが近接しており、同時併存が困難かもしれないが、それ以外は同時併存が充分可能な距離を保っている。このように捉えれば、調査範囲の中だけでも、同時併存は30棟前後が存在したことになる。ひとつの単位集団を5棟前後として単純に割れば、6前後の単位集団となる。実際は未調査もあり、この6以上の単位集団から構成されていた大規模な集落であるということが判る。

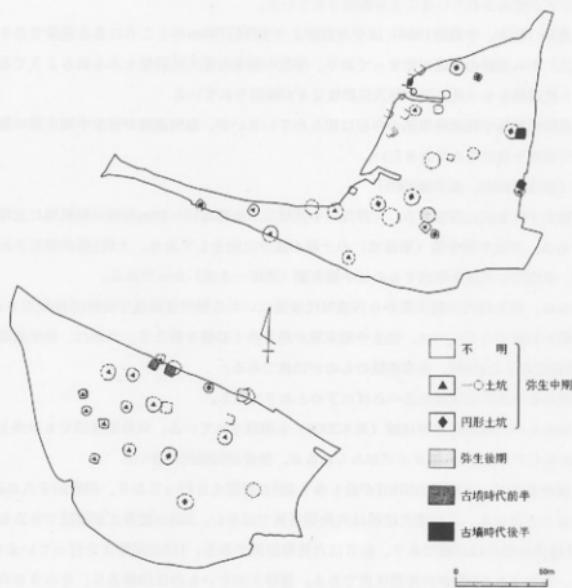
建替えなしと1回の建替えを合わせると26棟であり、圧倒的に多いことになる。そうすると、この集落はそれほど長期間維持した集落ではなく、比較的短期間に経営、維持された集落と捉えていいであろう。I 地点のSH07のような建替えの多い堅穴住居はなんらかの特殊な事情によるのであろう。出土土器も弥生中期の堅穴住居址から出土する土器は第IV-3式がほとんどであり、土器からも短期間の集落とみると矛盾しない。

焼失住居とみられるものが4棟ほどみられるが、建替えの堅穴住居との関連は指摘できない。

堅穴住居址からサヌカイトの剥片・碎片の出土が報告されているものは、I 地点のSH07、SH20、SH09の3棟のみである。そのうち六角型住居はSH201の棟のみである。

I 地点のSH05から板状鉄斧の出土は注目され、この住居は六角型住居である。

堅穴住居の平面形態は、円形と隅丸方形、長方形がみられる。



機能	器種	点数	組成率	機能	器種	点数	組成率
符號具 ・ 武器	石鎚	235	28.2%	調理具 ・ 加工具	石皿	9	1.1%
	磨製石鏃	2	0.2%		耐石	38	4.6%
	打製石劍	13	1.6%		すり石	19	2.3%
工具	石錐	17	2.0%		凹み石	4	0.5%
	削器	103	12.4%		台石	5	0.6%
	楔形石器	189 (665)	22.7%		(砥石)	33	
	加工痕ある剣片	97	11.6%	祭祀具	磨製石剣	3	0.4%
	使用痕ある剣片	61	7.3%	石錐	2		
	磨製石斧	31	3.7%	石屑	分割原石	3	
農具	磨製石籠丁	4	0.5%		剣片	多量	
漁労具	石錐	4	0.5%				

第15図 龜田遺跡の竪穴住居の配置と石器の組織（高木2000に拠る）

弥生中期末の龜田遺跡の石器については高木芳史氏がよく綴めている。氏の分析（高木2000）によつてみていくば、石鎚は235点出土しており、そのうち分類基準の対象とした石鎚は97点であり、有茎式が57点で60%の比率を占めている。石鎚の石材は金山産が全体の95.8%を占め、二上山産の石材は10点あり、有茎式の肉厚の石鎚は二上山産で、製品として持ち込まれたと解釈している。武器としては磨製石鏃2点が西播磨地域で出土していることは注目できる。武器形祭器と把握するのがいいであろう銅剣形石劍の2点の出土と関係するであろう。打製石劍は13点出土している。武器の比率は3割強である。サヌカイトを利用した打製石器のほとんどは金山産であり、削器や楔形石器が多く出土したことなどが指摘されてい

る。分割原石と分類している金山産の大形素材片の出土も注目される。また、磨製石臼が4点と少なく、三田盆地の同時期の高地性集落である奈カリ寺遺跡や有鼻遺跡と同じ様相が窺われる。高木氏は蔽石と分類しているが、鉢巻状の投擲石が6点ほど出土している。

石器の産地についても論じており、産地分類Aは遺跡の周辺から確保するものとし、産地分類Bは遺跡の近隣、半径5kmほどの範囲で採集可能な石材、産地分類Cは遠隔地の石材であると分ける。そして、産地分類Aは台石、蔽石、磨石、石錐の礫石器に、産地分類Bは磨製石斧の類、砾石の一部に、産地分類Cは打製石器類、柱状片刃石斧、磨製石臼に使用されるという。柱状片刃石斧、磨製石臼の数量は少ないが結晶片岩が多く、阿波からの搬入を、多量のサヌカイトのほとんどは讃岐からの搬入である。

他に特徴的な遺物として、分銅形土製品の4点の出土は注目される。銅剣形石剣の出土とともに西の精神文化と東の精神文化の流入がこの遺跡でせめぎあっている様相がみられる。

#### (7) 菅田地域

菅田地域は揖保川の氾濫によって大きな影響を受けた地域であり、「龍野市史」第1巻の揖保川の氾濫の復原図がそのことをよく示している。このことと関連するかもしれないが、この地域の拠点的集落の遺跡の存在を指摘することはできない。

門前遺跡（上田編1971）からは弥生前期後半の土坑1基と少量の土器が検出されているのみで、遺跡の規模とその後の展開は不明である。その後、この遺跡の流路から後期後半（第V式後半）から終末期（第VI式）多量に出土している。

福田片岡遺跡（岡崎編1991）からは弥生中期の土器が比較的まとまって出土しており、堅穴住居址2棟、土坑などが検出されている。堅穴住居の1棟は中央に10型土坑をもつ六角型住居で溝状土坑が南に位置するという原則を守っている。遺構からの出土土器は、中期後葉（第IV—2式）が主体を占め、中期末（第IV—3式）に下がる資料も含まれている可能性がある。包含層出土土器の中に中期中葉（第III式）の土器が僅かに認められ、弥生時代の集落はこの時期から形成されるのであろう。その後、後期後半から終末期の土器群からこの時期の土器も比較的まとめて出土している。揖保川流域のこの時期の土器の組成としては、珍しく他地域の土器の搬入がほとんどない土器構成であることは興味深い現象である。

福田天神遺跡（中谷編1982）からも弥生中期後葉の土器が僅かに出土している。

この地域で興味ある遺跡は広い範囲で遺物が採集される内山遺跡である。山際の低地に弥生中期後半の土器が採集されており、山麓には中期末葉の土器が3基確認されている。発掘調査はまだ行われていないが、各種の石斧が10点以上採集されており、そのうち扁平な始刃石斧4点、柱状片刃石斧1点が報告されており、採集品でのこれだけの石斧の出土は注目される。龜田遺跡と類似する大規模な集落になる可能性が高いであろう。

この地域の丘陵性遺跡や高地性集落としては、中臣遺跡と片山東山遺跡が知られている。

①中臣遺跡（松本1984）

遺跡はたつの市揖保町中臣に所在する。1966年に市営住宅の建設時に壊された遺跡で、中臣山の山麓に近い南斜面から中期後葉（第IV—1式）の土器が多く採集されている位置を地図で確認するとおそらく標高は20m前後であろう。平野部との比高差は僅かであろう。

②片山東山遺跡（松本1984）

遺跡はたつの市龍野町片山に所在する。標高227.9mの片山東山山塊の最高所に立地し、平野部との比高差は198mある。眺望にはすぐれ、揖保川下流域の多くの平野部から瀬戸内海はいうに及ばず、櫛ヶ島遺跡や家島群島の男鹿島にある大山神社遺跡の狭義の高地性集落を眺望できる位置にある。この地にテレ

ビ反射板やアンテナ類の工事中に弥生土器が出土しているが、土器の所在が判らず時期を論じることはできない。投弾石1点のみが確認されており、秦田・原遺跡で多くの出土をみた、側面に「鉢巻きは状の浅い溝状」をもつタイプのものである。比高差から狭義の高地性集落と把握していいであろう。

## 5. まとめにかえて

① 竹原中山遺跡の調査を通して、径10km強の範囲に展開する揖保川下流域の弥生時代中期を中心とする遺跡の動向を検討してきた。このような狭い範囲に地域集団を8ヶ所設定するのは分け過ぎるのではという危惧を抱かない訳ではないが、山塊や丘陵等によって区切られる地形的なまとまりや遺跡の消長のあり方から試案を提示してきた。

各地域における発掘調査の多寡や進展に差があり、かなり大胆な推定を含めた地域集団の設定であることを断っておかなければならない。地域集団にも自ら差があり、鷹原地域の集団が揖保川下流域の中核的な有力な集団と捉えていることは前述しているとおりである。この考え方には揖保川下流域の終末期の墳丘墓や前期前半の前方後円（方）墳のあり方も参考にしている。

② 高地性集落の消長を拠点的な集落の盛衰との関係でみれば、弥生時代中期末葉（第IV-3式）に大きな画期があることがあるとみてまず間違いない。このことは揖保川下流域の遺跡の実態を検討してきた项でも再三述べているところである。

揖保川下流域の高地性集落をこの視点でみれば、各地域の拠点的な集落が維持、経営、発展している段階での高地性集落は、榎特山遺跡、長尾タイ山遺跡がまず挙げられる。

榎特山遺跡は平野部との比高差が155mもあり、典型的な狭義の高地性集落と捉えられ、威信材の性格をもつ銅剣形石劍が出土していることからみて、拠点的な集落の有機的な連携のもと拠点的集落が經營実権をもっていたといえるであろう。

長尾タイ山遺跡での山頂にある地点は、周囲の平野部との比高差が約52mあり、寺沢氏の比高差40mの視点を採用すれば、氏のいう高地性集落第I類型Bタイプの高地性集落である。堅穴住居1棟のみであり、出土土器も僅かできわめて短期間の遺跡であることからも広義の高地性集落と捉えてよいであろう。

片山東山遺跡の時期は特定できないが、平野部の比高差からみれば、典型的な狭義の高地性集落である。播磨地域の狭義の高地性集落と捉えられて夢前川流域の鈴四東山遺跡（標高約103m、比高差約83m）や市川下流域の甲山遺跡（標高101m、比高差約96m）から採集されている弥生土器（今里1969、松木、加藤他1995）は第IV-2式であり、拠点的な集落が維持・経営されていた段階の高地性集落である。このような傾向からみれば、片山東山遺跡も拠点的集落が維持されていた段階の高地性集落である可能性が高いといえる。

これら播磨地域の狭義の高地性集落の集落規模は、現状では言及できる状況にはない。堅穴住居の形態についても多くを語れる状況ではない。

家島群島の男鹿島にある大山神社遺跡（標高約220m）は広範囲に発掘調査（鎌木、小林1992）された典型的な狭義の高地性集落である。堅穴住居址13棟、掘立柱建物8棟、土坑多数等が検出されている。堅穴住居や掘立柱建物は標高208~218.5m前後の位置に築かれている。堅穴住居址は切合い関係や建替えがあり、それと住居間距離を参考にすれば、同時併存の堅穴住居は8棟と捉えられる。報告書が未刊行で土器による時期の検討が残されているので、8棟という数は最大ということになる。掘立柱建物は1×3間が3棟、1×2間が2棟、1×1間と1×4間が1棟、1×3間以上が1棟（注7）である。

1959年の大山神社遺跡の確認調査時（武藤、石野1962）の弥生土器の量は少ないので時期を特定するに

は若干不安を覚えるが、中期末葉（第Ⅲ式）から中期末葉（第Ⅳ—3式）までのものが認められる。そして、この土器群は播磨地域の土器様相というよりも攝津的色合いの濃い様相を示している。このことは、銅鐸鋳型片を出土した姫路市の船場川流域にある今宿丁田遺跡や名古山遺跡の弥生土器の特徴と同じ様相（山本1989）を呈しており、両遺跡を含む僅2kmほどの範囲にある姫路平野が中期後葉（第Ⅳ式）には周囲の播磨地域とは異なった攝津地域と同じ特徴を有する弥生土器を使用した集団があり、銅鐸の生産を行っていた捉えができる。大山神社遺跡はこの姫路平野の集団との関係が強いといえるのであろう。

これらの播磨地域の狭義の高地性集落の眺望関係を整理された松木正信氏は、争乱状態に対処するための情報伝達としてのネットワークが存在したと捉える。そして、このネットワークのキーステーションが大山神社遺跡であり、この道路からの西の眺望が家島や西島に遮られているに対し、東の眺望は明石海峡までなんの傷害もないことを理由に、このネットワークを支えた集団は「近畿の政治勢力との緊張関係に備えた」（松木1996）とその政治的意義を説く。

これら狭義の高地性集落の固有な特性が通信機能にあると把握するのは、松木氏と同意見であるが、拠点的な集落が機能していた段階でのこれら狭義の高地性集落の一義的な目的は広域な交易を行っていた弥生社会の流通システムの監視的機能や閑所的な機能にあるのではと考えている。姫路平野の前述した状況が、この地域に緊張をもたらすことは充分に考えられるが、それは二次的に付随したものであろうと捉えている。

③ 拠点的な集落が維持されている段階での丘陵性遺跡、守沢氏がいう高地性集落の第Ⅱ類型の遺跡では、龍子向イ山遺跡や長尾タイ山遺跡の丘陵先端の地点があげられる。養久山・前地遺跡の山麓部にある地点もこの類型の範疇に入る遺跡であろう。これらの遺跡は、順調に発展してきた各地域集団が拠点的な集落からの分歧してきた山住む的な集落の可能性が高い遺跡といえるかも知れない。

④ 播保川下流域の各地域の平野部の拠点的集落が中期後葉（第Ⅳ—2式）にほぼ一齊に廃絶していることは前述してきたとおりである。それは拠点的集落のみではなく、拠点的集落から派生した周辺集落にも及んでいる。例えば、勝原地域の川鳥遺跡、掛河西地域の尾崎遺跡などである。それまで、地域の弥生社会を主導してきた社会的、政治的権威が大きく揺らいでいる状況が読み取れる。そして、それは伝統的な地域の弥生社会を解体させ、集落の移動を余儀なくされると現象として現われる。

播保川下流域では拠点的集落廃絶後に出現する弥生中期末葉（第Ⅳ—3式）の集落立地が、各地域で大きく異なっていることが興味ある主題である。大きく捉えれば、比較的眺望の良好な高地の丘陵尾根上に立地する遺跡、隠れ里のような低丘陵に立地する遺跡、また山際の低地や山麓に立地する遺跡という三形態が認められる。

東播磨地域の明石川流域にも同じように、弥生中期後葉に拠点集落が廃絶し、集落の移動を余儀なくされるが、そのほぼすべてが比較的眺望の良好な高地に移動（山本2000）しており、播保川下流域とはその集落立地の様相が大きく異なり、寺沢氏の第1次高地性集落の第Ⅰ類型Bタイプの高地性集落がほとんどである。ただ、明石川流域の丘陵は100m前後の標高であり、平野部との比高差は50~70m前後におさまる地形的条件（丸山1992）であることは考慮されなければならない。明石川流域では、比高差100mを超えるような狭義の高地性集落は地理的環境から存在し得ないということである。

播保川下流域の各地域の弥生中期末葉の集落立地を再述すれば次のとおりである。

丘陵尾根上に立地する遺跡は、今回報告する掛河西地域の竹原中山遺跡、養久山・前地遺跡（尾根上地点）、養久・乙城山遺跡である。中期末葉と時期を設定できないところがあるが、半田・神部地域では片島遺跡、河内地域では金剛山堂ヶ端遺跡がその候補としてあげられるかもしれない。この中では、竹原中山遺跡が

眺望関係もすぐれた最も高い位置に立地している。

隠れ里のような低丘陵に立地する遺跡は、勝原地域の山田遺跡群、揖西地域の長尾谷遺跡（片本編1999）があげられる。亀田遺跡は低地にあるこの時期な代表的な大規模な遺跡である。長尾谷遺跡は山麓にある遺跡である。斑鳩地域の立岡遺跡は1棟の堅穴住居しか確認されていないが、山際の低地にある遺跡と捉えられる可能性の高い遺跡である。

堅穴住居の数を基にこれらの遺跡の集落規模をみれば、亀田遺跡が中期末葉の堅穴住居址33棟を検出されており、同時併存数を検討した結果でも、30棟前後で構成されている集落で、きわめて大規模な集落と捉えられる。山田遺跡群は不幸な遺跡で、発掘調査された堅穴住居址は1棟のみであるが、遺跡破壊中の断面観察の堅穴住居址をあわせると15棟の堅穴住居が確認されており、それ以上の数になることは充分予想され、この遺跡もきわめて大規模な集落の範疇になる可能性が高い遺跡といえる。この両遺跡が大津茂川流域に位置していることが問題である。

問題の所在は、揖保川下流域の中核的な拠点的集落である丁・柳ヶ瀬遺跡がどちらに移動したかということである。地理的な位置からみれば、山田遺跡に移動したとみることが妥当であるが、亀田遺跡である可能性も考慮にいれなければならないのではと考えられる。それは、堅穴住居の数が多くわめて大規模ということはもちろんあるが、銅剣形石剣2点、分銅形土製品10点という他地域の特徴をもつ遺物等が多いということに基因している。亀田遺跡の報告書では佐用岡遺跡の拠点的集落である平方遺跡からの移動と捉えている。山田遺跡の内容がいまひとつ不明であることがこの問題を捉え難くしている。そして、もうひとつは和久遺跡の存在である。丁・柳ヶ瀬遺跡が和久遺跡に移動したと捉えれば、亀田遺跡は平方遺跡から移動した集団と把握しても問題は少ない。和久遺跡の報告書の刊行を待ってからの検討課題としておいてもよいであろう。

次に、堅穴住居の数が多いのは竹原中山遺跡であり、同時併存数の堅穴住居数を8棟と捉えている。この規模は大山神社遺跡と後述する寄井遺跡（上田、是川他1994）とは、堅穴住居の密集度の違いは歎然としてあるが、ほぼ同規模の集落であるとみていいであろう。そして、竹原中山遺跡はサヌカイトの大形素材剥片が出土しており、地域の拠点的集落が移動した集落規模と捉えても問題がないと考えている。その意味では、大規模な高地性集落と把握でき、揖西地域の清水・佐江遺跡の二つの単位集団が移動した遺跡であるとかんがえても間違がたくない。

森田・原遺跡と養久・前地遺跡の尾根上地点は4～5棟の堅穴住居から構成されており、一単位集団から構成されている集落と捉えてもよいであろう。養久・前地遺跡尾根上地点は尾根上の西斜面が保存され、調査が及んでいないので規模が大きくなる可能性はあるが、

山麓部にある集落が同時に併存の堅穴住居が3棟程度であることを考えれば、この規模の集落とみても大きな齟齬を起こさないであろう。これら中規模の集落は、周辺集落から、中期末葉の大動乱の時代に移動した集落と捉えいいであろう。3棟で構成される堅穴住居をもつ長尾谷遺跡もこの中規模な集落とみてもよいのである。

養久・乙城山遺跡のように1棟の堅穴住居で構成される小規模な集落（集落という表現をしない方がいいかもしれないが）の固有な特性は、地域の監視を主目的とする集落の可能性がきわめて高い遺跡とみることに妥当性があるかもしれない。事実、養久・乙城山遺跡からは揖西地域はほぼその全貌を眺望できる。

片島遺跡は大小の二つの堅穴住居からなる遺跡であるが、乙城山遺跡と同じ機能の遺跡であろう。半田・神部地域の低地の拠点的集落である片島低地遺跡が經營した集落である。

⑤ 捅保川下流域の弥生時代の中期末葉の弥生社会に起こった大変動は、集落立地の移動という現象だ

けにはとどまらず、土器の地域様式にも大きな変化が認められ、また、堅穴住居型の変化をも伴っている。

⑥ 弥生土器の地域様式的な変化を簡略に述べれば以下のとおりである。

播磨型広口壺にみられた口縁部内面の凸帯文をもつ壺がほとんど消え、広口壺には口縁端面に櫛描波状文や櫛描点文をもつ摂津系広口壺が多く認められることがある。広口壺の胴部文様をみれば、播磨型の壺では胴部中央に櫛描列文を施すぐらいに無紋化の傾向が進んでいた前段階に較べ、櫛描波状や直線文の単帶構成を探る文様がそれなりに認められることである。これは退化現象である。

また、脚部に鋸齒文を施すという定型化していた播磨型台付鉢のほとんど無くなり、高环の脚部の鋸齒文が消え、秩父地域に盛行した円形の透孔の盛行である。

そして、段状口縁をもつ無頬壺や体部がするどく張り体部が玉葱形を呈する台付無頬鉢等の出現である。また、把手付く短頬壺や壺に把手をもつものが多く認められることである。

広域的に分布する水平口縁をもつ高环や凹線文をもつ直LJの鉢・台付鉢、口縁部が屈曲して立ち上がる複合口縁的な形態を示す大形壺は継続しており、これがこの様式を中期の範疇の時期におさえる指標である。

これらの弥生土器の特徴を揖保川下流域の摂津文化といい、後期にこの地域がタタキ技法を駆使した土器を多用した現象と関連させ、揖保川下流域の畿内化の前現象と説くのは、岸本道昭氏（岸本1995）である。

ことはそう単純ではなく、弥生中期末葉のこの地域の弥生土器は、壺にも甕にも内面ヘラ削りが顕著にみとめられ、揖保川下流域の前段階の土器の特徴も多く認められる。これは摂津地域や畿内地域と大きく異なる現象である。

摂津地域の尼崎市田能遺跡の弥生土器を分析すれば、第IV-1式～第IV-2式に播磨地域の土器の様式的特徴を採用した多くの広口壺の出現が認められ、両者はもともと親縁な土器製作技術の交流を有していると捉えられる。しかしながら、田能遺跡には壺でも甕でも、内面をヘラ削りする技法はほとんど認められない。

そして、船場川流域の姫路平野では、銅鐸鍔型が出土する今宿丁田遺跡や名古山遺跡の第IV-2式段階前後には、この地域に摂津地域の特徴をもつ集団の居住が認められると捉えていいほど周囲の弥生土器と異なる土器が分布（山本1989）している。しかし、その弥生土器の中に一定量の内面ヘラ削りする土器が認められる。銅鐸製作という摂津地域の精神文化を代表する集団が播磨地域の姫路平野に移住して間のない時期に、すでに内面ヘラ削り技法という吉備地域や播磨地域の技法を取り入れているのである。

明石川流域や加古川流域には、摂津地域の弥生土器と様相を同じくする土器が第IV式段階の段階ではすでに認められ、内面ヘラ削り技法もある程度普及している。

これらの現象は弥生土器からみた西方からの影響である。しかし、揖保川下流域のこの中期末葉の変化は漸次的であり、弥生土器からみた緩やかな摂津文化の歩みであるが、実は播磨地域の中での姫路平野や加古川流域や明石川流域という地域と関係の中にあるといえるのであろう。

⑦ 翻って、六角型住居という堅穴住居型や分銅形土製品の分布の状況をみれば、隋分と違った状況が窺いしれるのである。

播磨地域の分銅形土製品の出土状況をみれば、播磨地域全域で22遺跡74点（甲斐2002）が知られている。そのうち、11遺跡52点が揖保川流域の出土である。実に70%の比率を占めている。中期末葉の亀出遺跡でも10点の分銅形土製品が出土している。これなどはあきらかに西方の吉備地域（美作地域をも含む）の精神文化の顕著な影響である。

西方からの文化の影響で成立している六角型住居の分布みれば、中期末葉前後の時期は、揖保川下流域には普遍的にみられる状況であり、夢前川流域の六角遺跡や市川流域の高地性集落である黒岩山遺跡（吉

識1980)、加古川流域の美乃利遺跡、三田盆地の奈カリ与遺跡・有鼻遺跡(長濱編1999)等でも多くの竪穴住居がこの形態を採用している。しかし、揖津地域の六甲山山麓や淀川流域の揖津地域、畿内地域の河内・和泉・大和地域にはほとんどその存在が認められていない。

揖保川下流域の中期末葉の六角型住居の採用は、龜田遺跡の33棟のうちの18棟、実に55%の比率である。他に竹原中山遺跡、養久・前地遺跡尾根上地点、養久・乙城山遺跡の広義の高地性集落にみられ、同時期前後の山際や山麓の遺跡である立岡遺跡や長尾谷遺跡にも存在している。長尾谷遺跡では室戸型住居の存在も検出されている。西方からの住居型の影響が随分看取されるのである。

銅剣形石劍は揖保川下流域では3点の出土をみている。櫛特山遺跡1点、龜田遺跡2点である。これなどは東方文化の遺物であり、揖保川下流域がその東限である。

中期末葉の揖保川下流域に搬入されるサヌカイトの素材のほとんどは讃岐産のものであり、前段階からの交易関係が継続している。

赤色顔料の製作に関連する遺物としては、養久・前地遺跡の山麓地点の竪穴住居から水銀朱が付着した石臼が、龍子向イ山遺跡からは把手付広口鉢が出土している。揖保川流域ではないが、狭義の高地性集落である大山神社遺跡からも把手付広口鉢の存在が知られている。

⑧ この揖保川下流域の混乱した弥生社会の時代は、石器から鉄器への転換の時代であり、揖保川下流域の中期末葉の遺跡からも一定量の鉄器の普及が認められる。龜田遺跡や秦田・原遺跡等の鉄器の出土がそのことを物語っている。そして、後期になると石器が激減しているのも事実である。特に、サヌカイトを利用した打製石器の製作は、この時期が最後の様態を示している。竹原中山遺跡等でもみられるように、この時期の遺跡の多くの竪穴住居で打製石器の製作を盛んに行っているのは、その最後の姿の徒花のようにみえるのである。事実、サヌカイトを利用した打製石器の製作は、後期に入るとその痕跡を遺跡からはほとんど窺い知ることは出来ないのである。

⑨ 揖保川下流域の中期末葉の混乱は、地域の集団の再編成、あるいは、地域の統合する過程での争乱とみられ、それは、鉄の確保をめぐる政治的緊張が釀し出したことが根本的な要因と捉えられる。曆年代でみれば、紀元前1世紀後半を前後する時代である。「魏志倭人伝」が記す紀元2世紀後半の倭國乱とは、約200年前後の開きがある。

⑩ 揖保川下流域に起きた弥生中期末葉の混乱は、この地域のみにみられる現象ではなく、揖保川中流域や夢前川流域、加古川流域、前述した明石川流域にも指摘できる現象であり、もうひとつ明確に指摘できないが市川流域にも及んでいるとみて間違ないと捉えている。すなわち、中期末葉(第III式)に最も弥生土器様式が共通性をもっていた、播磨地域全般を巻込んだ動乱といえるのである。

揖保川中流域でいえば、神岡地域では弥生前期から始まる拠点的集落である横内遺跡が、中期末葉の時期に寄井遺跡に移動しているという状況がみられる。寄井遺跡は秦田・原遺跡等と同じように、低丘陵に立地する「隠れ里」の状況を呈する遺跡(上田、是川、中溝他1994)であり、同時併存を住居間距離でみれば、10棟の竪穴住居で構成されているとみられ、同時期の掘立柱建物も9棟前後確認されている。出土する弥生土器は中期末葉(第IV-3式)の単純な遺跡である。同じ揖保川中流域の新宮地域でも、拠点的集落である新宮宮内遺跡(松本、加藤他2001)が中期末葉には、その西側に位置する低丘陵の新宮天神山遺跡に移動しているという状況が看取される。

夢前川流域の鈴鹿地域では、発掘調査はほとんど実施されていないが分布調査の成果や地形的特徴からこの地域の拠点的集落とみられる実法寺遺跡から約1km離れた山際の低地の集落である六角遺跡に移動している。再三述べてきた六角型住居が多く検出されており、また、室戸型住居も認められ住居型で構成さ

れる集落である。

加古川下流域でも、拠点的集落である低地の渭之口遺跡（石野・松下他1968・1969、岡本1992）から、中期末葉の時期にその北側500mの地点の低地の美乃利遺跡に移動している。これは夢前川の飾西地域と同じような移動である。この美乃利遺跡の竪穴住居型は大変興味深く、その多くが六角型住居であり、六角型住居でもそのAタイプに属する竪穴住居が多い。そして、この遺跡では2棟の大形竪穴住居のうちひとつが竪洞型住居であり、あとのひとつが六角型住居のAタイプの住居型であるという事実である。

市川流域では、標高約102mの丘陵尾根上に立地する黒岩山遺跡があり、1棟の竪穴住居で構成される小規模な高地性集落である。平野部との比高差約82mである。この遺跡の竪穴住居型が、六角型住居Aタイプであることが注目される。

① この大きな動乱は、播磨地域には弥生中期末葉に起こっているが、六甲山南麓や淀川流域の摂津地域、和泉地域には一段階遅れて、後期前半に出現しているという現象が指摘できる。

② この揖保川下流域に起こった中期末葉の大動乱が、後期前半まで継続したのかどうかの検討は、今後の集落の発掘調査の動向をみなければならないが、後期前半に揖保川下流域の摂西地域から出土した九州系小形彷製鏡2面が出土していることは注目されてよい。

ひとつは半田山1号墓（渡辺、岡田他1989）からの面径5.2cmの重圓文日光鏡I型b類の完鏡が墳丘墓の第1主体（木棺直葬）の副葬品として鉄劍、銅鏡と共に出土していることである。もうひとつは白鷺山2号石棺墓（松本1984）の内行花文日光鏡II型a類の完鏡（面径7.8cm）が副葬品として出土していることである。九州系の信威材としての文物が、同じ習俗で扱われていることである。明石川流域にも後期前半に九州系小形彷製鏡が3面出土しているが、いずれも低地の集落や高地性集落の住居や環濠等に廃棄された状態の出土であり、九州の習俗を採用していない地域である。弥生時代の後期前半から後半までに鏡を副葬するという習俗を受け入れているのは、揖保川流域と西条52墓がある加古川流域までである。古墳出現前になってこの習俗を受け入れた地域は畿内地域のも及んでいる。

この対比は興味深い現象である。揖保川流域が西方からの弥生時代の前線基地的として位置付けされている状況を物語っているのであろう

（注）

- (1) 深江氏は報告書の考察（深江2000）で、私が弥生中期末葉とみている土器様式を亀山2～5期の4小期に分けて理解しているが、私には亀山2～5期は今回私が設定した第IV～3式の範囲に収まると捉えている。第IV～3式は亀山遺跡第1地点のSH17、SH20、SD126、SK56、SK 58、SK401、SK402、SK415、SK419、SK453、第II地点のSH14、SH22、SH23、SH24、SH25、SK03、SK41、ST01、ST02などをもとに設定している。
- (2) 六角型住居は徳島県名東遺跡（岡山2000）、広島県千代田・京野遺跡（伊藤2004）でも検出されていることを知った。兵庫県域以外の分布の検討は今後の課題である。
- (3) 山下氏は当初「播磨型住居」あるいは「西播磨型住居」の呼称がいいのではという意見をもっていた。地域名を冠することに若干の抵抗があった筆者が、この住居型の特徴を的確に指摘した最初の報告書の六角遺跡から「六角型住居」としたい旨を述べると、特にこだわりがないという黄同を得たものもあって六角型住居と提唱することとした。
- (4) サヌカイトの肉眼的な同定、打製石器の技術的なことについては、同僚の久保弘幸氏に多くの教示を受けた。
- (5) 古墳時代後期の根拠とされたのは、床面上から須恵器片2、床面直上から十製の紡錘車3点が出土したことが記され、須恵器片で時期を決定されている。土製紡錘車と呼ばれているものは、土器片に穿孔をもつタイプのもので、これは弥生時代のものとみなしても問題はない。竪穴住居の形態も古墳時代後期と捉えることのほうが難しい。

(6) 太子町教育委員会の三村修次氏に教示を受けた。

(7) 龟田修一氏に教示を受ける。

(参考文献)

- 荒木幸治2002「『高地性集落』研究論」『古代文化』第54巻第4号
- 池田征弘編1999『清水遺跡』兵庫県文化財調査報告第183冊
- 石野博信、松下勝他1968『播磨・東溝遺跡Ⅰ』兵庫県教育委員会
- 石野博信、松下勝他1969『播磨・東溝遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会
- 石野博信1973「3世紀の高城と水城」『古代学研究』第68号
- 石野博信1985「西日本・弥生中期の二つの住居型」『論集日本原史』
- 磯崎正彦編1971『山陽新幹線建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』兵庫県文化財調査報告第4冊
- 伊藤実2004「弥生時代研究の現状と課題」『芸備』第31集 芸備友の会
- 今里幾次1959『播磨の分銅形土製品』『古代学研究』第21・22合併号
- 今里幾次1969『播磨弥生式土器の動態（一）』『考古学研究』第15巻第4号
- 今里幾次1970『播磨弥生式土器の動態（二）』『考古学研究』第16巻第1号
- 井守徳男編1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第16冊
- 井守徳男1983「奈カリ与弥生時代集落の構成」『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』兵庫県文化財調査報告第16冊
- 上田哲也編1971『兵庫県埋蔵文化財調査報告書』兵庫県文化財調査報告第5冊
- 上田哲也、中溝康則他1975『山田遺跡』太子町教育委員会、建設省姫路工事事務所
- 上田哲也、是川長、中溝康則他1982『長尾・タイ山遺跡』龍野市文化財調査報告Ⅲ
- 上田哲也、是川長、中溝康則他1994『龍野市寄井遺跡』龍野市文化財調査報告13
- 大阪府文化財センター（財）2004「八尾南遺跡の調査—現地説明会資料—」
- 岡崎正雄、深井明比古編1985「」『柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第30冊
- 岡崎正雄編1991『福井田遺跡』兵庫県文化財調査報告第94冊
- 岡村秀典1999『三角縁神獸鏡の時代』吉川弘文館
- 岡本一十編1992『満之口遺跡発掘調査報告書Ⅰ』加古川市文化財調査報告10
- 岡山真知子2000『照穴住居の様相』『鮎岐遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第26集
- 小野忠熙1953『鳥山川』山口大学島田川遺跡仔細調査団
- 加藤史朗2000「桑田・原遺跡出土の「投彈子」について」『山津屋・桑田・原』揖保川町文化財報告書
- 甲斐昭光2002「兵庫県の分割形土製品彙編」『播磨戸内海の考古学一』井勝氏追悼論文集一』古代吉備研究会
- 鎌木義昌、小林博昭1992『大山神社遺跡』『兵庫県史』考古資料編
- 神原英朗1997『用木山遺跡』岡山県山陽町教育委員会
- 岸本道昭1993「調査地区的考古学的環境」『播磨回船在現況調査報告V』龍野市教育委員会
- 岸本道昭1995「断絶の中期と後期—西播磨弥生社会の理解のために—」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要3—設立10周年記念論集—』
- 岸本道昭編1995『養久山・前地遺跡』龍野市文化財調査報告15
- 岸本道昭1995「播磨弥生中期後半の土器編年新考」『養久山・前地遺跡』龍野市文化財調査報告15
- 岸本道昭1998「播磨弥生後期前半の実態と編年」『小神辻の堂遺跡』龍野市文化財調査報告20
- 岸本道昭編1998『中垣内大神山・三昧山古墳群』龍野市文化財調査報告19

- 岸本道昭編1998「小神社の堂跡」龍野市文化財調査報告20
- 岸本道昭編1999「長尾・小畠遺跡群」龍野市文化財調査報告21
- 岸本道昭編2001「北山遺跡」龍野市文化財調査報告23
- 岸本道昭編2004「清水遺跡」龍野市文化財調査報告25
- 黒田恭正1994「鍋谷池遺跡」「昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報」
- 小柴治子2002「播磨の窓穴式住居一と久道跡の調査例ー」『那馬台国時代の古墳と大和シンポジウム資料集』香芝市二上山博物館、香芝市教育委員会
- 小林行雄、佐原真1964「紫雲川」続間町文化財保護委員会
- 鶴井正明2001「高地に作られたムラ」「弥生時代の集落」大阪府立弥生文化博物館編 学生社
- 近藤義郎1959「共同体と単位集団」「考古学研究」第6巻第1号
- 斎木巖1996「大谷遺跡」「平成5年度神戸市埋蔵文化財年報」
- 酒井龍一1984「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」「文化財学報」第3集
- 酒井龍一1987「瀬戸内北岸における弥生セトルメントシステム」「文化財学報」第5集
- 作出一耕1991「平坂II遺跡」「四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 佐原真1968「近畿地方」「弥生式土器集成」本編2 東京堂出版
- 佐原真1999「日本・世界の戦争の起源」「戦いの進化と国家の生成」人類にとって戦いとは1 東洋書林
- 柴田昌晃2002「瀬戸内海燧灘南岸の中周弥生集落その1—中期後半丘陵性集落の動態ー」「環瀬戸内海の考古学—半井 腹氏追悼論文集—」古代吉備研究会
- 柴田昌晃2004 a「高地性集落と山住みの集落」「考古資料大観」第10巻 小学館
- 柴田昌晃2004 b「中・西部瀬戸内の高地性集落と山住みの集落」「弥生社会の群像—高地性集落の実態—」第18回古代学会四国支部大会徳島大会発表要旨集
- 宋永鑑雄、石野博信1967「津波加茂」関西大学文学部考古学研究第3冊
- 志水豊章、森下大輔1997「尾崎遺跡」龍野市文化財調査報告1
- 高木芳史編2000「龜田遺跡（第1分冊）」兵庫県文化財調査報告第210冊
- 高木芳史2000「龜田遺跡出土石器のまとめ」「龜田遺跡（第2分冊）」兵庫県文化財調査報告第209冊
- 高瀬一嘉編1994「六角遺跡」兵庫県文化財調査報告第134冊
- 多賀茂治1996「玉津田中遺跡の窓穴住居について」「玉津田中遺跡 第6分冊（総括編）一」兵庫県文化財調査報告第135-6冊
- 高畠知功、福田正継1983「奥板遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」53
- 千種浩、安田滋1988「久留主谷遺跡」「昭和60年度神戸市埋蔵文化財年報」
- 都出比呂志1974「古墳出現前夜の集団関係」「考古学研究」第20巻第4号
- 都出比呂志1985「弥生時代住居の東と西」「日本語・日本文化研究論集」大阪大学文学部
- 都出比呂志1998「古代國家の胎動」NHK人間大百科
- 寺沢薰1978「大和の高地性集落—「上ノ山遺跡」の紹介とその占める位置」「青陵」第37号
- 寺沢薰2000「壬午誕生—日本の歴史02—」（講談社）
- 寺沢薰2003「弥生時代後期低丘陵性集落の位置づけと高地性集落」「三井岡塚遺跡」奈良県文化財調査報告書第94集
- 守前直人2004「武器の普及と集落形態の関係」「弥生社会の群像—高地性集落の実態ー」第18回古代学会四国支部大会徳島大会発表要旨集
- 中谷良一編「福田天神遺跡」龍野市文化財調査報告IV

- 長瀬誠司編1999『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書IV—有鼻遺跡（1）—』兵庫県文化財調査報告第185冊
- 中間開二1987『松葉原型住居—我が種作農耕受容期における堅穴住居の研究—』『東アジアの考古と歴史—岡崎敬先生退官記念論集—』
- 柳田正男1999『弥生時代の石器』『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書IV—有鼻遺跡（1）—』兵庫県文化財調査報告第185冊
- 播磨考古学研究会実行委員会編2003『播磨の弥生社会を探る—弥生時代中期から後期における集落動態—』第4回播磨考古学研究集会の記録
- 横木誠一編1971『川島・立岡遺跡』兵庫県太子町教育委員会
- 平穂佳子編『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書IV』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 深井明比古、山橋重喜1988『淡久・乙城川』兵庫県文化財調査報告書第58冊
- 深江英喜編2000『龜田遺跡（第2分冊）』兵庫県文化財調査報告第209冊
- 深江英喜2000『弥生時代の龜田遺跡—土器縁相及び周辺集落との係わりについて—』『龜田遺跡（第2分冊）』兵庫県文化財調査報告第209冊
- 藤田憲司1984『単位集団の居住領域—集落研究の基礎作業として—』『考古学研究』第31巻第2号
- 古本寛編1995『尾崎遺跡II』龍野市文化財調査報告14
- 松下勝1971『檍特山遺跡確認調査報告』『川島・立岡遺跡』太子町教育委員会
- 松本正信、加藤史朗他1978『撫尻浅谷』揖保川町教育委員会
- 松本正信1981『姫路市檍特山出土の土器・石器について』『兵庫考古』第15号
- 松本正信1984『龍野市とその周辺の考古資料・弥生時代』『龍野市史』第4巻
- 松本正信、加藤史朗他1995『御旅山13号墳』姫路市教育委員会
- 松本正信1996『鉄器・吉銅器・イネの登場する時代』『太子町史』第1巻
- 松本正信、加藤史朗他1988『揖保川町埋蔵文化財分布地図』揖保川町文化財報告書V
- 松本正信、中溝康則他1990『考古学からみた太子町』『太子町史』第3巻
- 松本正信、加藤史朗他2000『山神殿・桑田・原』揖保川町文化財報告書V
- 松本正信、中横久喜他2001『揖保川町の考古資料』『揖保川町史』第3巻
- 松本正信、加藤史朗他2001『新宮宮内遺跡』新宮町教育委員会
- 丸山潔1992『弥生集落の動態（1）—浜攝国境地域—』『究極—堺蔵文化財研究会15周年記念論文集』
- 三原慎吾1994『石器』『六角遺跡』兵庫県文化財調査報告第134冊
- 式藤誠、石野博信1962『大山神社遺跡』『家島群島』神戸新聞社
- 森岡秀人1985『弥生時代層年代論をめぐる近畿第V様式と年代』『信濃』第37号第4号
- 森岡秀人1986『高地性集落』（『弥生文化の研究』7、学生社）
- 森岡秀人1994『弥生の争乱・近畿一大盛山遺跡と倭國大亂…』『シンポジウム大盛山遺跡のなぞ 弥生の城か？祭場か？—但馬のクニの発生を考える—』資料集 和田山町
- 森岡秀人1996『弥生時代抗争の東方波及—高地性集落の動態を中心に—』『考古学研究』第42巻第3号
- 森岡秀人2002『高地性集落研究の現状と今後の展望』『古代文化』第54巻第4号
- 山下史朗1994『遺構について』『六角遺跡』兵庫県文化財調査報告第134冊
- 山下史朗1999『まとめ』『滑水遺跡』兵庫県文化財調査報告第183冊
- 山下清朝編1997『美乃利遺跡』兵庫県文化財調査報告第165冊
- 山本三郎1971『播磨中期弥生式土器の実態』『川島・立岡遺跡』太子町教育委員会

- 山本三郎1989「国内における青銅器溶融とその遺跡—近畿1兵庫—」『シンポジウム青銅器の生産・終末期古墳の諸問題』日本考古学協会編 学生社
- 山本三郎編1984『玉津田中遺跡－調査概報I－』兵庫県教育委員会
- 山本三郎1990「大中遺跡の後期・終末期弥生土器」『播磨大中遺跡の研究』播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館
- 山本三郎編1995『片島古墳群・片島遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第143冊
- 山本三郎2000「明石海峡・明石川流域における弥生時代の高地性集落小論」『あまのともしひ—原口先生古希記念集』吉謙雅仁1980「黒岩山遺跡調査報告」『播但連絡有料自動車道建設にかかる埋蔵文化財調査報告書II』兵庫県文化財調査報告第13冊
- 渡辺弘、村上賛治他1987「龜子向イ山」兵庫県文化財調査報告第51冊
- 渡辺弘、岡田章一他1989「半田山」兵庫県文化財調査報告第65冊

## VI 自然科学的分析

### 1. 竹原中山遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・

Zaur Lomtadidze・Incza Jorjoliani・藤根 久

#### 1.はじめに

兵庫県竹原中山遺跡SK01から検出された炭化材試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

#### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調整データは表1のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、曆年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-4681	位置：SK01	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクトAMS・ 1.5SDH
PLD-4682	位置：SK01 下層 その他：SH12	試料の種類：炭化物・材 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N)	PaleoLabo： NEC 製コンパクトAMS・ 1.5SDH

#### 3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行った<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代範囲、曆年較正に用いた年代値を、図1に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うため記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお、曆年較正の詳細は以下の通りである。

##### 曆年較正

曆年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年）を

較正することで、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$ 年代の曆年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお、 $1\sigma$ 曆年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の曆年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 曆年代範囲は95.4%信頼限界の曆年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に曆年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。それぞれの曆年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

表2 放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 曆年代範囲	$2\sigma$ 曆年代範囲
PLD-4681	-26.25 $\pm$ 0.11	2125 $\pm$ 20	2125 $\pm$ 21	200BC(44.1%)150BC 140BC(24.1%)110BC	350BC(2.5%)320BC 210BC(92.9%)50BC
PLD-4682	-28.09 $\pm$ 0.13	2085 $\pm$ 20	2084 $\pm$ 21	160BC(17.1%)130BC 120BC(51.1%)50BC	170BC(95.4%)40BC

#### 4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正及び曆年較正を行った。得られた曆年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

いずれの試料も土坑SK01に関係する炭化材試料である。PLD-4681の炭化材が $1\sigma$ 曆年代範囲においてBC200-150年、 $2\sigma$ 曆年代範囲においてBC210-50年である。PLD-4682の炭化材が $1\sigma$ 曆年代範囲においてBC120-50年、 $2\sigma$ 曆年代範囲においてBC170-40年である。

木材は、複数年輪から構成されるため最外年輪を測定した場合には、少なくとも本材の伐採年代を示すが、これ以外の年輪部の測定では年代が古くなる。両者の年代値には若干の開きがあるが、いずれの試料も最外年輪は確認されないことから、こうした年輪位置による違いを示している可能性がある。調査の知見では、弥生時代中期後半の単純遺跡であるが、炭化材の年代値から、土坑SK01は弥生時代中期を示している。

#### 参考文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425-430.
- Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の $^{14}\text{C}$ 年代, 3-20.
- Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CF Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmeli, JR Soutter, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.

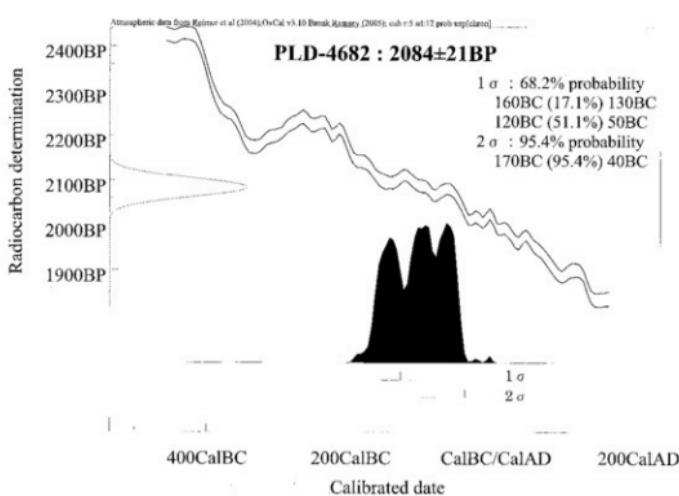
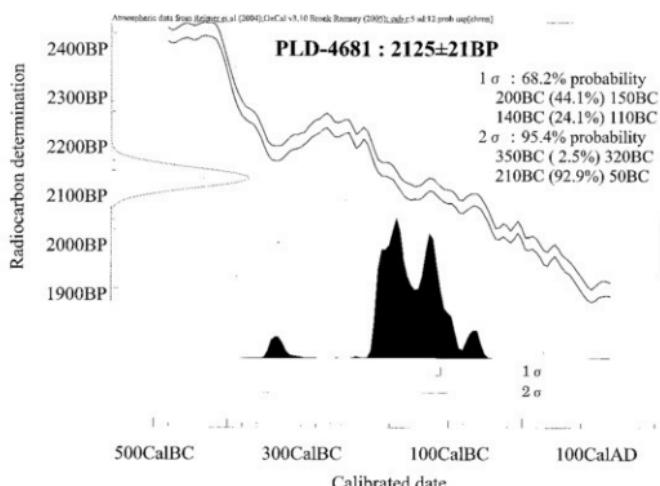


図1 年代校正結果

## 2. 竹原中山遺跡出土サヌカイトの産地推定

竹原弘展(パレオ・ラボ)

### 1.はじめに

竹原中山遺跡は、丘陵上に立地する弥生時代中期後半の高地性集落である。竹原中山遺跡より出土したサヌカイトについて、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、原産地を推定した。

### 2. 試料と方法

対象試料は竹原中山遺跡より出土したサヌカイトの剥片2点である(表1、図版)。各試料とも風化層に覆われていたため、試料の一部分をエアブラシを用いて新鮮面の岩山をさせた後、超音波洗浄を行い、その新鮮面を測定箇所とした。

分析装置は、(株)セイコーワインツルメンツ社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA-2001Lを使用した。装置の仕様は、X線管はロジウムRhターゲット、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300sec、照射怪10<sup>-4</sup>、電流自動設定(1-63μA、デッドタイムが20%未満になるよう自動的に設定)、電圧50kV、試料室内雰囲気真空に設定した。

産地推定には、黒曜石産地推定法において用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法(例えは望月2004)を、分析対象をサヌカイトに置き換えて適用した。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)とルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps; counts per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) Rb分率=Rb強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 2) Sr分率=Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 3) Mn強度×100/Fe強度
- 4) log(Fe強度/K強度)

そしてこれらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、原産地を推定するものである。

原石試料も、採取原石を割って新鮮な面を突出させた上で産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に各原石採取地とそれぞれの試料点数を示す。

### 3. 分析結果

図1および図2に、サヌカイト原石の判別図と竹原中山遺跡出土試料2点をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を円で取り囲んである。試料1は金山の範囲に、試

表1 分析対象試料一覧

試料No.	器種	出土遺物
1	剥片	SH01西半
2	剥片	SH05

表2 原石採取地と試料数

原石採取地	試料数	
二上山	春日山	12
豊岐	国分台自衛隊演習場	12
豊岐	国分台自衛隊演習場	12
豊岐	神谷神社	12
豊岐	雄山	6
豊岐	越山	6
豊岐	金山	12
豊岐	城山南側	6
豊岐	城山北側	6
豊岐	高龜塙神社	12

料 J2は国分台・神谷神社の範囲に収まった。のことから、これら試料は讃岐地方産のサヌカイトである可能性が高く、少なくとも二上山系の春日山産ではないといえる。ただし、未知の产地のサヌカイトである可能性は否定できない。

#### 4. 終わりに

竹原中山遺跡より出土したサヌカイトについて、蛍光X線分析による产地推定を行った結果、2点の遺物共に讃岐地方産と推定された。ただし、未知の产地である可能性もある。

#### 引用文献・参考文献

望月明彦 (2004) 用田大河内遺跡出土黒縞石の产地推定. かながわ考古学財団調査報告167 用田大河内遺跡, 511-517,

財團法人 かながわ考古学財団

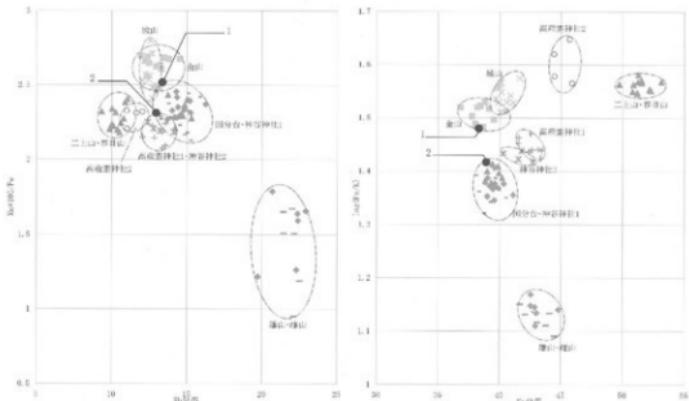
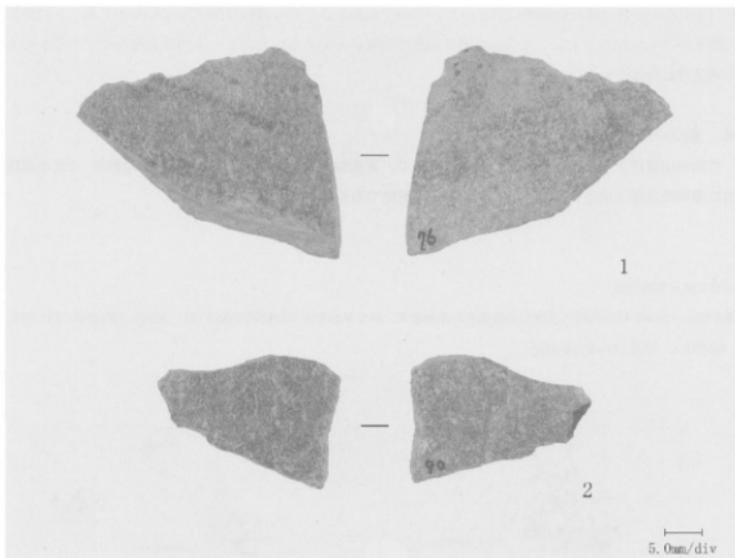


図1 サヌカイト产地推定期別図(1)

図2 サヌカイト产地推定期別図(2)



図版 分析対象試料

## VII おわりに

竹原中山遺跡は冬季の調査であった。厳寒期の1月末から初春の3月はじめまでの1ヶ月余りの長い発掘調査で思い出深い遺跡の1つにもなった。遺跡が不時免見であったこともあり、急遽編成しなおした体制で実施したものであった。阪神淡路大震災の復興調査も中だるみ状態の時期であった。そのことから、復興調査班を編成していたにも関わらず、明石市支援の明石城跡武家屋敷跡の前面調査の合間に日本道路公団の山陽自動車道新宮インターチェンジの発掘調査を1班が担当した。そのこともあって、1名と企画調整班の1名で担当することとなった。最近では当たり前のようになった高齢となった調査担当者の年齢だが、当時は2人合わせて100歳に手が届きそうになるのは異常なことであった。担当者として思い思いの感慨を持って調査に従事した。竹原中山遺跡からの眺望にかつて調査した幾つかの遺跡（のあった場所）を眺めながら、思いをはせたものである。

僅か1ヶ月1,700m<sup>2</sup>の小規模な調査であったが、予想以上に大きな成果を上げることができた。兵庫県での高地性集落の代表の1つにもなろうかと自負している。弥生中期後半の短期間の集落跡である。切り合い関係も含めて14基の竪穴住居跡と狼煙場跡と推定している土坑や落ち込み・溝を検出した。

竪穴住居跡は14棟検出している。立地から4つに分けることが可能である。北側の東斜面は不明確であるが、他の部分では4棟か5棟検出している。が、各々切り合い関係があり、それを除くと各地点3棟ずつとなり、これが1単位かと思われる。切り合い関係の特徴は、高い方から低い方へ移動している。

遺跡の特徴は、高地性集落であるということである。の中では、より眺望範囲が広いということ。そして石器製作に携わり、鉄器も保有していること。の2点に集約されると思う。

眺望関係が優れていること。これには、ただ単に広範囲を視界に納めることが出来るというのではなく、同時期の高地性集落と眺望関係にあるということが最大のポイントである。家島諸島男島の大山神社遺跡、揖西平野の的場山、揖保川東の片山東山遺跡、さらに南東の太子町櫛特山遺跡である。調査中に実際に目にすることは出来なかつたが、20年前の台風一過の日には的場山山頂からだが、市川河口域から旗振り山まで眺望できた。さらに当然揖西平野の各遺跡、丘陵上の片島遺跡・養久乙城山遺跡、低地の尾崎遺跡・佐江遺跡・清水遺跡を見ることができる。遺跡間のネットワークは最良の遺跡で、西と北側には伝達できないが、南（大山神社遺跡）から中継して東（櫛特山遺跡など）へ、またはその逆と海岸線を経由しないルートとして意義深いと思われる。遺構の中で注目されるのはSK01とした竪穴坑である。狼煙場ではと考えている遺構で、竹原中山遺跡を象徴する遺構である。

次に石器製作を行っているという点は通常のことかもしれない。讃岐産の石材を運び、石器を作っている。遺構からは破棄された折れた石鐵錠部や打製大型石庖丁・削器・磨石など僅かな製品が残されているのみで、多くは剥片が検出されている。通有に考えられている緊張関係にあったと考えて問題はないであろう。住居跡の多くが施主住居であることは何を意味するのであらうか。

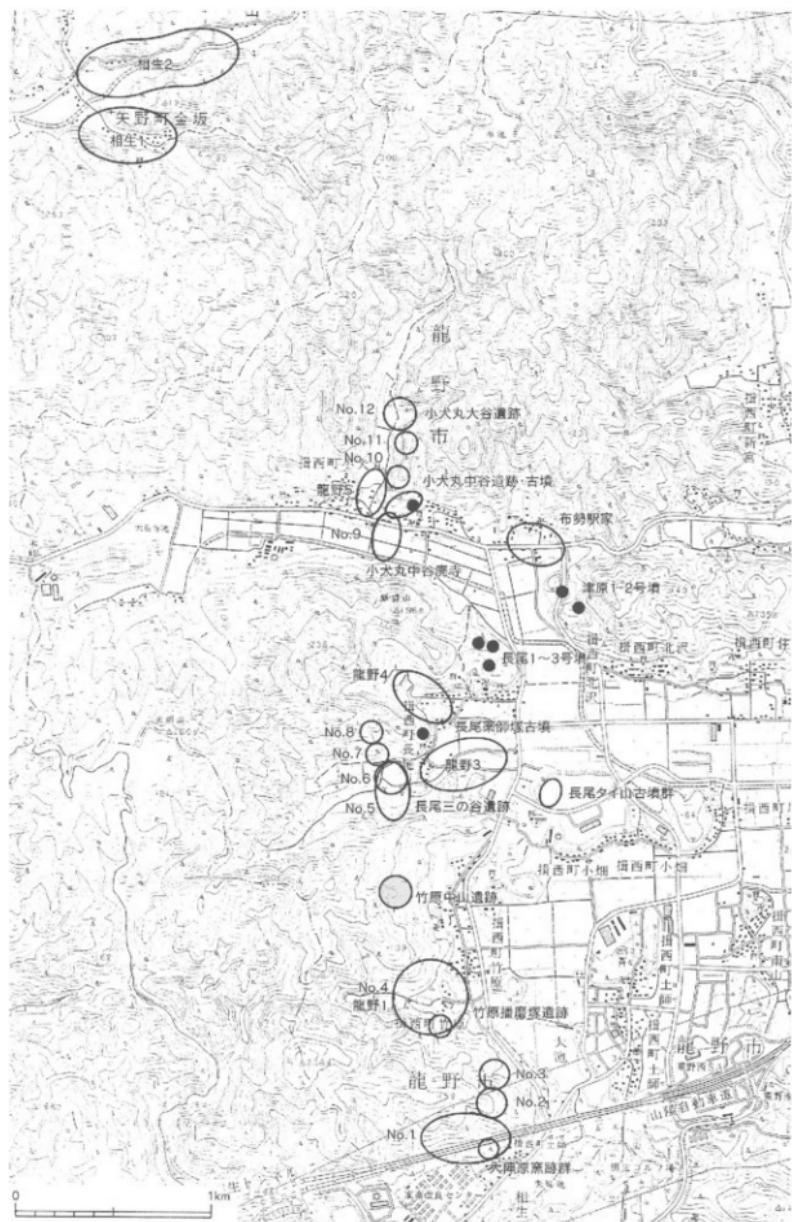
弥生中期末の短期間の高地性集落の調査で、担当者としては代表例になる遺跡と思っている。明確な答えは出せないものの、今後検討活用されればと願っている。

竹原中山遺跡周辺の遺跡

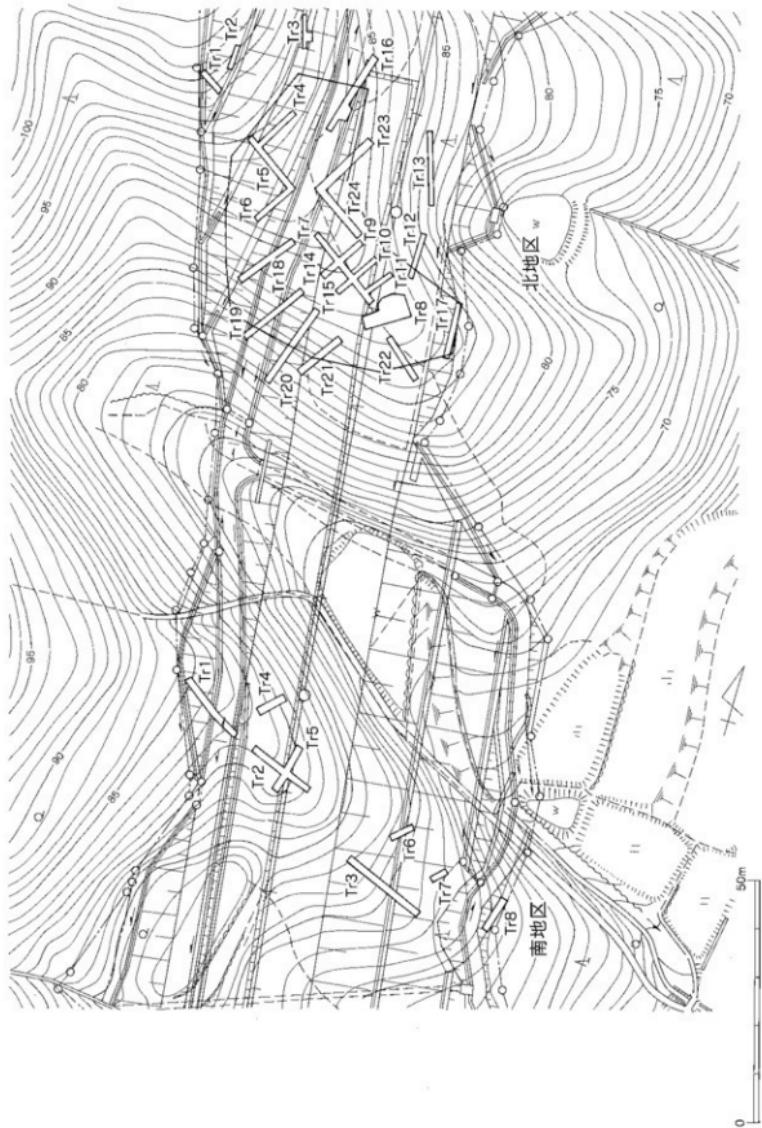
No.	遺跡名	時代	備考
1	竹原中山遺跡	弥生中期後半	2000年県調査
2	大陣原古墳群	平安後期	1979~1999年県調査
3	土師古墳群	古墳後期	
4	二ツアリ塚古墳	古墳後期	
5	宿禰塚	古墳後期	
6	佐伊古墳	古墳後期	1981年県調査
7	那波野古墳	古墳後期	県指定
8	丸山窓跡群	古墳後期	市調査
9	塚森古墳	古墳後期	市指定
10	秦町古墳群	古墳前期~後期	町調査
11	サンマイ山古墳群	古墳後期	
12	山神屋遺跡	弥生~	
13	宝詠山古墳群	弥生末~古墳後期	町調査
14	袋瓦窓谷遺跡	弥生~古墳後期	1976年町調査
15	金剛山古墳群	古墳後期	
16	真砂遺跡	平安	
17	門前遺跡	縄文後期~中世	1970年県調査
18	宝林寺北遺跡	古墳初期~室町	1984~1992年県調査
19	中岱山遺跡・古墳群	弥生中期~古墳後期	
20	神戸北山遺跡	弥生~古墳後期	
21	神戸北山東遺跡	弥生~	
22	神戸北山古墳群	弥生末	
23	片島遺跡・古墳群	弥生中期~古墳後期	1980年県調査
24	熊子長山古墳群	古墳後期	1982年県調査
25	龍子向イ山遺跡・古墳群	弥生中期~室町	1982年県調査
26	三ツ塚古墳群	古墳前期	
27	一塚古墳群	古墳後期	
28	鳥坂古墳群	古墳前期~後期	1982年市 1986年町調査
29	赤山古墳群	弥生末	1971年町調査
30	糞久谷遺跡	縄文~中世	1982年町調査
31	糞久山古墳群	弥生後期~古墳後期	1969年市 1982年県調査 1号墳県指定
32	糞久乙城山遺跡	弥生中期~室町	1982年県調査
33	糞久山前地遺跡		市調査
34	糞山高尾遺跡		
35	尾崎遺跡	弥生中期~古墳前期	市調査
36	長尾・小畑遺跡群		市調査
37	長尾タケ山古墳群	古墳後期	市調査
38	播磨塚遺跡		
39	友ヶ谷古墳群	古墳中期	市調査
40	竹原遺跡	弥生	
41	長尾塚塚原古墳	古墳後期	
42	長尾古墳群	古墳後期	
43	小丸山中谷遺跡		黒瀬査
44	小丸山人谷遺跡		黒瀬査
45	小丸遺跡(布勢原家)		1982~1984年 1989~市調査
46	津原古墳群	古墳後期	県調査
47	池谷古墳群	弥生末~古墳後期	
48	竹万遺跡	弥生	
49	北山遺跡	弥生中期~古墳後期	市調査
50	佐江遺跡	弥生中期~古墳後期	市調査
51	清水遺跡	弥生中期~古墳後期	市調査、1978年黒瀬査
52	半田山遺跡・古墳群	弥生前期~古墳後期	1984年県調査
53	新宮遺跡	弥生中期~	
54	新宮東山古墳群	弥生末	市調査
55	中垣内三昧遺跡		
56	中垣内天神山古墳群	古墳後期	市調査
57	中垣内慶寺	奈良	
58	景雲寺古墳群	古墳後期	
59	山根横森群	弥生末	
60	中垣内古墳群	古墳後期	1号墳市指定
61	小神古墳群	古墳後期	
62	台山古墳群	古墳後期	
63	小神麻寺	奈良	
64	小寺芦原遺跡		市調査
65	西箕山古墳	古墳後期	1954年県調査
66	猿塚古墳	古墳後期	市指定
67	白鷲山古墳群	弥生末	
68	龍野城跡	室町~江戸	県 市調査
69	北瓶野遺跡	弥生中期	
70	宮脇遺跡	平安~鎌倉	1985年県調査



図版1 竹原中山遺跡の位置と周辺の遺跡



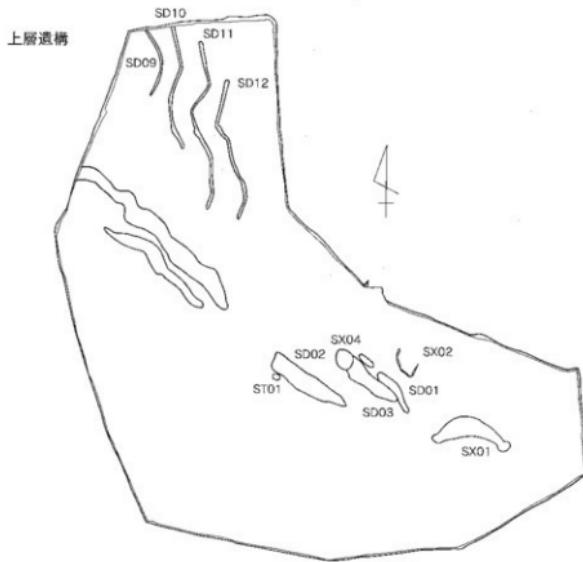
図版2 新宮インター関連調査遺跡位置図



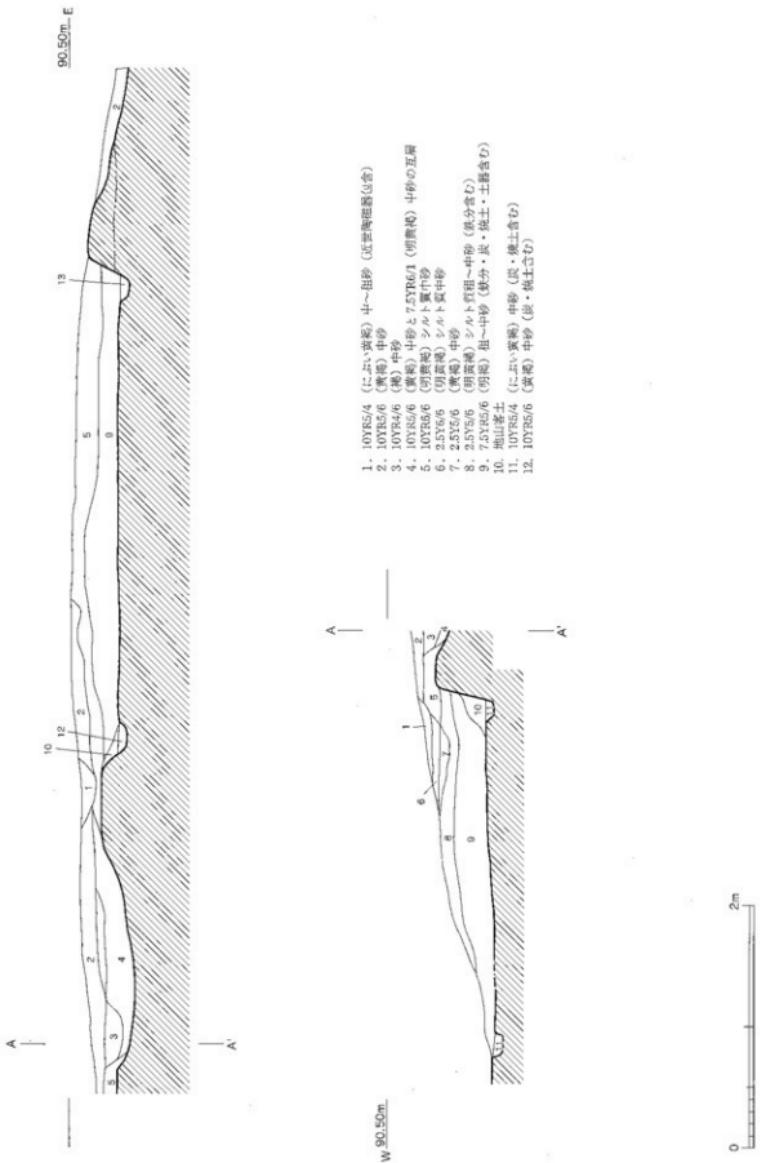
圖版3 竹原中山遺跡平面圖



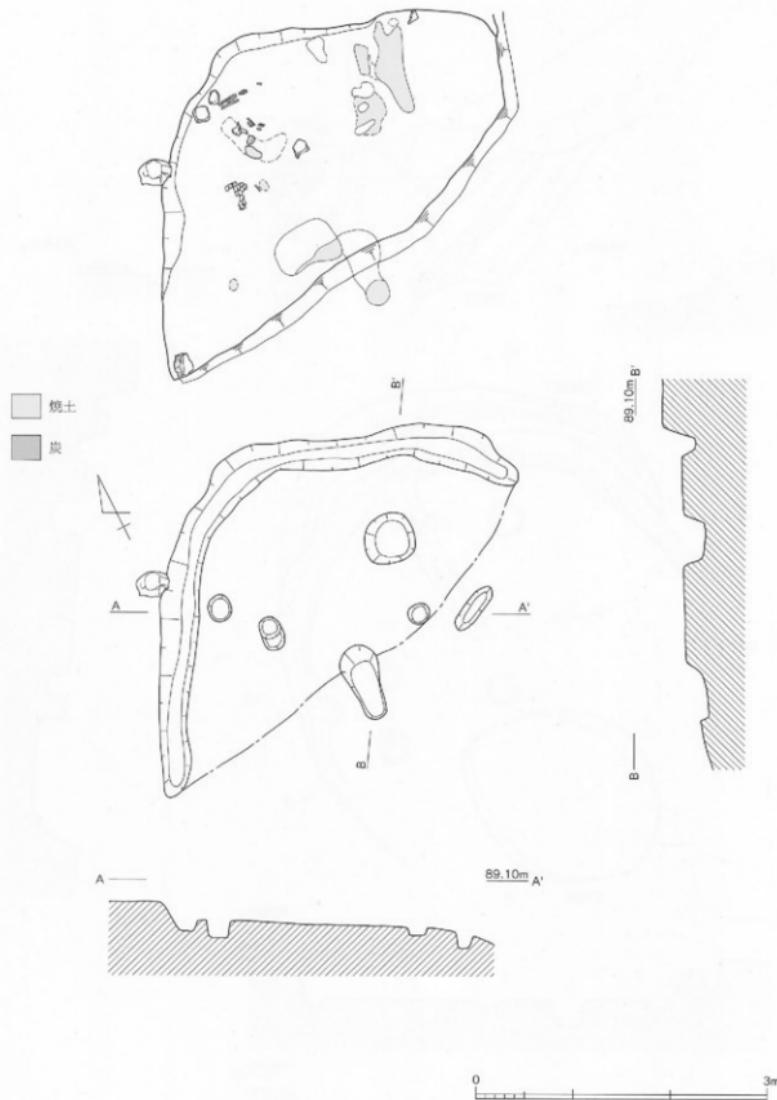
図版4 遺構平面図



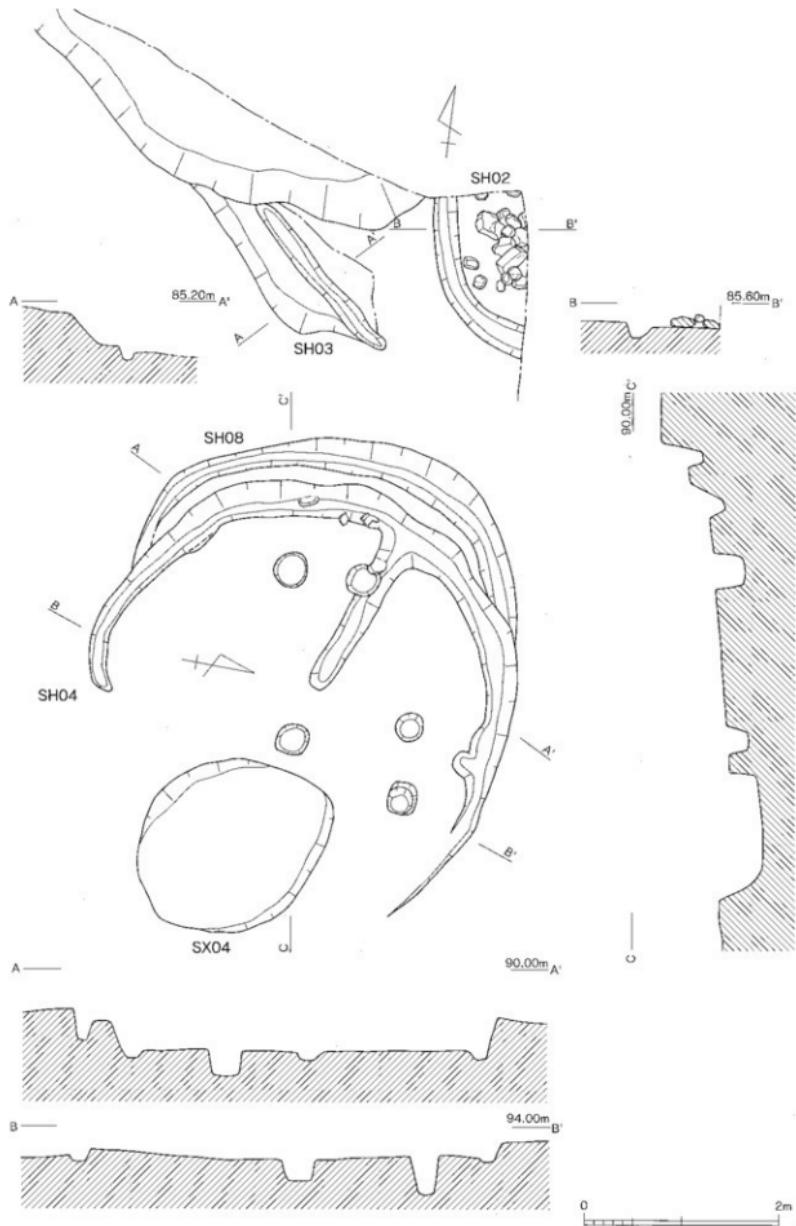
圖版5 上層・下層遺構平面圖



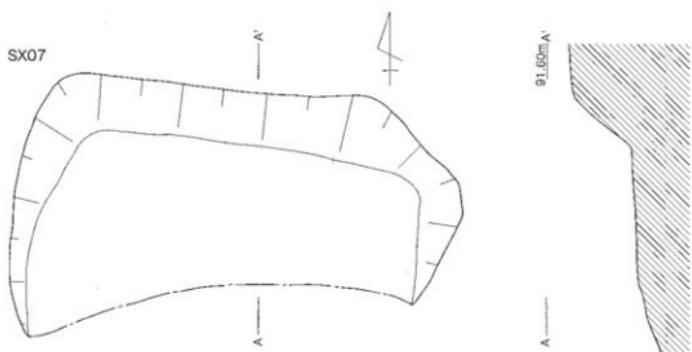
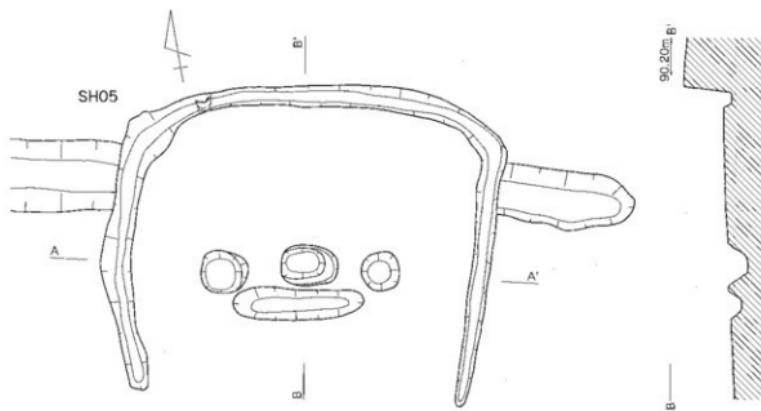
図版6 土層断面図



图版7 SH01 实测图

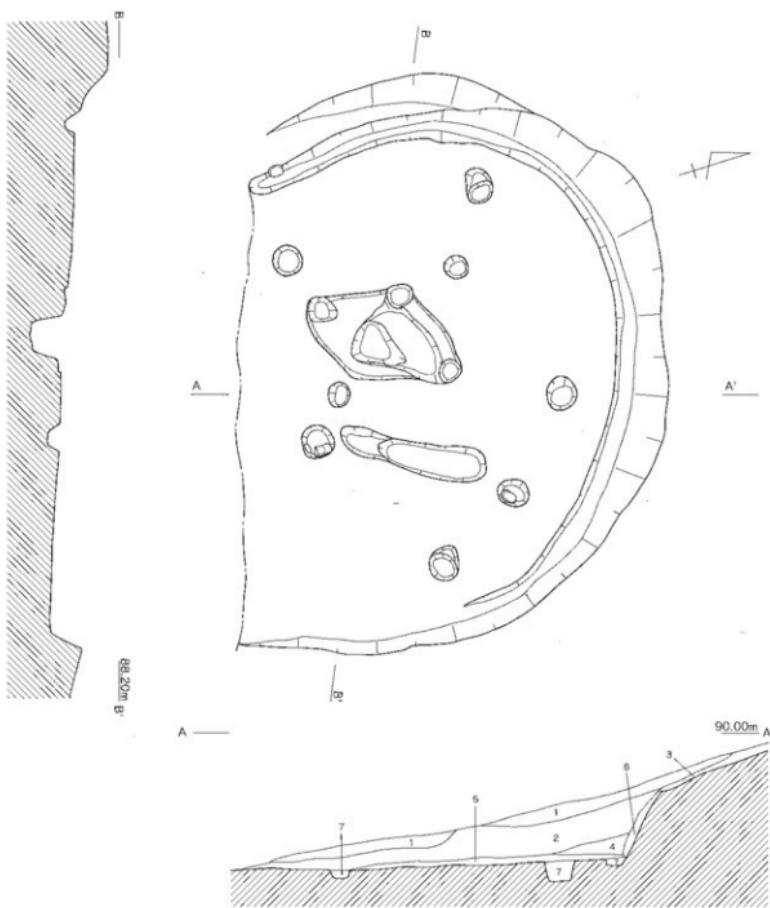


図版8 SH02・03・04・08 実測図



0 3m

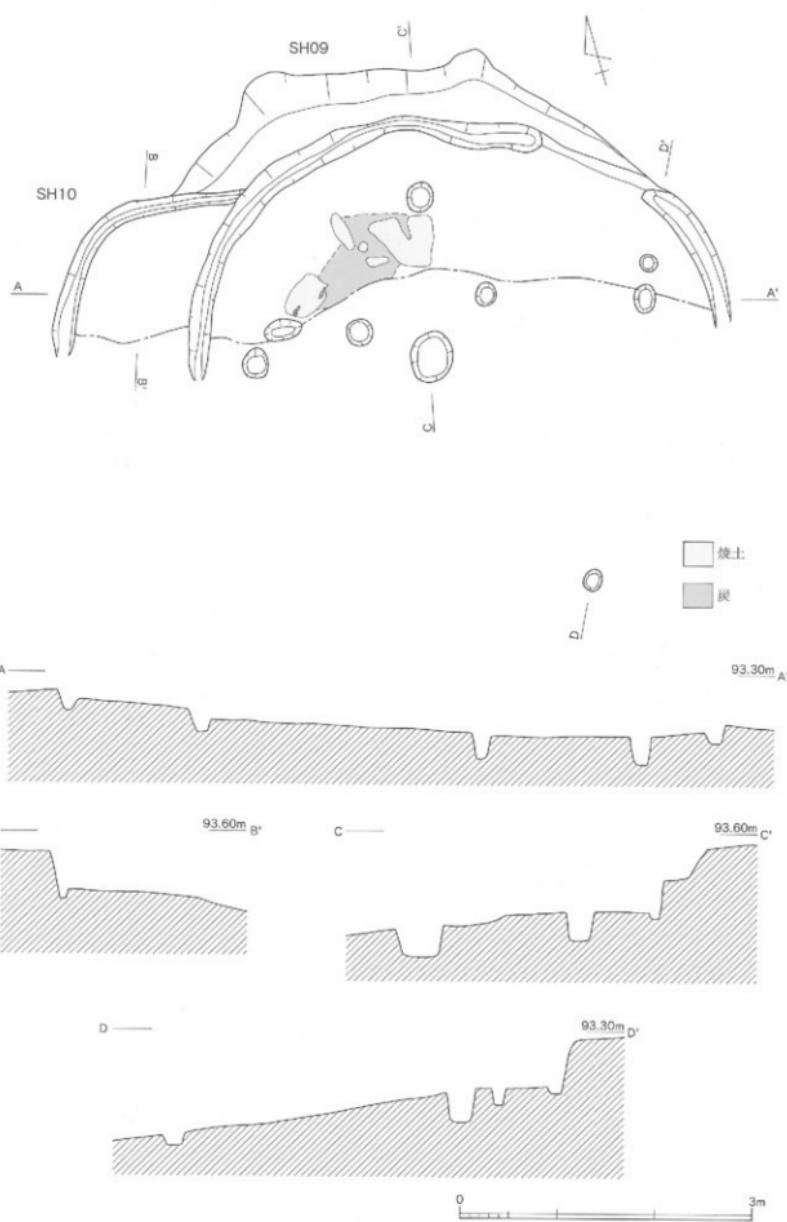
図版9 SH05・SX07 実測図



1. 10YR6/6 (暗黄褐色) シルト質中砂
2. 10YR4/4 (褐) シルト質中～細砂 (灰・土混合)
3. 7.5YR4/6 (褐)
4. 10YR5/6 (黄褐色) 中砂 (灰多く含む)
5. 2.5Y4/6 (にぶい黄褐色) シルト質中～細砂 (貼床か)
6. 7.5YR5/6 (明褐色) 中砂 (地山客土)
7. 2.5Y5/6 (黄褐色) シルト質中砂

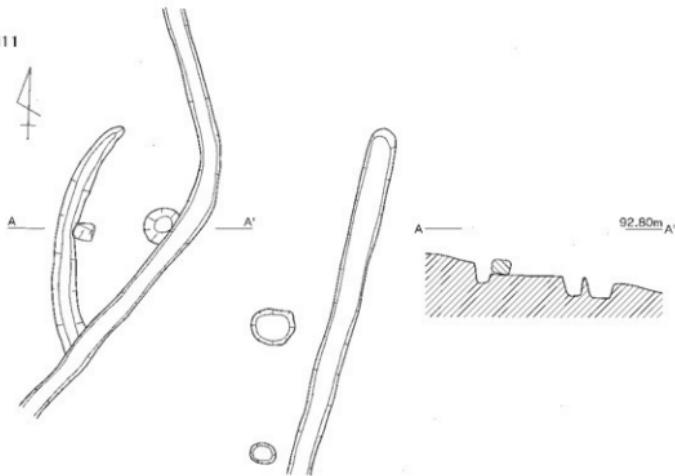
0 3m

図版10 SH06 実測図

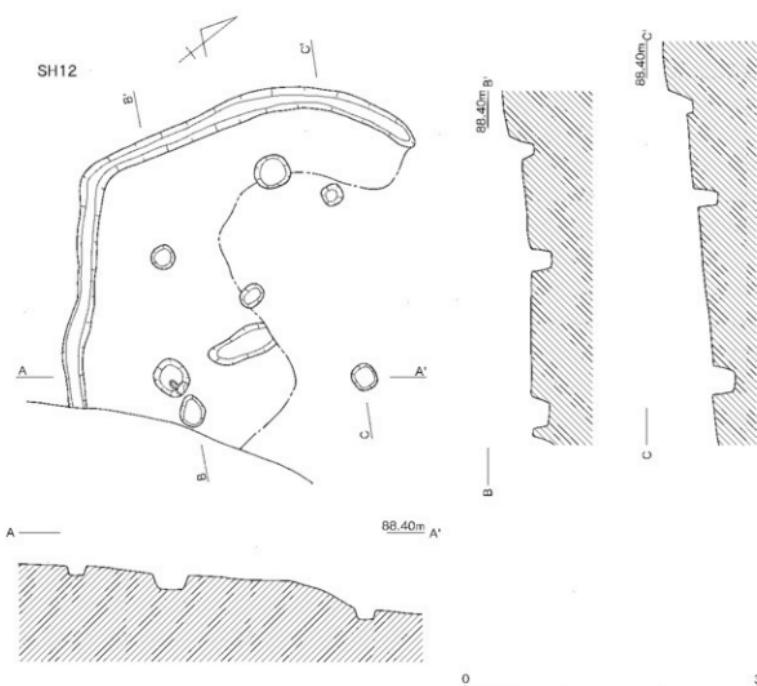


図版11 SH09・10 実測図

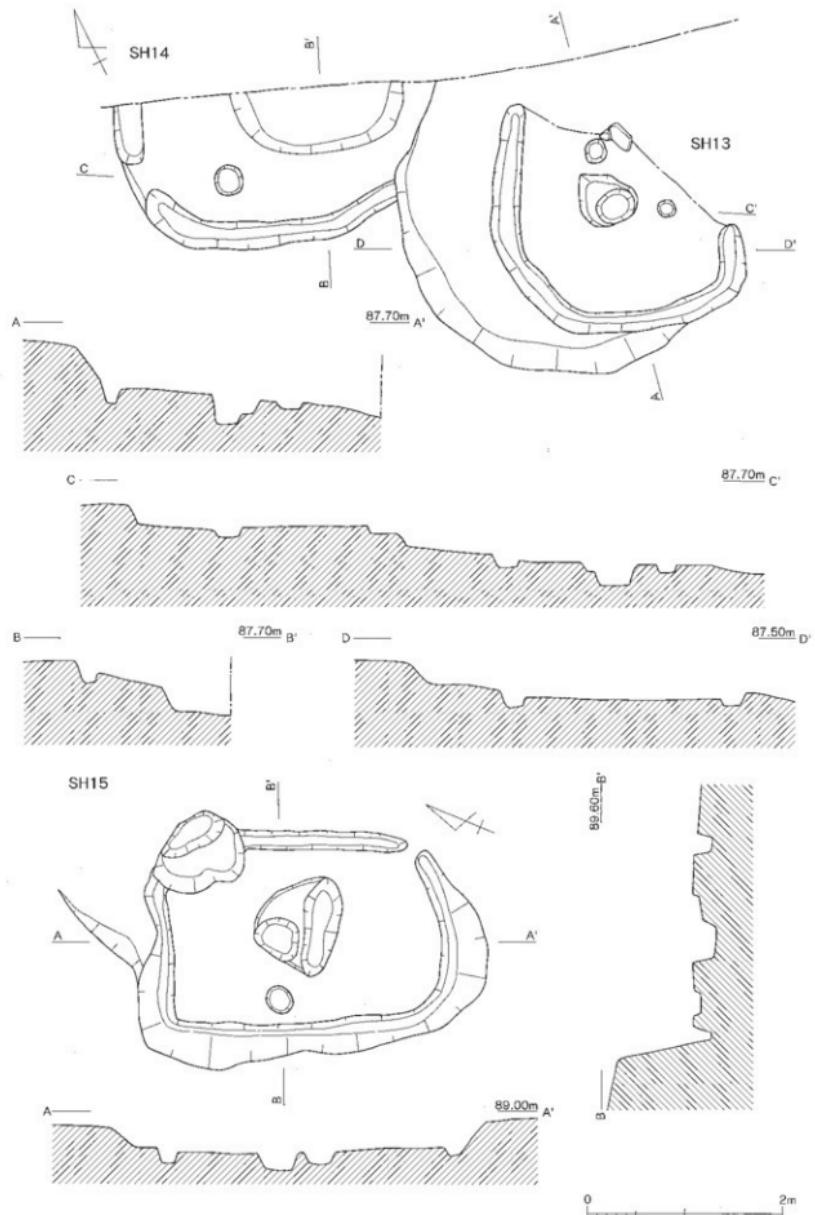
SH11



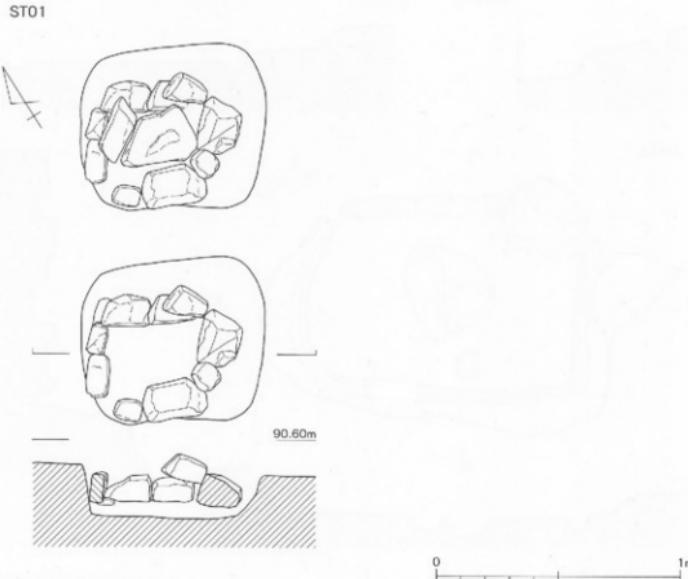
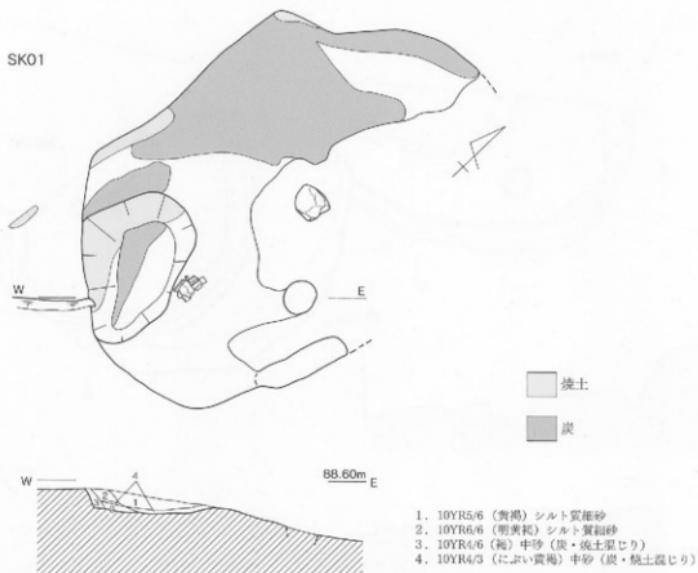
SH12



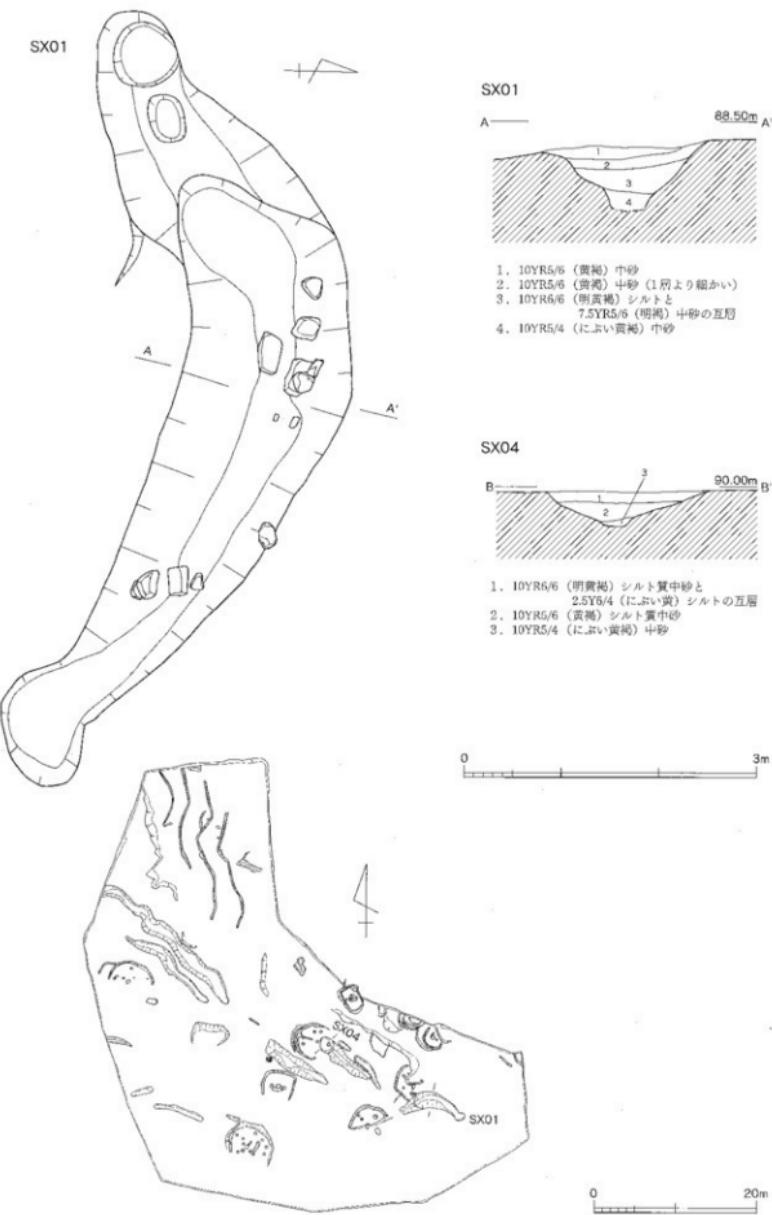
図版12 SH11・12 実測図



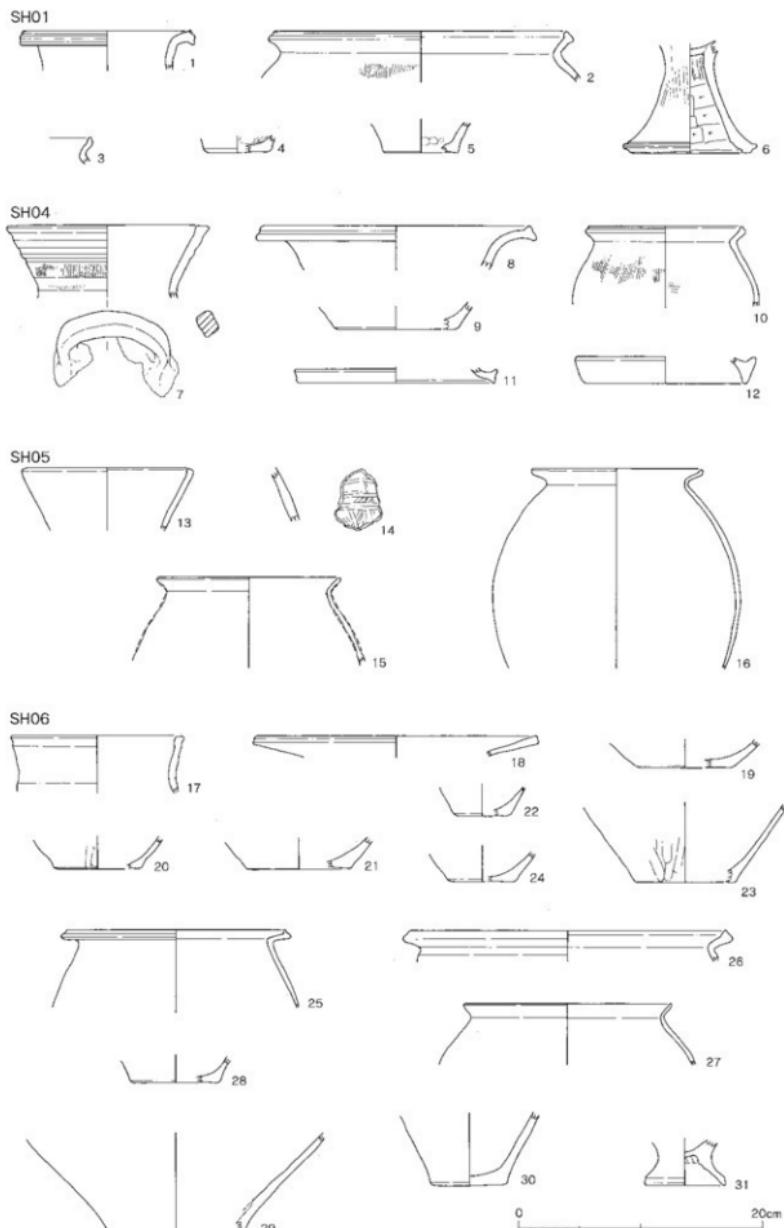
図版13 SH13・14・15 実測図



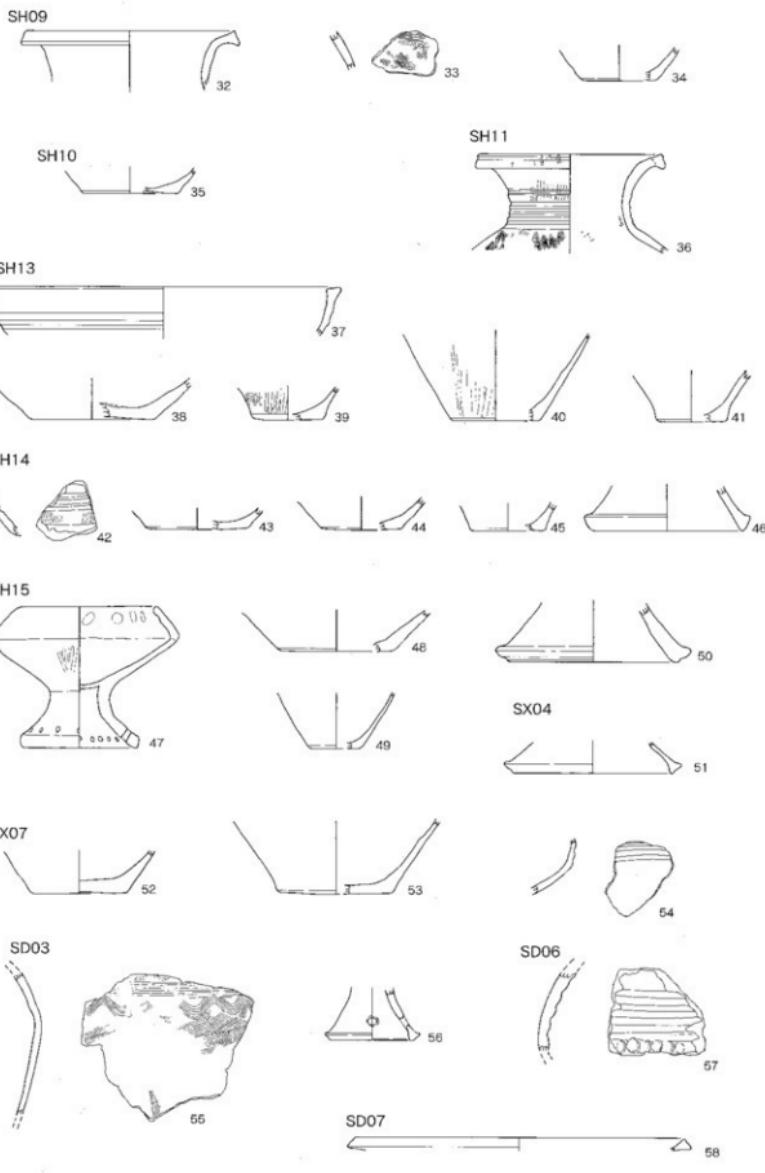
図版14 SK01・ST01 実測図



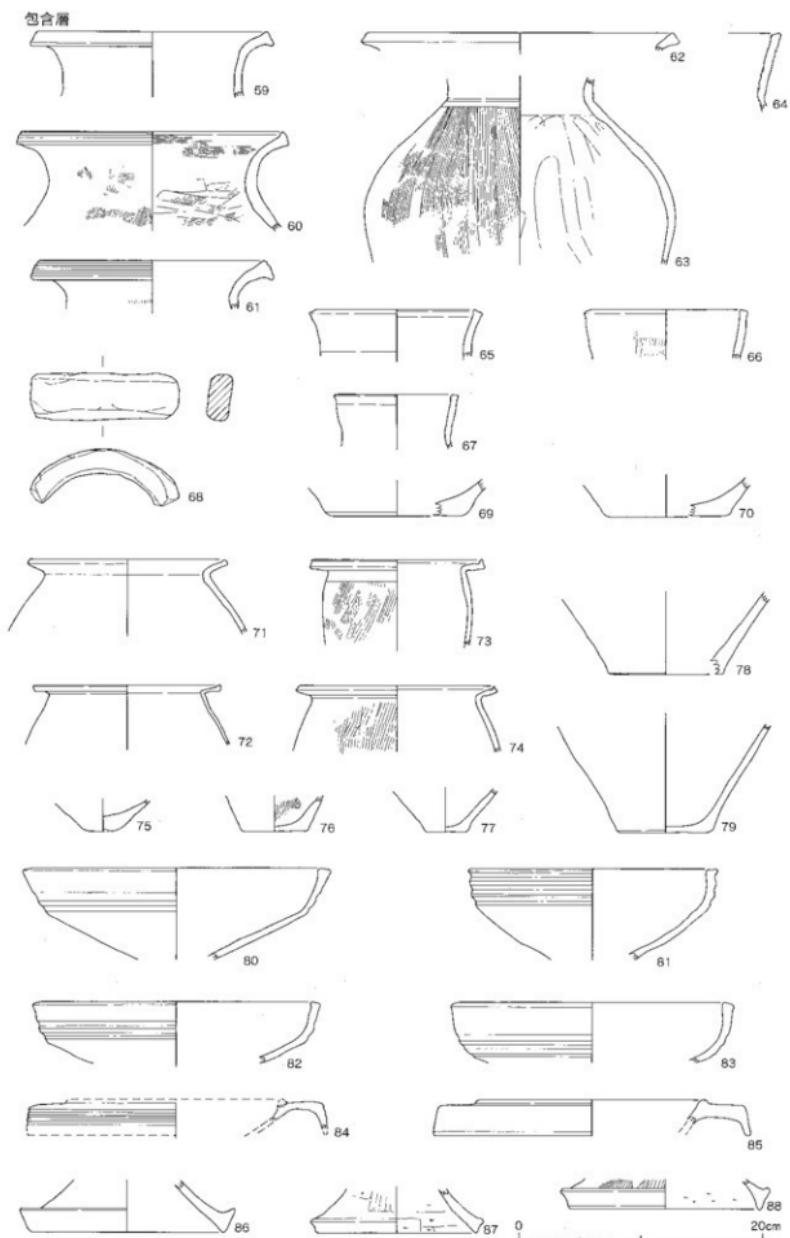
図版15 SX01・04 実測図



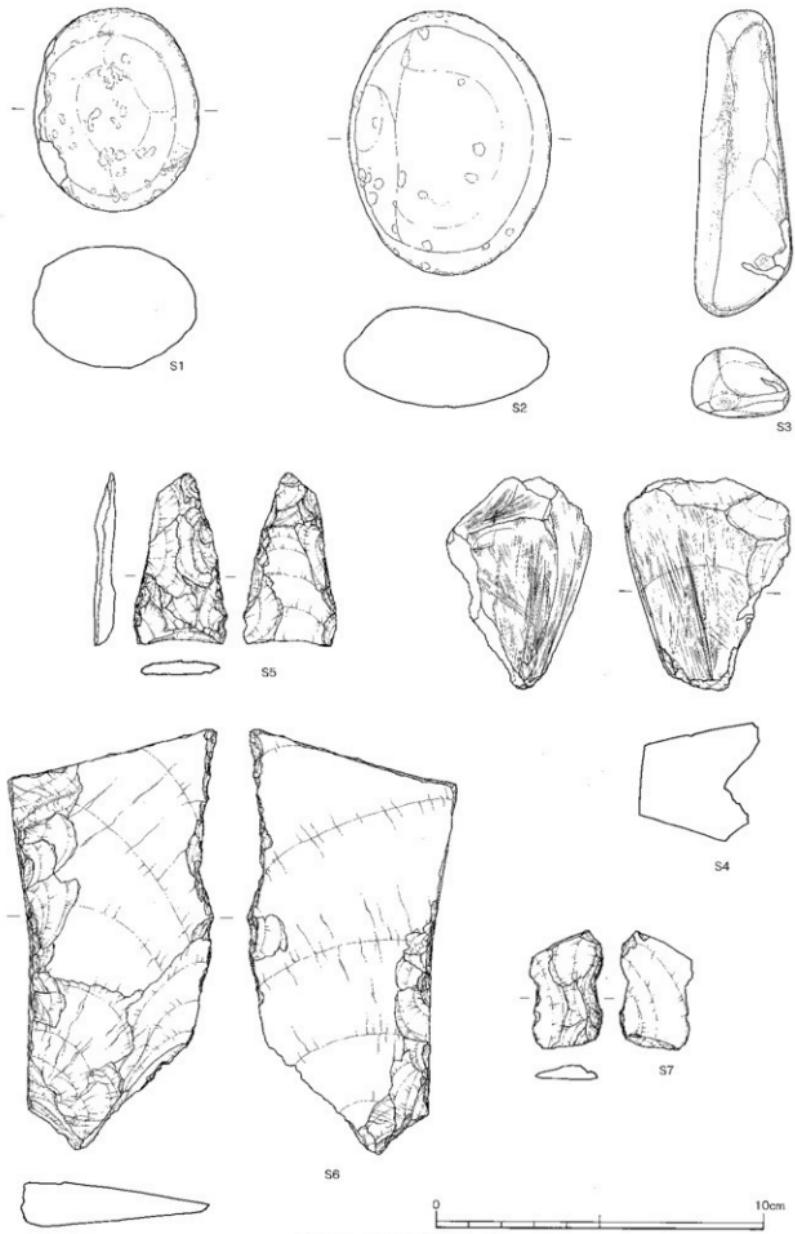
図版16 出土遺物実測図 (1)



図版17 出土遺物実測図 (2)



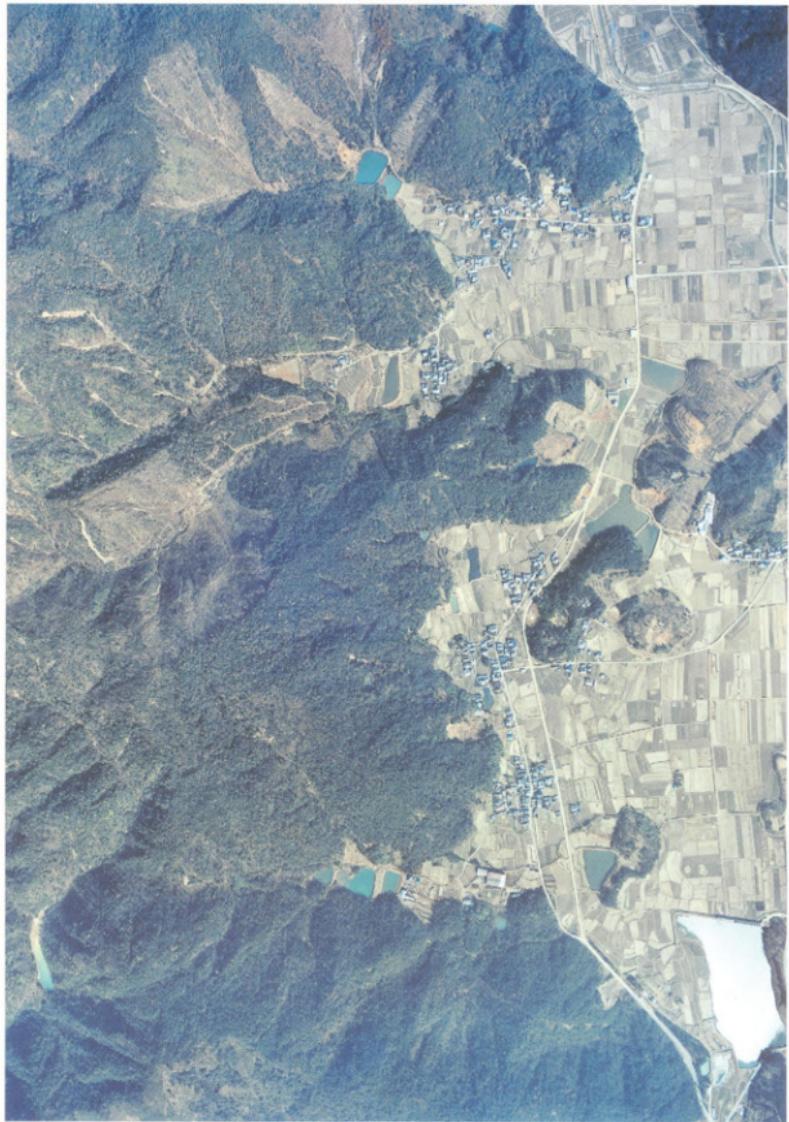
図版18 出土遺物実測図 (3)



図版19 出土遺物実測図 (4)



图版20 出土遗物实测图 (5)



竹原中山遺跡周辺空中写真（国土地理院撮影）

写真図版2



竹原中山遺跡遠景（北上空から）



竹原中山遺跡遠景（南上空から）



竹原中山遺跡と揖西平野（北西上空から）



揖西平野と揖保川（北、的場山から）

写真図版4



竹原中山遺跡遠景（北上空から）



竹原中山遺跡遠景（南上空から）



竹原中山遺跡からの眺望（東、揖西平野）



竹原中山遺跡からの眺望（南側）

写真図版6



竹原中山遺跡遠景（東上空から）



竹原中山遺跡遠景（上空から）



遺跡北半全景（東から）



遺跡北半全景（南東から）

写真図版8



竹原中山遺跡全景（北西から）



竹原中山遺跡空中写真



竹原中山遺跡空中写真

写真図版10



遺跡全景（北西から）



遺跡北半全景（南から）



東側谷部北壁堆積状況（南から）



SH01 全景 (南から)



SH01 西側壁溝 (南西から)



SH01 東側壁溝 (南から)



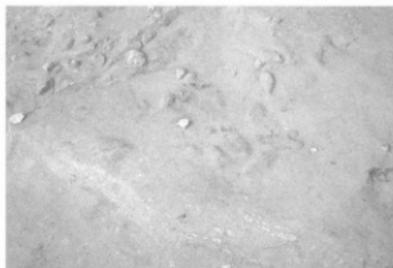
SH01 土坑 (南から)



SH01 柱穴 (南から)



SH01 堆積状況（南西から）



SH01 焼失状況（南から）



SH01 土器出土状況（北から）



SH01 焼失状況（南から）



SH02 全景（南から）



SH02 全景（西から）

写真図版14



SH02・SH03 全景（北から）



SH02・SH03 全景（西から）



SH03 全景（南東から）



SH03 壁溝（南から）



SH03 全景（北東から）



SH03 壁溝アゼ（南から）



SH04・SH08 全景（南から）



SH04・SH08 全景（西から）



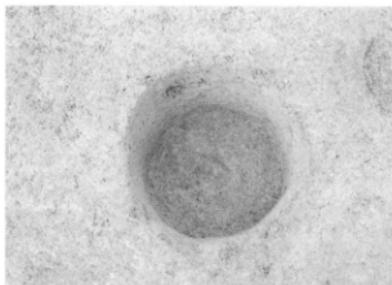
SH04 壁溝（西から）



SH04 中央溝（北から）



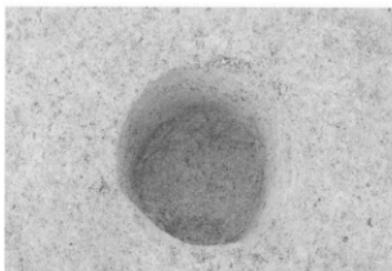
左SH04-08 右SH05 (北西から)



SH04 P01 (南から)



SH04 土器出土状態 (西から)



SH04 P02 (南から)



SH04 土器出土状態 (南から)

写真図版18



S H05・S H06 (北西から)



S H06 (後方 S H05、南から)



S H05 堆積（検出）状況（南から）



S H05 壁溝（南から）



S H05 土器出土状態（西から）



S H05 壁溝（南から）



S H05 土坑（南から）

写真図版20



S H05 (南から)



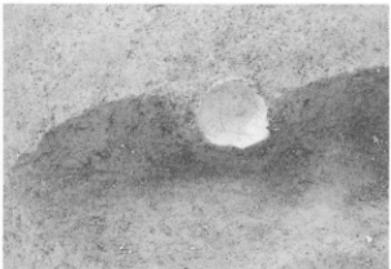
S H05 (南西から)



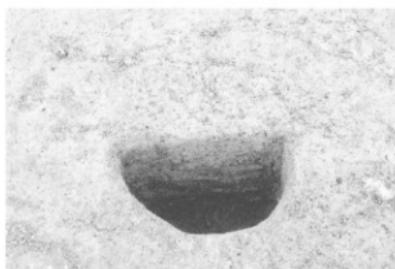
S H06 (後方 S H05・S H04、南から)



S H06 P01 (南から)



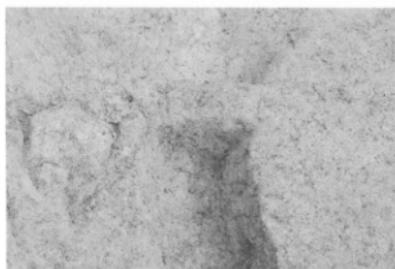
S H06 土器出土状態 (南から)



S H06 P02 (南から)



S H06 中央土坑 (南西から)



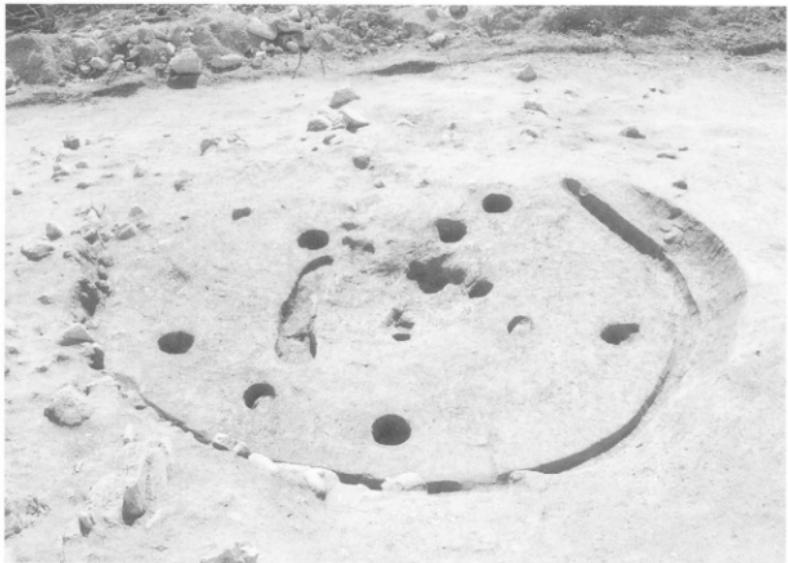
S H06 壁溝 (西から)



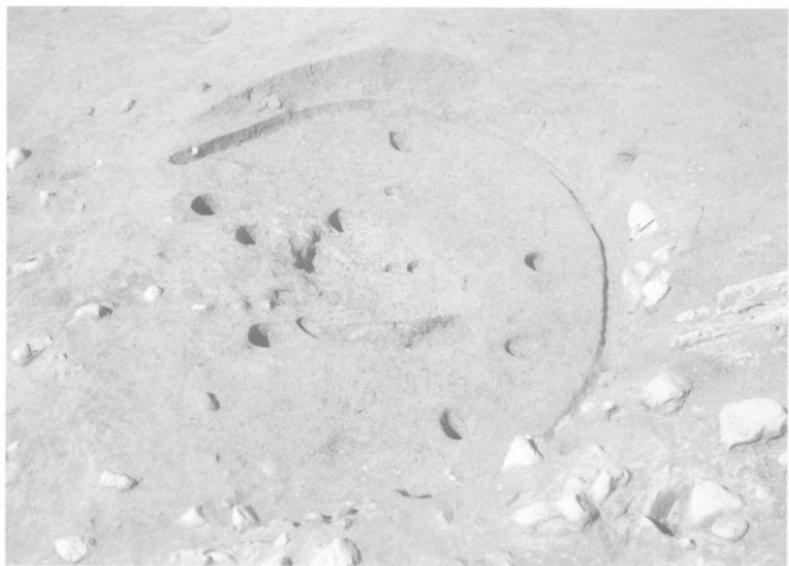
S H06 溝状土坑 (西から)



S H06 壁溝 (東から)



S H06 全景（東から）



S H06 全景（南から）

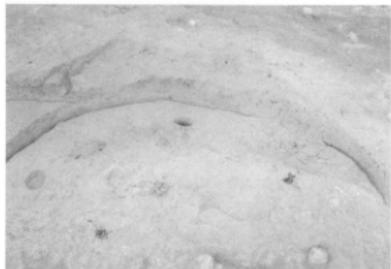
写真図版24



SH09・SH10 全景（南から）



SH09・SH10 全景（西から）



S H09 床面焼土の状況 (南から)



S H09 床面焼土の状況 (南から)



S H11 全景 (南から)



S H11 P02 (南から)



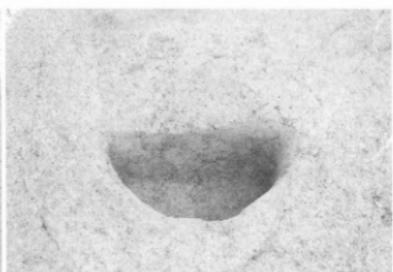
S H11 壁溝 (南西から)



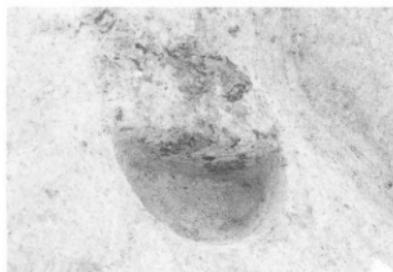
S H12 全景 (南から)



S H12 P01 (南から)



S H12 P03 (南から)



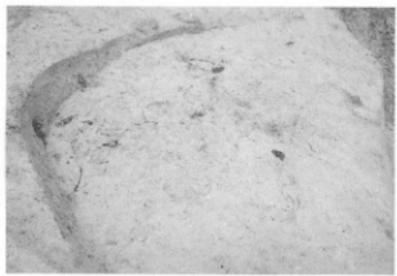
S H12 P02 (南から)



S H12 壁溝 (南から)



S H13 全景 (南東から)



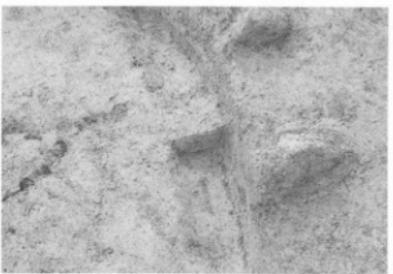
S H13 床面焼土の状況 (東から)



S H13 西側壁溝 (北東から)



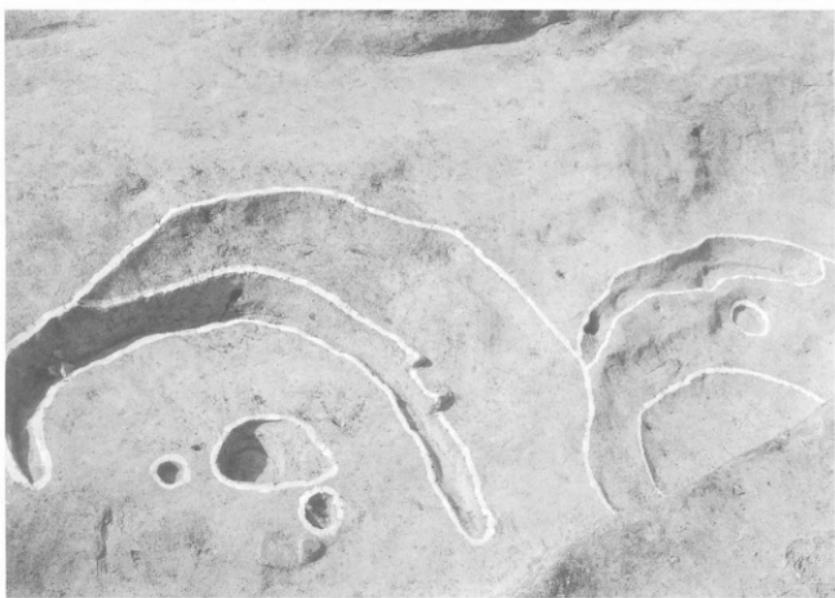
S H13 中央土坑 (北東から)



S H13 北側壁溝 (北東から)



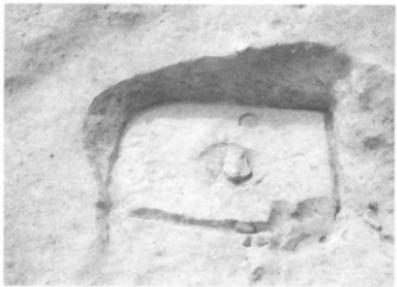
SH13 全景  
(後方 SH12、北東から)



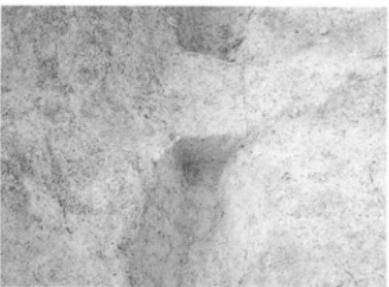
SH13・SH14 全景 (北から)



S H 15 全景（東から）



S H 15 床面焼土の状況（東から）



S H 15 壁溝（南から）



S H 15 焼土の状況（南から）



S H 15 全景（東から）



S X01周辺 堆積状況（東から）



S X01・SK01（東から）



S X01 堆積状況（東から）



S X01（南から）



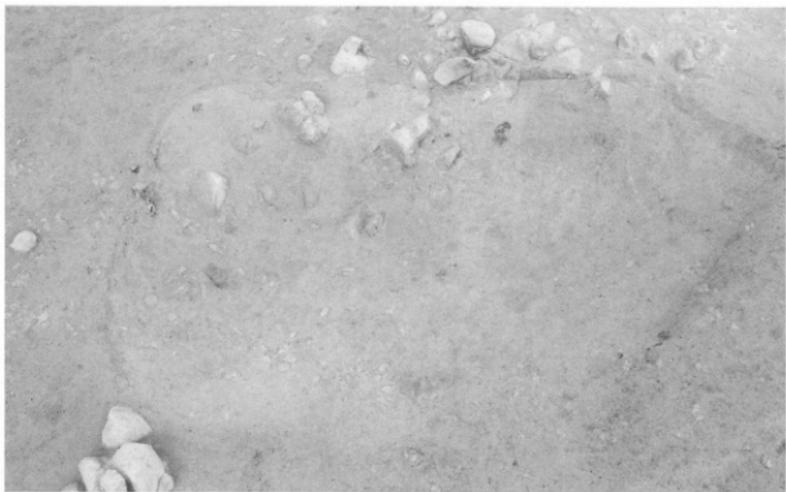
S X03 (南から)



S X04 (北から)

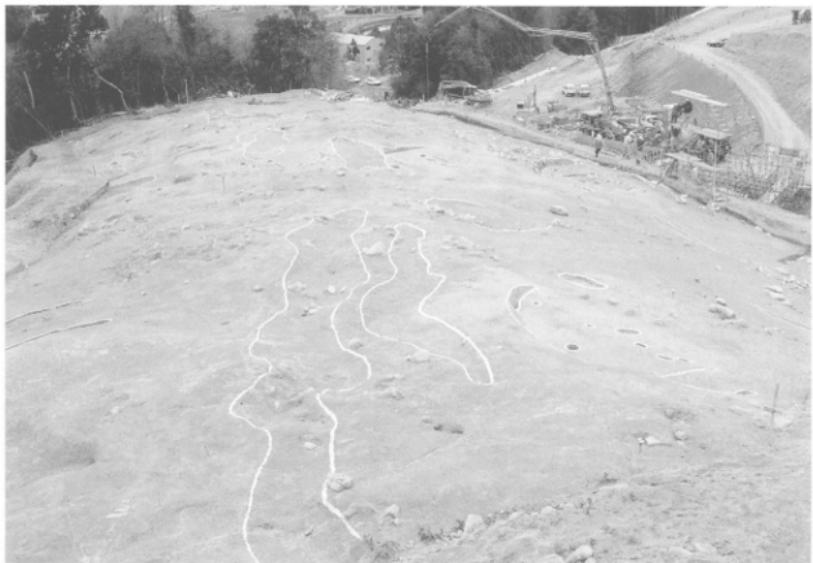


S X07 堆積状況 (南から)



S X07 全景 (西から)

写真図版32



SD01・SD02・SD06 (北西から)



SD01 (北から)



SD04 (南から)



SD02 (南から)



SD04・SD07・SD08（南から）



SD08（南から）



SD10（南西から）



SD09（南西から）



SD11（南から）

写真図版34



S D09～S D12 (北から)



S D09～S D12 (南から)



S T 01 (南から)



S T 01 (蓋除去後、南から)



S T 01 (西から)



S T 01 (東から)



SK01 堆積状況（南から）



SK01 全景（東から）



SK01 全景 (南から)



SK02 堆積状況 (南から)



SK03 (南から)



SK02 (南から)



SK04 (南西から)



1



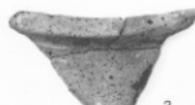
3



4



2



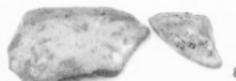
2



5



7



8



11



9



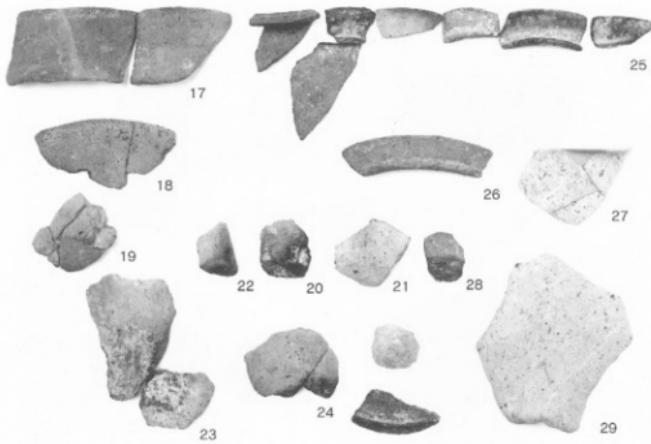
12



7



出土土器(1)



出土土器(2)



30



31



32



33



36



35



34



37



40



39



38



41



42



46



43



44



45



47



49



48

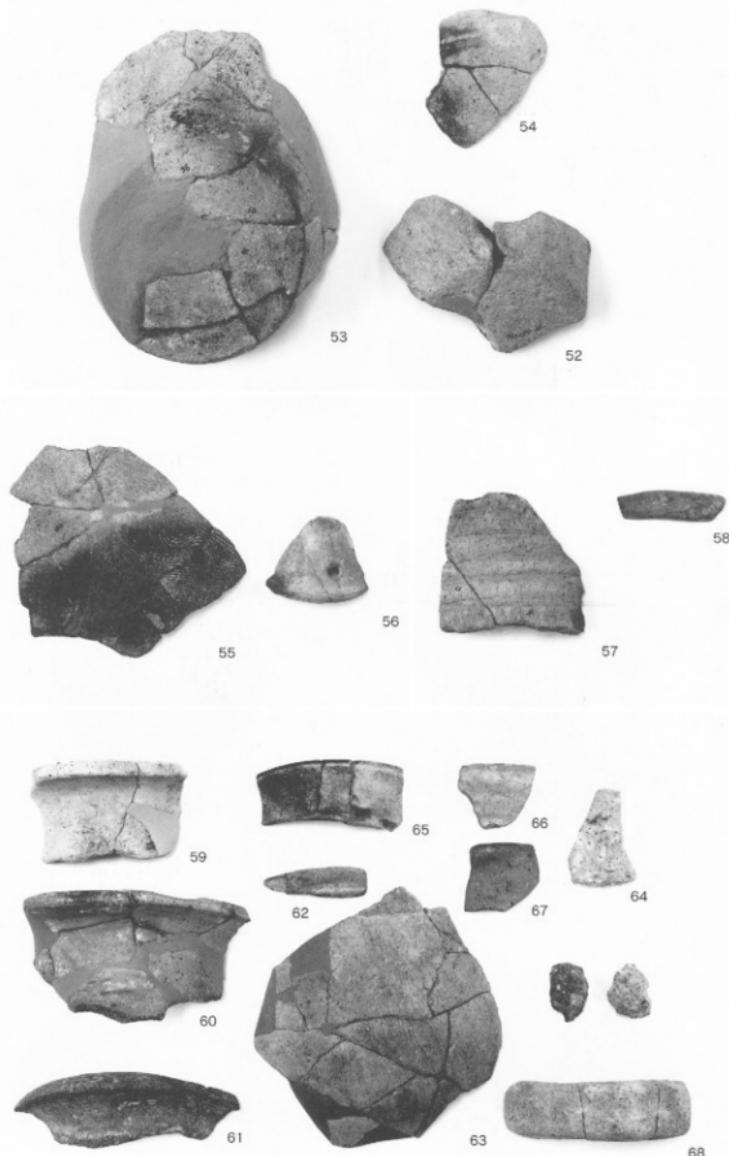


50

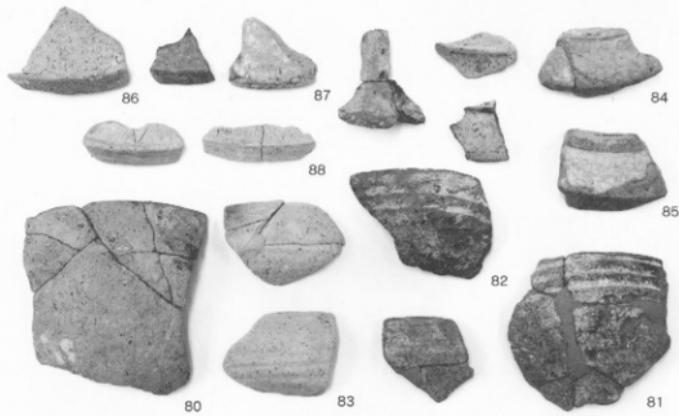
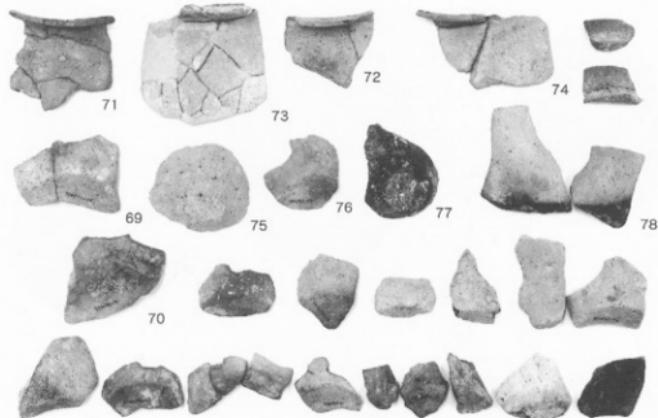


51

出土土器(4)



出土土器(5)



出土土器(6)・鉄器



S1



S2



S3



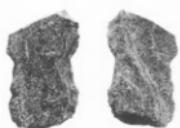
S4



S5

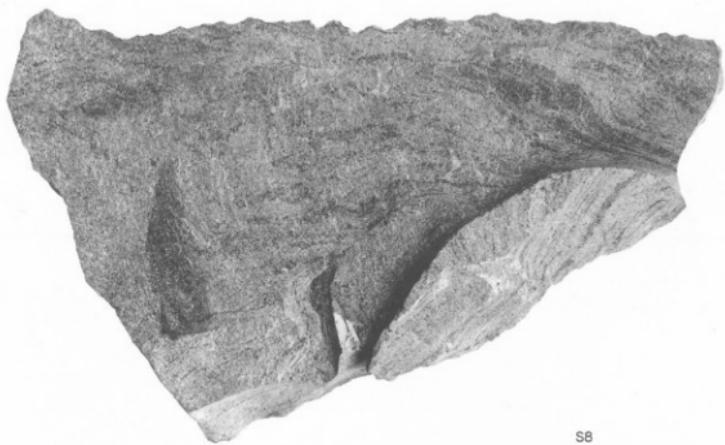
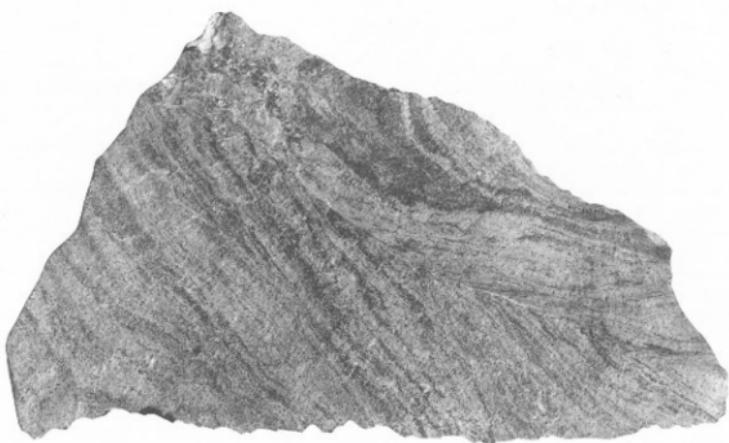


S6



S7

出土石器(1)



S8

出土石器(2)

## 報告書抄録

ふりがな	たけはらなかやま								
書名	竹原中山遺跡								
副書名	山陽自動車道新宮インターチェンジ建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4								
卷次									
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告								
シリーズ番号	第295冊								
編著者名	山本三郎・甲斐昭光・渡辺 昇・(株)パレオ・ラボ								
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所								
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078(531)7011								
発行年月日	2006年3月								
所収遺跡名	所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号					
竹原中山遺跡	兵庫県龍野市揖 西町竹原字中山	28229	990266 990299	34° 50' 20'	134° 29' 12"	1999.12.6~10 2000.1.24~3.8	確認 307m <sup>2</sup> 本発掘 1,692m <sup>2</sup>	山陽自動車 道新宮インタ ーチェンジ	
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物			特記事項	
集落跡	弥生時代		竪穴住居跡		弥生土器・石斧・石鎌				
	鎌倉～室町時代		溝		須恵器・土師器				

---

兵庫県文化財調査報告 第295冊

たつの市  
竹原中山遺跡

2006年3月14日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所  
〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

発行 兵庫県教育委員会  
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 鮎成社  
〒651-0094 神戸市中央区琴ノ緒町1丁目5-9

---